上へお婆さんに子供よ道具抔を乗せてお百姓が二人許りで漕で來る所へ流れて助け船エーと言ふ聲に　百姓「ソレ助けろと深切ナお百姓で手を持つて三人を漸く引上げて先づ無事で親子の者を森庄五郎が助けました是からお上屋敷へ連れて參るやうよあり其のうち出水だから十日も經升と穩かよあり命の親だのら森さんの所へお禮に往かれゞ濟あいと言ッてをりましたが娘ゲ氣落をして藥を服み休が惡いので大きよ日も遲れましたゲ結構ナ經節の折よ白羽二重の反物を包んで母おすみい下男を伴れて娘と共々森の家へ參り玄關から案内を乞ひ　女「ヘイお頼みヤ升　庄「傳助い居りませんか　母「傳助い居りませんか　庄「これい宜うこそ五郎が玄關の三疊の所へ出まして　女「誠よ御無沙汰を致しまして早速お禮よ上りませんけれゞもあります所を少々娘が氣落を致しまして不快で存じおぐらお禮が延引にふりまして　庄「マア〳〵御無事で喜べしうございます升祖母アもお案じヤ上て居り升マア此方へお通り遊べせ　女「御免遊べしませ　庄「誠よ見苦敷ございまして此の通り掃除が屆きませんで　女「何う致しまして何とも今度のことい お禮のヤ上樣もございません早速國表へ手紙を出した所の彼地からも喜びまして能くお面よ掛ッてお禮をヤ上る樣に何分主用が多端で詳細書面い出せあいから貴公樣へ宜しあよ御傳言致す樣にと六郎から書面も參りましたソレも御覽よ入れたし實に此度い 妾も其後い大方惡い水でも呑ましたのだらうとお醫者もヤ升が快氣ございませんで御無沙汰を致しました何ともヤソウ樣もございません　庄「何う致しまして誠よ宜いまア御運の強いので實に此度の洪水い思ひがけあいことで祖母アよ聞さ升と斯う云ふ洪水い覺えゞあいとヤ升……お祖母アさん〳〵　婆「ハイと出ましたのい隱居お種とヤシ庄五郎い兩親が早く死去をして此老母お育られ六十九よあり升人で其所へ出てまゐりまして其時女房い老母に向ひまして

女「御老母樣御機嫌宜敷う　母「誠よ御無沙汰を致しました此度い怪しからん洪水でございましてモウヲあなた樣私も此年迄覺えません事で、イヽエ最う何う致しまして能くお助けヤしたト庄五郎よもヤ聞けました、マア〳〵何方でも一ツ御屋敷中よお怪我の無のい此上もあい幸ひのことでございます升、何う致しまして、ハイお互ひ樣の事でヲあなた樣泳いヲ庄五郎い幼年の折から上手でございましてヲハア……ソレ故水練の家柄で血脈を引て居るのら習いまして上手だと森川さん抔が仰るので　女「有難いことでございます升　母「何う致たしましてナぜ左樣ナ御心配をおさい升　女「イエこれい到來合せでございい升些少ナ物でございい升が何卒ホンの志計りで御笑納下されゞ有難う存じ升　母「イエ戴きません此事よ就ていお禮を戴く道理いございません一ツ御屋敷よ居ましていお互の事で左樣ナ事いありません、戰爭でも有ますと致する い當然のこと　女「何卒左樣あ事を被仰ずよ　母「イエ〳〵戴きません、此マア結構ナお反物を頂戴致ましてい却て庄五郎の深切が無ふあり上へ聞えても宜あい……チヤン〳〵おかの樣大層お身大くお成遊べし誠にお評判の宜お娘で御孝心で毎度お噂をヤて居り升近頃いお快うございい升か噸まァお驚きでございましたらう誠に艮いお娘樣で只今生憎ナニカ……しげやアノお茶を　女「何うぞお掛け被上ずよ、左樣仰つていお困り升折角の何で何か　母「イエ夫い戴きません

お助けヤタ事い不思議ナことで是が因緣とでもヤませうか人い助けて置度ものでございまして私共の庄五郎が貴女樣をお助けヤたのい不思議ナ事で私共の先祖の森庄五郎が洪水のときヲ

貴女方の先祖の河野六郎様お助けて頂きましたことが有り升　女「ヘイそれい何う云ふ　母「私も存じませんが恰度其年から百二三十年前寛永四年八月洪水のとき素と猿楽町よりお屋敷がございました頃貴女權現堂が切れまして九段の下迄水が參りましたと其時の洪水い一ト通りナラン洪水で人家を押流しました事い夥たゞしい事で、其時に先代の森庄五郎が片方の手に大小と系圖書を持ち片方の手に年取ッた母を抱へまして泳が達者でございましたら泳ぎましたところが段〳〵身体が疲れて最う仕方がないから大小と系圖を捨て母を助けたいと思ふと系圖大小を捨ますれバ家が絶ゑ升あれども系圖大小を厭ひ升れバたつた一人の母を見殺よしあけれバあらぬ何うも致し方がないと思ひ系圖と大小を捨て母を抱て漸く九段の上へ泳着きましてそれであるた母い助りましたがお屋敷を暇おおうましたる不恙の至りと中て暫く涙人して居りました時貴女様の御先代の河野六郎様がそれい孝心者八命よい代へられない母を助けたい爲よ系圖と大小を捨ましたい孝心でございい升お役立べき武士だからお取立を願ふと云ふので召し返しよあつて新知百石を頂戴致しました固い三百石でございました只今百石取りの身上で居られ升のい貴女様の御先代河野六郎様の庇蔭様夫ゞ百二三十年の後ちよ又水で貴女様をお助けやと云ふのい是れい寔に不思議と庄五郎よもや聽け升これ女房も始めて聞まして　女「ヘイ、始めて承はりましたが夫ハあなた様命をお助けやたので居ますがおかのさまゞ來て下されバ私も安心致し升早く極ませんと私しも來年い七十よあり心配でございい升から何卒あなたヂ少祿者で御意よい入り升まいがおかの様を庄五郎の嫁に下さる譯よい參り升まいか　女　誠よそれい有難い事でいございい升が緣付のことでございい升かまません　母「何の其所いおかの様よお聞遊しんあに醜い男でもない慾目かい知れんが世間様で好男〳〵と言ひ升し劍術い可成り出來升水練餘程上手でございい升殊よあなたヂ柳島の御隱居様い遊藝が御好で被爲入ッて私共の本夫抔も時々御對手で三味線位い彈升し横網よ坂田仙四郎と中長唄の名人がございまして夫よ稽古を致升のを自分で聽て覺て眞似を致升が習よせずとも節もうまし聲も宜ございい升要アがボッ〳〵三味線で時々よ小聲で遣升が美聲でございい升じやア有ませんか貴嬢さへ宜いと仰やれバ直よ極り升　女「誠よ彼の通り顔を赤くして居り升六郎が國詰で居り升から歸宅の上一應六郎に申聞け、否と中す氣遣い有ません其の上確あ取極をし致し升　母「左様被成ッて下されバ私し死ンでも浮み上り升　女「最う遠からや歸りませうゾヤ今日い是でお暇致し升　母「夫でい是いお歸り迄結納代りとして頂戴致し升　女「左様先へお極め遊ばしていゝ　母「イヱ私しの方でい結納の積りで、と老母い喜び、御新造も娘と共よ介を助けられ

何方かへ御緣組がございい升か　女「ハイ未だ年も參りませんし、何方へも相談い致しません　母「そんあら願ひたいもので何うせ他家へ御緣付きにある嬢さまあら庄五郎い誠とよ幼年の時分うら兩親よ分かれて親あし子で婆アの丹精で是まではよ致しました何うか良い嫁を娶りたいと存じますがおかのさまゞ來て下されバ私も安心致し升早く極ませんと私しも來年い七十よあり心配でございい升から何卒あなたヂ少祿者で御意よい入り升まいがおかの様を庄五郎の嫁に下さる譯よい參り升まいか　女　誠よそれい有難い事でいございい升が緣付のことでございい升かまません　母「何の其所いおかの様よお聞遊しんあに醜い男でもない慾目かい知れんが世間様で好男〳〵と言ひ升し劍術い可成り出來升水練餘程上手でございい升殊よあなたヂ柳島の御隱居様い遊藝が御好で被爲入ッて私共の本夫抔も時々御對手で三味線位い彈升し横網よ坂田仙四郎と中長唄の名人がございまして夫よ稽古を致升のを自分で聽て覺て眞似を致升が習よせずとも節もうまし聲も宜ございい升要アがボッ〳〵三味線で時々よ小聲で遣升が美聲でございい升じやア有ませんか貴嬢さへ宜いと仰やれバ直よ極り升　女「誠よ彼の通り顔を赤くして居り升六郎が國詰で居り升から歸宅の上一應六郎に申聞け、否と中す氣遣い有ません其の上確あ取極をし致し升　母「左様被成ッて下されバ私し死ンでも浮み上り升　女「最う遠からや歸りませうゾヤ今日い是でお暇致し升　母「夫でい是いお歸り迄結納代りとして頂戴致し升　女「左様先へお極め遊ばしていゝ　母「イヱ私しの方でい結納の積りで、と老母い喜び、御新造も娘と共よ介を助けられ

た庄五郎の家へ嫁よ遣ッても宜いと喜ンで宅へ歸りました、是から折々庄五郎の宅へ娘も來る庄五郎もおかのゝ手を引て龜井戸方りへ連立て歩行升此方も言号けの本夫と思つて子心よも思ひ替らぬものでこれから三年めの六月中旬に六郎い江戸お屋敷へ歸りましたが歸り早々御用繁多でございまして其中へこれ〳〵と老母ゞ達ての頼み共言兼て居ッタが然のみ悪くもあい縁と心得ましたから六郎歸宅の上ヤ聞様と妾しが言延て置きましたゞ如何致しませうと云ふとそれい至極良い縁だ早々取極るゞ宜いとの挨拶ゞあつたから御新造い喜びまして老母へ返答を致しましたら老母も喜びまして早く結納の取替せを致度とヤして居り升

第一席

其翌年い寶暦二年でござりましたが殆ど三月十八日晩方よ六郎ゞ御殿から歸りまして　六「ハイ只今歸りました　女「大層お遅うございい升から心配を致しました　六「お番引よ一寸笠原殿の所へ呼れましたが、幸ひのことで斯う云ふ譯で笠原殿の親類が輿樣の里方の大和公の重臣で福永忠太夫といふ者だが其長男の忠之丞と云ふ此年二十六才だとヤすが中〳〵逞しい武士何事も年よ似合ず秀てあるゞ彼の者が此の春とかりのが羽根をついて居るとき笠原殿へ年頭に來て見て良い娘だ貰い度と伯父の笠原殿へ左樣言たさうだ、夫で貰ッて遣らうと受合ッたとかいふので重臣の笠原ゞ手を下てヤ娘を遣て呉んかとのことと、良縁であるしされバ國よ居る左七郎の爲よも宜敷から左七郎よ於ても否いわるまいシ、確とお受を仕たら向ふでも急ぐ容子早く結納の取換せをせんでいあらぬ相當の扮裝もさせあけれバあらぬが此上もあい實よ何も忝ないことでかのを呼んで篤とヤ聽た方が宜からう　女「夫い和郎いけません　六「ナゼ　女「ナゼだつて和郎森庄

五郎殿方へお遣り遊バす約束よあつて居り升らお歸り遊バした時よ洪水のとき助けられた恩義があるし向うでも懇望致し升から娘を遣りませうか如何致しませうと伺ひましたら貴郎い至極宜い縁談だから取極るゞ宜いと仰つて森庄五郎方へ直ぐ其足で參て約束しましたものを今よあつて他へ縁付ましていい森へ濟みません　六「森の方を斷いつて仕舞へ何も　私ゞ極た譯でいあるし女同志の口約束結納を取換した譯でもあし福永方へ遣るゞ宜い小祿の森へ縁付ることといあい確とお斷ンあさい　女「そんナお無理を仰やつても斷り樣いござい升ません六郎確と承諾致しましたと老母へヤ聽け同人も喜びまして私も安堵して死ぬれ升とヤて居るに今よあつて六郎ゞ不服でござるといヤせません　六「ヤされん事いあい結納を取換せた譯でいあるし向うでも懇望致し升から娘を遣りませうか　女「デハござい升が命を助けられました恩人でいございませんか　六「命を助けたと言ても言ぃ先代が森の家を助けたので殊よい先代が森の家へ飛込で助けたのだ其れで義理ハ差引とヤすものゞ事もある恩報を向うでゐたのだ其れで義理ハ差引とヤすものゞ　女「左樣お事をヤ意遊ばしても私い參られません、參られぬ事いあります、實い其時六郎が歸宅れ節一寸ヤた所六郎も歸り早々混雜で居ッてヤ誤ッたと言へバ宜い、小祿者の所へい遣りません。次の間よ今年十六よあるおかのゝ情けあい父親樣の思召だと發明あ娘でござい升から其所へ出て參りまして の「父親樣お歸り遊ばし　六「テ、遲くなりました、今母親樣よナヤ聽たがナお前を江戸見坂の福永へ縁付る積りダヨ尤も笠原の頼みで當家の重臣笠原がナお前の日頃行狀の正しい所から望まるゝので此上もあい縁談殊よ兄さんの爲めにもある事實に有難い譯早速母親樣と相談して着物や何の嫁入の仕度を爲あけれバあらぬ　かの「父親樣　妾い福永へ嫁升のい否でござい升森樣

へ嫁るは約束を致しましたのら何卒森様の方へお遣り遊ばして下さい　六「左様ナ事を言つては困り升左様云ふ譯には往きません先方へ升ト確と承知したとお受を爲ましたのらヂ是非笠原へ往かなければありません　かの「父親様へは辭を返していい濟みませんが他の事と違ッて緣談の事をお約束遊ばすのよ妾しに一應のお話しもあくは一存でお取極め遊ばすとい如何に父親様でも些は我儘かと存じ升　六「夫いそれよ違ひないけれども是が他でない十五万石の重臣の所へ嫁入といふのい實に何も先祖へ對してもお前の孝道にもある實よ此方の家の爲とい存じません、一端お約束して置きあがら森様い方を斷つて福永とやらへ嫁り升と福永の千石森庄五郎様い小祿だから約束を違へて他へ緣付た慾の深い武士だと父上を世間の人よ笑はせる様なことで却つて先祖の苗字を穢し妾しも父親様へ却つて不孝よ當るかと存じます　六「それい左様だがヂ困り升ヂ左様な事を言タッて、森の方いまだ確と約束した譯でない、左様じやアないか　かの「イヽエお約束被成ました、先きのお祖母様もお喜びでございまして、安心したと云ふお言葉を母親様も妾しも伺ひましたよい意遊びした事がございい升ヂ　六「それい左様言ひましたからッてそれい其内話丈の事で森と何も取極た譯でいない其譯據にいまだ結納を取換した譯でもない　かの「それでい武士よ二言ありとヤす事い嘘のことでございい升かヂ　六「何ヂ　かの「父上が良い緣だから早速取極るが宜いとは意遊びした父上のは言葉い内話丈けい嘘をは意遊びしても表向計りでございい升か、常々父上がは意遊ばすよお前が成人の後い他へ緣付るが緣付て子供を設けても小兒に偽りを言ッて育てると其子い必らず嘘つきふあるから親い子供を偽り欺くものでない偽ると其子が慣れて必らず偽り者にあると御意遊しましたことを妾しい能く覺へて居り升　六「それい左様かヂ　かの「父上が良い緣談だのら早速取極る様にと御意遊ばして置てそれい嘘だ福永へ嫁入と仰やるのい父上い子をおだまし遊ばすとヤす者左様致すと妾しも疇着す事を覺えてハイ福永へ嫁入と父上をおだましヤて森様へ參るかも知れません父上が嘘をお吐遊びすのだから疵とお斷りヤて置き升　六「困り升ヂ何うも誠おどうも、ダガヂ、是がヂ能く考へて御覽お前の爲を思ひ此家の爲をも思ひヂ　かの「私しの爲又家の爲を思召すあらナぜ森様の方へ行けと父上い仰やいません　六「森へ行くのい爲にあらぬッヤアないか　うの「偽り武士と人に言はれませう　六「何を　うの「河野六郎い役柄をも勤めあがら人を欺き慾ぁ迷ッて森を變換して福永へ遣つたと人に言はれ升と父上の御恥ばかりでおく殿様のお恥よもあり升から私しい死でも福永へい參りません何卒森へお遣り遊して下さい。と十六にある娘が浮涙で親の心得違ひを責て異見を述ましたから六郎い茫然と致しまして　六「困り升ヂ　女「何を和郎お困り遊ばし升ト女房と十六よある娘よ遣り込められて仕方がないから笠原主膳へ猶豫を願ひ何分娘が年智惠の足りない人と見へ娘お遣り込められて　六「何うか先方へ話しの致様いかいのウ、と六郎い少し額へ筋を出し鼻の頭へ汗を出して　六「何うもゆかぬ頭是がござい升ませんから恥かしがつて居るからとヤすと笠原もまァ〳〵急ぐ譯でもないから當人の得心の參るやうよ薦めて下さいと言ッて居りました然るよ六郎が不圖慾心を出しまして是から森庄五郎を憎むと云ふ夫が爲めに森庄五郎が大難のお話しい其年八月十五夜よ江戸見坂の松平大和公が奥方と御同道で柳島ある津輕公の下屋敷へ御客來にて恰ど月見の催しありて庭よい秋艸の花壇を出來へ大和公の御供よ召連られしい福永忠之丞親子早川左中甲田主水

抔といふ何れも重役の人々亭主方い津輕岩松様御夫婦笠原主膳河野六郎添田義右衛門近侍若侍の銘〳〵ヅラリと居並らび大和様を饗應で多勢出でられまして老女中老お側お次小姓お彼番御仲居お末までが皆出ましてお賑やかあことで晝の中いお慰みよ横網の坂田仙四郎富士田吉次抔と申す長唄うたひもお招よあり夜に入て月の上る迄繋で居りました、すると河野六郎が思ふよ確の森庄五郎い長唄を遣るそうだ彼れを殿様よりお好と言て欺て彼奴好だからは前庭で長唄を歌はして赤恥を掻して遣らうと考へて笠原主膳とコソ〳〵歸と主膳い苦笑ひして居りましたが其頃の御大名様い只今の華族様と違つて重臣の言ふあり次第で殊よ津輕岩松公いお年若だから笠原の言ふとい能お採用であり升から笠一上へ申あげます庄五郎儀い長唄が至つて上手と云ふとで武士よ似合ぬこと殊よ美聲で勿々商賣人も及ばぬ位ゐで就てい坂田仙四郎も參ッて居りますが仙四郎の門人におつて居る左様で御座れば客來のお慰みよどうか一段長唄をお聽に入れ度と申當人達てのお願で御座いますが庄五郎い長唄が上手か其れい宜からうと被仰是から六郎よ歸くと河野六郎點頭て森庄五郎の居る所へ參つてよお上い御存知で大ぶ長唄が得意と云ふ譯で笠原へお言葉が掛りお好みであれば長唄を一段唄へといふ被仰付だから支度を被成い森「先い何うも誠よ赤面の至りで上の御意でもあり升ば其儀い何うか夫い人の噂で左様あることい存せぬとお斷を願ます六「左様い往ン御意で御坐るぞ森「ハッ、ヽと重役の言事い無理でも辭い返せません下役の悲さ。何う致さうと十方に暮れたが遣らおければ尚更不興にあると云ので氣のあい顏をして坂田仙四郎に相談すると仙「お遣り遊ばせ貴郎のお聲あら大受でございませう三味線を合して居る詮方がおく庄五郎が厭々出ますると歌ふとい面白い至極宜からう、抔と仰せられ升と又女中衆い囂々致します男が美つて當よ柔和だから奥向の評判の宜い其庄五郎が御前よ於て長唄を歌ふと云ふので女中衆い大騒ぎで中にもお末抔が屏風の蔭でチウ〳〵鼠あさをする轉覆るやうお騒ぎでござり升其時鷲娘を一段唄ひますと如何にも聲が能く節が上手で天然に備いる藝で御坐い升大和様を始め奥方幷びよ津輕岩松様も實に感心しました自然の藝で佳いものだと大層御意に入て最一段〳〵とお好みが出ました跡い七福神抔をやると大して評判が宜いので大きよ六郎い當が違ひましたから尚々殘念に心得彼奴あれ丈け藝が出來るから武藝の方い不熟だらう幸いひお供に福永忠之丞が居るゝら試合して御前よ於て彼奴が素首を打破らして遣らうと考へた悪い人い悪い人でありす願はくい武士の持前武藝を御前よ於て升又笠原よ言ふと直に殿様へ申あげ笠一庄五郎義遊藝をお聽に入れまして恥入る義でございま年頃も似合であると忠之丞と試合たいとしますが如何致しませうと言ふと殿「それい却ッて宜からうと主膳の言あり次第で六郎よ告ると六郎い臆て庄五郎の側へまゐり六「何んとも恥ぢ入ッた儀で油汗が出ました六「唯今お客様がおつしやるよい彼の位ゐで武士よして遊藝が出來る位ゐでい万藝よ達して居らうから武藝い尚更だらう却ッて勇ましく御

覽よ入れる方が宜からうから武藝を見度と被仰る又お供の福永忠之丞殿あれい忠太夫殿の御子息で可ありよ出來ると云ふがやんのお興で一寸木刀の試合をと仰られたのら早速仕度をする樣に　森「何か其儀い平よ何卒御免を　六「アレサ夫い往ン遊藝計りで武藝の心掛けが無けれバ當家の恥外聞で御座るこれを辭退致す事いありませんから取急いで支度を被成上意デあり升ぞ　森「ハッ〳〵宜う御座い升と御受を致しました庄五郎い發明の人でありますからお客樣のお供の方と試合をして向ふを打負す時い御不興おありいせぬかあれども自分の負る時い御當家殿樣の恥辱よあるとでおるが初めての試合で位ね取も分らぬけれどもせめて合打位ねの事で濟樣に致度ものと思ひ實曆時分迄い素面素甲手の立合がありましたさふで御座り升木刀を持て只今の形のやうあるものですが是い位ね取が互ひに同じ樣で無けれバポカリ退る踏込ボキンズンボカと云ふ譯よい往かぬ勿々口で言ふ樣おゝ譯でいありませんから双方何れも額に筋を出しまして殊よ御前で皆〳〵も見物お出ると云ふ下役の衆い莚蓙を敷て家中の御新造や孃樣も皆拜見に出まして殿樣奥樣いお喜ひでお大名でも我々でも變りいござい升ません長唄の跡で劍術ですから演劇の跡で角力を觀るやうお譯で面白いから進み出て見て居る折から御免を蒙て双方とも襷を綾どつて袴の股立を高くとりあげ小短い木刀を取て福永忠之丞と森庄五郎が庭先へ出まするとも、何ごとか下役の衆にい順と分りませんから種々の評を致して居り升　士「杉山　杉「ア、　士「何ウ云ふ譯で試合におつたか　杉「何ウ云ふ譯か御前のお好みだとヤのさ　士「イヤお好みでいない左樣ダ何か深い譯がおるに違ひない何でも御前のお好みでいない何う云ふ譯の全体何も宜敷ないお供と當家の家來と立合をするテーのい何の道何か譯がおるよ違ひない長唄も森氏い遣り度いないと

云ふのを殿樣が是非お聽被成度と強て出されたのだらう長唄で御意に入てお慰みい濟んで居るよ又劍術ナンテーお何もコッ〳〵と堅過ぎて宜敷ないお慰みが濟だら彼れで宜シヤアないか杉「そんな事と言たッても我々共の自由にいおらぬ皆重臣方が附て入らッしやるから　士「重臣ダッて彼の笠原の意地の惡い顏付の惡々敷些と下役と見るとけん突で笠原を見ると何とも厭な心持ちがする同じ笠原でも銀座の藥種屋とい大違ひだ　杉「其ンナ事を言て宜敷ナイ　士「森氏い遊藝い彼の位ね出來るが武藝い手前どもの考へでい些と拙だらうと心得　森が負れバ當家の恥辱だから止た方が宜敷福永い大きナ奴で眞黑で肥滿して居るから強いよ違ひない向ウの流儀いないんでせう　杉「今井田流だとヤ事さ「宜敷ないことだ、抔といろ〳〵よ傍觀のものが心配して居ります其うちおも特よ心配致して居りました河野六郎の娘ふのので御座り升るア、情ない父上樣が緣談の事を私が不承知で福永へ緣付ないのを遺恨に思ひ何も御存知ない森樣を笠原や父上樣が巧みの罠よ落し入れるといお氣の毒ナ森樣に何うかお怪我がおけれバ宜いが箇樣な事にあるも皆　妾　もゐ御恩人の森樣に怪我をさせていい濟ないとホト〳〵しながら涙浮で莚の敷てある御新造樣方や下役の人が居る所へ見へない樣よ　跼で居りますと其中双方御前庭へ出ました福永忠之丞い仄よ聞たが此奴が河野六郎の娘を貰うと云ふ約束があつて此奴があるから緣談も調いぬとの事憎い奴と最どうもナン〳〵が餘やど逆上懸の遺恨いひどい物で素首を打碎了見で木刀を取つて、ヤアット上段に擡へるとピタリッと正眼につけました位ね取が分らぬかゝ互よ容易に打込ことが出來ぬでヤット只双方睜合て居り升ますて呼吸が一ッにある位ねで見物い一同にウーント意氣を入をる妙ナもので情合で御座いますから岩松樣い何か庄五郎に勝たし度と

思召これゝ自然わり升事で肩を怒らして見て居ります大和様ゝ何うしても福永忠之丞に勝し度と思召これゝ君臣の情で御敷物から膝の進むのをお覚えのあゝ容子只心配あのゝ津輕様の奥様ゝ大和公うら御縁付におつたから何方等が負ても宜心持でゝあいから何うか兩方勝てゞ宜と思召。さうゝまくゝ往きません互に意氣を張り詰ました時ゝ眞ゟ爾然として見物して居ります下役の者ゝ分別もおくゝお饒舌が多いから　下役「何だ貴嶋氏　士「また出て來たヨ驗々敷ヤナ　下役「うまいものダ森ゝ感服ナものだ　士「何ヲ　下役「森ゝ感服ナものだ遊藝が出來て其上此位ゐに武藝が出來ヤウとゝ思いおかつたヨ攘ひが巧いから打込ぬ腕ゝ宜に相違あゝ間隙ゝありませんが何も向うゝ如何ゟも力がありますヲ彼の肥滿でどうもポント打込と受る木刀がポキッと折ヤア爲あいの　士「そんなことを言たつて勝負ゝ時の運で　下役「何かスッカリ森を勝たし度いが色の白い細りした華奢だからあんだら太のがぶつかゝつて居るがプッかけゟ森だから勝まい　士「マタそんナことを言ておぞといろゝお事をヤて居るうち間隙があつたか福永が打下す所をポキンポンゝゝと二ッ三ッ打合と氣合の機會でピタリッと切さきが擦り合ゟありました少しくきつさきが合てピタリと×斯うおつたときゝ取位が六ケ敷のゝ向うへ押すとも退くことも出來ません忠之丞庄五郎の兩人ゝ互ひゟ唯々透を窺ふのみ是ゝ左樣でございませう六ケ敷ものゝで向ふを打うと思ふと打たれる又退うと思ふと打たれる押うとしても打たれる向ふの氣合が緩ンだ所をパッと打込まおけれバおらン双方ウンーとサア左樣成ると何うも殿樣もお褌の半をお辷り遊ばして老女抔ゝ心配致して芋蟲コロゝゝ見体ゟ段々ゟ前へ出升る下役ゝ倘の事だ　下役「溜らぬ抔と確ッうり掌を握つて居りまして油が出まして　士「駄イナ人の袴で拭奴があるものか　下役「溜ヲ

ン何うしたッてどうもグッといきを呑み込より仕樣が御座らんて　士「左樣どうも饒舌てゝ見る事が出來ません　下役「何地ぞ退きませう　士「何方ゟ退升る小蠅ヂと種々の雜言をして居る心配あのゝ河野六郎の娘おかのゝで何も森ゝ危險と見て居るうち森の方ゝ劍術の年効が足りあいからザリ、ゝゝと少し斯う跡へ退る樣子で退るのゟ弱いのか抑切のが強いのか頓と分りません又とおかのゝ心配して涙組ンで思ゝず知ヂ足をいざらしてお下役の衆が居る所を押分て滑縁うら芝生の所へズルゝゝとズリ出して行ましたから　士「アレヤ誰だ彼所へ出たのゝ河野樣のおかの樣お白粉を着て美麗姿で段々前へ出ましたから　士「浮雲ゝゝおかの樣前肥田が前へ廻つて見てゝ相撲や劍術ゝ機會だから浮雲此でいあいか宜敷あいヤ　士「浮雲ゝゝおかの樣前へ廻つて見てゝ相撲や劍術ゝ機會で頭上を張飛されて打裂た事があり升よ浮雲ゝゝ　士「おかの樣ぶのう御座いますと言ふ中ヂリ、ゝゝと森の方ゝ少し押れる容子すると思ゝず知ヂスーとおかのが起て平骨の女扇を持て見衆ましたから福永忠之丞の横面をポカッと打ましたからハッと思ふ所ゟ透ゲあつたから森庄五郎肩の所をポカ　忠「マイッタ、福永の負ゟ成りましたが合手ゲ三人に成りましたうら蹴樣を始め皆どうも實ゟ驚ろきまして爾然として仕舞ました福永忠太夫憤たのナンのと自分の子が打たれたのであります彼の如く横合から出ましタ婦人ゲ面部を打ましたから驚ろきました所を森ゲ打ましたので邪魔をしたものが御座ります、福永忠太夫ゝ河野六郎が娘とゝ存じません　士「と大和樣ゝヂリゝゝ入れたものが御座ります、福永忠太夫ゝ河野六郎が娘とゝ存じません　大和公「アレゝ何者か彼の婦人め折角の立と癇癖ゟ障ッて重役に言ゝれると直ぐ其氣におつて合へ邪魔を入レあれへ出たのゝ何ものかとの御意でござり升すると御客樣の被仰る事で津輕岩

松様も捨てゝ置うれぬうら　津輕公「コレ主膳〳〵彼の者ゝ目障りだナゼ邪魔入れた〳〵と早言でッカ〳〵と言はれたので主膳もハッと心得ましたが其の場に居られませぬのゝ河野六郎現在自分の娘が邪魔を入れたので恐れ入て椽端へッカ〳〵と出まして　六「コリヤかのコレへ參れかの「ヘイ、大概の娘あれゞ慄へて前へ進む事ゝ出來へズウーと出まして芝原へピッタリ蹲居て恨めしそうに親六郎の顏を見詰て居る眼ゟ一杯涙をためて居ります　六「コレ今日の立合ゝ容易あらぬこと殊にお客樣のお供忠之丞と森の試合何ンデ邪魔を入れた殊に婦人の身の上甚だお目障にあつて御不興至極恐れ入たことで有ぞ何故邪魔を入れた、と打も縛りも致度樣お心持で嚴敷申ました、叱と言ふものゝ上から言いれるのゝ怖いもので御座い升がおかのゝ怖るゝ色もなく自若として答へを致し升ゃうのゝ爲の鳴く樣お和しい聲で　かの「今日のお立合ゟ邪魔を入れましたゟ相違御座いません誠ゟお興をお醒し申て恐入ります　六「ナニ御兩家樣のお爲と心得又兩人の爲ゟ邪魔を入れたと夫ゝ何う云ふ譯かの「〳〵忠之丞ゞ負を取り升と江戸見坂樣の御恥辱ゟあり又庄五郎が後れを取り升と御當家樣のお恥に相ありませうかと存じます御緣合のお間柄で奥方樣ゝ何等お勝を取らせ樣と思召す事も出來ぬ樣なお場合で嘸御心配で入つしやいませうと心得また互ひゟ負勝で遺恨をさし狹み升ると御親類のお間柄お爲めゟも相成ますまいかと心得ましたゟ相違御座いません、と其理ゝ附會の樣だゞ年ゟ似合ぬ整然と筋が立て居から下役ゝ感心して　下役「何も感服心附きませんでしたヅン〳〵と我々が仲へ這入つても其方が宜かつた事だが

勿々發明の孃樣劍術おとを習つて武藝が好さだから透を見て遣ッたんだ何も恐れ入つたアレで何も仔細ゝい、あんぞと嘲をして居る六郎も何とも言べき理由がおかつた、スルと笠原主膳それへッカ〳〵と出まして　笠原「かの只今承はれゞ御兩家樣のお爲又た兩人の爲奥樣の思召しを深く慮つて邪魔を入れたと言ふが至極尤もの樣にも聞へるが左樣あれゞナゼ森庄五郎の方を打たぬ今日お客來のお供を仰付けられて參ッタ忠之丞の面部をナゼ打た、と自分の甥を打れたから笠原ゝ尙目ゟ角を立て言　下役「あれ又笠原が出た彼で最宜のゟ何も重箱の角を楊枝で抉くる樣に年のィカンゟ似合ぬ言譯が立て居るゟ意地の惡いアレだから免職者があるのだ柿山氏抔が免職タのハアレだ分疏が立て居るにコレゝ何う夫ゝどうこれ〳〵と云へゞ彼ゝ何ダと仕舞ゟい樣に笠原が少し挨拶ゟ困りましたゟ相違御座いますもそゟ忠之丞をヤア打ました夫が切先せり合のとき扇を持て妾が覗ました所が庄五郎ゝ餘程劍術ゝ上手と見へて庄五郎の撫ひゟ卿かも透が御座いませんから打込む事が出來ませんで忠之丞の撫ひゝ透間だらけで誠に打込宜う御座いますもそゟ忠之丞をヤア打ました夫が嘘と思召すなゞゞお目の前で忠之丞殿と妾しの長刀の立名を仰付けられて下されゞ相分りますゝとゝらい事を言ました笠原ゝ少し挨拶ゟ困りました　下役「あれゞゝらい物ですナ、抔と申て居升其時大和樣ゝ御聰明の殿樣もゝそお考へ被成ッて如何にも少女の身の上で此の滿座の中を憶する氣色もなく水の流るゝ樣ゟ速かゟ言開きを致し殊に又彼の娘と忠之丞と立合せて又忠之丞が負れゞ尙々恥ゟある是ゝ立合せぬ方が宜からうと思召し　大和公「何うも有爲やつじや年も往

かぬよ感服した誰が娘か宜い娘じや盃を遣れ能く兩家の爲兩人の爲に邪魔を入れた至極有爲奴ヤと御盃をつのはされる奥樣い又奥方「能く邪魔と入れて呉れた私も心配して居つた六郎の娘との褒美を遣さうと御意で長刀を賜れにありまして「奥「折々い私が供よ連れるから來いヨ重山アノ誠に可愛い者との御言葉にておかのいい幸ひの事よありましたが話まらぬれい忠之丞惚れた女よ儀面を打たれ其上向ふい長刀を貰ひ此方いスゴ〳〵歸る是よ付ても惡いのい森庄五郎何のして彼奴を無者よして斯うあれバ飽迄もおかのを嫁よ貰はあけれバあらぬと夫が昔しの人い野凡ナもので刀おかけてもと云ふ事よある是ゝら森庄五郎が大難よ逢ふのお話しい次ぎよ申あげます

第三席（荻江の一節）

引續きまして荻江の傳で福永忠之丞ハ宅へ歸つて親共よい叱を言れ頻りお考へて殘念ガッテ居りましたが飽迄もおかのを貰ひ度と云ふので伯父笠原主膳の所へ來て縁組の事を言入れまして歸り升其日い恰ど九月の十三夜の事で喜少々前ゝら雨が降り出して秋の雨い晴間の無いものでござい升忠之丞其日の形りい繭紬の長合羽よ頭巾を掛けた大小澁蛇の目の傘よ爪掛けの掛ッタ火燈窗の高足駄で恰ど未刻のお下りに笠原主膳が歸ッて來て逢まして暫時話しをして歸へるので御坐い升から申の刻と云ふので只今あれバ四時半彼是五時と云ふ時間よ御馬場口まで歸つて來るとスッポリと爪掛けが拔ましたが重役の事でい御坐い升が忍んで參り升事故供も連ず自分で爪掛けを嵌る譯よも往うず片方よ爪掛けあしで歩行のも極りの悪いものでスルと向ふゝら赤合羽よ饅頭笠草鞋穿でビショ〳〵仲間が參りました忠「これ〳〵小者「仲間「へイ忠「氣の毒ゝ

（荻江の一節）

ゞらツコへ脫タ爪がけを掛て呉れンカ仲間「へイ〳〵畏まりましたと姿を見ると宗十郎頭巾を目深よ被て居る扮裝ゞ立派だから屋敷の重役と思ひまして「お穿悪けれバまた詰ますりますので忠「何の用で行仲間「へイ今晩鼈井戸の巴屋よ越中節の順講が御坐い升ので主人が參りますので恰ど明日い非番でムい升から池邊樣と御同伴で晩景から參るお約束の手紙を御屆け申に參るのでムい升忠「フヽン一寸拙者と同伴よ來て呉ンか縁町れ竪川と云貸席があるノウ仲間「へヽ、待合茶屋でムい升か忠「あれへ一寸來て呉んか使が遲く成て氣の毒だが若しソンナラ手紙を置て夫れゝら來て呉れんか仲間「使と致しまして跡から參じ升御尊名い誰方樣でムい升忠「ソリヤア行てから名もいはふが屹度來いヨ最そつと多分に禮ゞ遣そうから傳「イエ何う致しまして有難う御坐り升忠「酒も飲せるぞ傳「へイ有難う御坐い升、と仲間い大喜びで直ぐ池邊小藤太の所へ手紙を投込と早速夕景ゝら罷り出ると云ふ返辭があるから立歸つて右の手紙を主人よ見せましてそれから傳「一寸近邊まで往て參り升と、屋敷を出てみどり町の竪川と申貸席まで參りましたゞ此竪川の家い庭を廣くとりまして所々に八疊に六疊四疊半抔小間〳〵と所々よ出來てあり升ゝら密談抔をするよい宜席で御坐い升女中の案内で傳藏が參り升と忠「ヤア是へ參れ遠慮していゞ徃んよこれへ這入れ傳「へイ何う致しまして先刻い有難う御坐い升多分よお

手當を頂戴致して却ッてお高價直シ屋よつき升有
ア丶遠慮して居ン今飯を取らせる　傳「有難う御
しがあるから此方へ參らぬ樣ニ致せ茶ハ其所へ置て菓子も置て往け跡で食の仕度をして置けよ
ピッタリ其所を締て……さア此方へ　傳「何御用でござい升か其時忠之丞ハ傳藏を見歸りまして
忠「貴樣ハ森の所よ何年ぢうり奉公をするへ　傳「へイ私ハ今年で八年程奉公致します　忠「大分長
年居るのウ　傳「へイ誠よ主人が長ウ御坐いまして萬事柔和うござい升からお暇が出おけれバ何
時迄も居りませうと思ひ升ア丶いふ主人ハ御坐い升共迄小言を一つ申た事ハ御坐いません
夫に御威心あのハ祖母樣にハ御孝行で實よ隱居樣を大事にする事ハ恐入ッ丸ものでござい升ア
ン丸方ハ御坐いません誠に私ハ良い所へ奉公に行當ましたから失策ぬ樣よ心掛けて大事よ勤
升何時迄も置て遣ると被仰て斯ナ有難イ事ハ御坐いませんから醬來居ります　忠「左樣か庄五郎
が常の行狀ハ何うか　傳「へイお三日ハ十二宛で平生ハ三ッ宛で　忠「ナニヲ　傳「お備で御坐升か　忠
「イヤ行狀ハ　傳「へイ〳〵行狀へイ誠よ良ウ御坐ます　忠「何う云ことを常に爲るナ　傳「お心掛け
の良方でそれに長唄が好で御坐いましてコレハ今迄ハ内密で遊ゞしたので祖母さまが三味線を
彈てお呉ア樣が遣れと被仰と御孝心だから厭でも御隱居の對手よ御謠ひ被成升が此間もお好で
柳島の御下屋敷へ御客來があつて殿樣のお好で御前で遣つて大層お上の御意よ適ひ夫からハ少
しい大きお聲で遣ッても宜い位で丸い升　忠「左樣か　傳「一中節の
順講抔があると御出うけにおり升今宵も池邊樣ぐ御一所に被爲い升　忠「フウーシテ常ハ他に何
かして居のへ　傳「イヽエ他よハナンデすか歌も御上手で劍術も達してお在ダッウで御坐い升が

暴イ事ハ被成らぬから出來ぬと思つたゞ御幼少時分から餘程の習ひ込と見えて先日柳島の屋敷
で劍術の試合があつて私しハ存じませんがお客樣のお供で向ふさまハ選ましひデク〳〵肥滿つ
た大きお奴で有ッタさうで腕自慢で庄五郎を負ンウといふ了見で出かけましたが私し主人の方
が上手で負しましたさうで平生聞よ何でも戀の遺恨だとヤ升が人の噂さよハ河野六郎樣のお孃
樣ハ主人の言号けで貰ウ積りあのを親の六郎樣が不承知でおんでも他へ緣付け樣とするのをお
かの樣が否だとか何とかで其向ふの惚て居奴とヤのハお孃樣が行度おいとア升さうで誰でも好
男の方へ行度と云ふのハ當然で御坐い升向ふの奴てへのハデク〳〵肥滿て厭な男で御坐い升か
ら行度おいと云のをソレが間違の種で劍術を試合と成ッタのですが向ふの奴を主人が散〳〵に
殿打ッさうで信よ快よい譯で御坐い升　忠「成程と言おがらグッと滿腹が込上たおれども夫ハ自
己ダとも言へませんから　忠「今晩ハ何時頃に森ハ歸るナ　傳「へイ主人ハ子の刻前にハ是非歸りま
す尤も出る時ハ御門へ賴まして出ますが大概戌刻頃よハ歸らうと存じます　忠「歸り道ハ何處
を通るナ　傳「私が供に參るので御坐い升が私ゞ參つて待て居るのでするゞ唄ハ聞へ
ませんし腹ゞ減から恰どお歸り時分よお迎に參りませう　忠「何所ヂ　傳「矢張龜井戶から合羽干場を
出まして錦糸堀から仲の橋へ出ます　忠「左樣か少し待よ、と床の間よありまする硯箱を取て中の
卷紙よ詳細よ書て縅を堅うして　忠「貴樣誠に些少がこれハ使ひ賃だ　傳「どうも再度恐入ます　忠「
心配ハあい此手紙を池邊小藤太の所へ持て行て呉れ　傳「へイ〳〵　忠「此所よ己れゞ居ることハそれ
ハマア書面よ認てあるが貴樣ハ此所で逢たと言ていあらぬ只これハ池邊方へ投げ込ッ放しで宜
から主人を汝ゞ龜井戶の巴屋へ送つてから又迎に行時ハ此所へ來て呉れ己れゞ馳走して遣り度

ものがあるから傳「ヘイ有難う存じます再度の頂戴もので恐入ました忠「此手紙を森へ見せていあらぬぞ確と池邊へ届けてくれよ傳「ヘイ畏りましたと中懐へ入れて出ましたが傳藏い何ごとも存じませんで以て參りましたが池邊い右の手紙を取り上て見ると笠原主膳の名前で御坐い升から　池「何うして重役が待合茶屋から迎ひをよこしたらう友達が串戯にしたのかシヲン萬一笠原だと行んでいあらぬ友達の遊びおれが美衣て行くが餘り立派ナ扮裝を笠原だと咎められるから矢張番差をさして平素の着物で宜抔と心配して番差よ平生の形で出て行きました池邊い軈て件の待合へ參りまして　池邊「ハイ御免んよ女「チヤ入しやいまし「屋敷の者が來て居かへ女中「ハイ此方へと女中が案内をして放れ座しきへ參りまして　女中「お連れ樣が入らしやいました忠「左樣か搆いずこれへ　池「御免チと障子を開けて見ると福永い ふけて居り升のら年齢い三十一二よ見もる色の黒い立派ナ武士金銀を鏤た大小に袴羽織で整然として居るから　池「コレハ初めまして　忠「サアそれでい話が出來ぬサアコレへ這入ッて　池「ハ、御書面で取敢ず出ましたが笠原樣の御名前の御手紙で誰方樣で御坐るか初めて拜謁致し升　忠「初て拙者い笠原主膳の舅で江戸見坂の屋敷に居る福永忠之丞不骨者で以後別懇に願ひ升　池「ヘー乘てお噂よ承りました福永樣圖らずもお目通りを致しました毎度笠原樣よい御懇命を頂きまして不束者で行届きませんが此上とも幾久敷願ひ升　忠「左樣堅ヲ被仰ッていい困るサアお寛で。……アノ女中膳を取急でナヤア女共い此所へ來でも宜……さア一杯さし上ませう　池「何もコレハ恐入升計ずもお盃を頂戴致しまして　忠「ナ酌を　池「ヘイお酌　忠「女を呼バぬ方が宜拙者が酌を　池「ヘイ〳〵太夫のお酌でいどうも恐入ます太夫のお酌抔い容易あらぬ事で身に餘りまして有難ィ事で御坐い升　忠「遠慮ナ

ヲ詰らぬ物だが呉て下さい折悪不魚で肴がないと云ふも誠に往ンが是い肴料として献じ升受て下さい　池「コレい何も、と見ると奉正の紙よ立派ナ水引が掛ッて金三十兩其頃の三十兩だから下役の身でい驚きまして　池「これい多分にどうも恐入ました辭退申上ますい却ッて失禮の義で仰に隨ひ頂戴致し升が如何よも恐入ます　忠「イヤホンノ志バかり就ていい折入ッて貴公に賴度事が有ッて招イたが貴公ハ二十石領かノ　池「イ〳〵何も誠よ小祿で親共の時分よいまだお目見へもせぬ身の上マア〳〵拙者壯年からふ目見へを仰付られ士分よ成ッて何も心得ません不束者で忠「大分勤も堅イと伯父うら聞くが笠原に言て伯父うら御前体へ取爲して永々五十石領位ねにい笠原から話したら上でもお聞濟にあらうからお取立のある樣よ精々拙者が伯父よ賴み込ンで置ヲ　池「コレい恐入ます何ウもどうも此上もない冥加至極の至り下拙の如き不束者へお言葉計りでも有難く心得升宜敷笠原樣へお取あしを願ます　忠「就ていい拙者の賴みを叶へて下さるうと云ふ樣に　忠「確とお聞濟み下さるう口外してから夫いい出來ぬと仰せらるゝと退く塲合がありまする樣に拙者に出來ることあれバ必ヲ致し升早速仰聽おい確お證據を拜見し度ナ　池「ヘイ其證據い別よと考へて居りましたがエー金打致しませう忠「それい尚更で　池「今日い番差をさして參ッて拭に少々恥入ますが良いのを差て參れバ宜ヲ御坐いましたとグッ〳〵致して大分錆て居りまして粉が翻れる樣なのであれども武士の金打ナヨン〳〵　池「如斯　忠「滿足致します貴公森庄五郎と大分懇意と云ふが左樣の　池「ヘイ森庄五郎彼れい若年の折から不思議の間柄で只今以て老母が存命で居て祖父の代から懇意で夫から妙ナもので劒術を習に行くも同所學問致すもひとつ所へ參り成長致しまして彼れい當時お高も百石頂戴致

し下拙の様ある小祿者でも互お兄弟が無いから兄弟の約束を致様抔と申て親切にして呉れ升私同様森も御最負よ願ひ升彼れい勿々親切あ男で御坐いまして手前共が感冒まして五六日も退き升ると庄五郎が來て寐ずよ着病をして呉れ升不思議よ親切ナ男で随分お役にも立升何分森もお引立を願ます　忠「長唄とやらで今夜龜井戸の巴屋へ行と云ふがさうか　池「へイ彼れい長唄が上手で此度お慰みに遣らして御覽じろ商賣人も及ばぬ美聲で小聲で謠ても溜らぬ位ねでうまいもの　忠「イヤ御同伴で今夜い何時頃お歸りか　池「左樣で今宵い彼是亥刻半子刻頃よあらうと思ひ升　忠「二人で錦子堀をお歸りだと　池「左樣で御坐ねます　忠「森庄五郎と二人で御歸りのとき他お連れがありますか　池「何うして藝人共い厭がりまして合羽干場いら通りません下拙共い順路でござい升うら合羽干場を通り升　忠「二人してお歸りの時拙者森の下男の積りで赤合羽よ饅頭笠で森の灯提を提てお迎ひと言て仲の橋迄出迎升　池「へエー恐入ましたナ夫い森も驚きませう何か御申越のお酒落でアッと云ふ跡がお笑ひで　忠「イエ其所を開て見て下さい人い來やアしません　池「へイ誰れも見へません　忠「實い森庄五郎に遺恨があつて拙者どうも捨置き難いから今晩下男の積りでお迎ひと言ひさま引抜て森よ斬かけるアッと庄五郎が逃る所を貴公後ろよ居て挾み打よ引抜て森を逃さぬ樣よ助太刀をして一刀よ斬つて下さい突然でございましたから池邊：惘くり致しまして　池「これい驚きましたこれいどうも何等の御立腹で御坐い升か何で森が失策ましたか實よ何うも驚き入ました太夫下拙幼年から別懇にする森庄五郎それを無悲よ罪も報ひもあい者を斬り殺す事い誠よ出來兼升る何うん云ふ事で森が失策まして御坐い升か下拙より筥とや聞けますれバ少しも強情我慢のあい男で直樣お詫をや升入升何う云ふ失策で御座い升かどふもお聞濟い御坐いませんか　池「へイ恩分を蒙て居ましたナ……金打をして置きあて舊來の馴染で實よどうも勿々斬ません何か此儀い御免を蒙ります　忠「ム、金打をして置きながら武士が約束を變がへてい忠之丞此儘よい捨置れません　池「あれども箇樣ナ事とい心得ませんから金打致したので斯う云ふ事とい更よ存じません何う云ふこれいマア御立腹で御坐い升　忠「斯う云ふ事を頼む故にお前の高を永々五十石領に取立て多分の禮を致す心得である殊に金打をしたる故内おけて武士が手を突て頼むにお聞入れがおけれバ不止得其う云ふ御心底あら必ず人よ漏すに相違あい拙者是迄の事足下を活てい置かれぬ一刀の下に此所に於て斬捨るがお前も默ッて只斬られていい居まいから刺違ッて死ます　池「何も夫い何ともどうも恐入ましたナ何も迂濶どうも飛ンだ事を言ましたナ……宜敷う御坐い升金打を致したのい手前の過り小祿たりとも池邊小藤太確と助太刀致しませう、へーと慄へて眞青よ成ッて居り升　忠「御承引の上からいまい事ですが拙者も是迄だから貴公の宅へ踏込斬て捨て拙者も切腹致す心底ゆえ誠に滿足致す先一杯召上れ池「モウ御酒い頂けません　忠「歸るあれバ尚又お斷を申上げて置く儀があり升此場で受合ッて宅へ歸つて森へ内通して今晩の事を仕損じれバ貴公の口から漏たとしッか思いぬさすれバ拙者も是迄だから貴公の宅へ踏込斬て捨て拙者も切腹致す心底ゆえうち事が破れいい貴公の首を胴よい着て置かぬから確と承知して下さい　池「へイ御念の入りました事で宜敷う御坐い升、と池邊小藤太色青ざめて何も致し方があい厭といへバ首があい荷擔すれバ永々五十石と云ふので慾と云ふものい怖いもので手傳て森を殺す氣にありましたから森と同伴して龜井戸の巴屋へ參りました此方等い森の下男傳藏が參りますと福永い澤山馳走をし

て酒よ酔ました傳藏を連れ出し仲の橋へ出る東の方い大島様のお屋敷で御坐い升北の方い土岐様のお屋敷其後ろよ紀伊守様の下屋敷其間の細い横町へ這入まして　忠「これ〳〵其赤合羽と饅頭笠を一寸貸せ　傳「へ……何う遊べす　忠「實いナこれへ森が參ると拙者が貴様の積りで迎と出て串戯のだから貸て呉と傳藏の赤合羽に饅頭笠を被つて大小を落し差よして裾からけて　忠「草鞋も貸と草鞋を穿て火燈歯の下駄よ蛇の目の傘い幸ひ無印でムい升から一方の田の中へ投り込で　忠「來やアしあいか向ふを見て呉れ　傳「へイ、と向ふを覗て居ります所〳〵覗ひ濟まして一刀を引抜より早くパッと森の家來傳藏を一刀よ打て捨てますと劍物い良し腕もさへて居りますのらボカッと溝の中へ斬倒されて前よのめつて死ました愍然あのい此傳藏災難でムい升スルと忠之丞い傳藏の袖で鮮血を拭て刀を鞘に納め鶴の丸の紋の付ました提灯を燈して横町から覗て居る雨い上りまして少し雲い切て月が出ますると折から森いやろ酔で歸つて來る後よ池邊小藤太もう此所らかとブル〳〵慄て今度森い此の錦糸堀で斬られるが手停いなけれべおらぬ若し仕損ふと福永ぐ宅へ斬込てエのら斬れるかと思遣付けろと嫌々柄前に手をかけて隨て來ます　森「コレサ池邊貴公今日い些とも酒が發しおいナ都一體の今日の一中節い何うも感腹で女で彼の位ね遣ろ藝人いおいのう　池「あれい何うも中々上達ものです　森「イヤ貴公今日い何うも酒も些とも飲おいナ　池「酒も何にも往けません　森「ナゼたつて少々腹痛で　森「貴公と此の森い不思議ナ縁で一ツ所で學問もし劍術を覺ゑ私も兄弟いおし貴公い年上だらら兄と頼む心得で何うゞ末長く池邊氏打とけて別懇よして下さい私も出世すれべ貴公も倶に出世さして貴公の力よおらうから朋友の信義まことを以て交際て下さい　池「ヘイ誠よ千萬添いこと何う云ふ御縁か幼少時から御懇意よしましたナ　森「何んだ厭ナ顔をするチ今日い私い餘程酒を飲んだチ　池「イエたんとい召上らぬ……　森「ナンダ何うしたチ傳藏いナゼ迎よ來ませんまだ來んァー彼所に提灯が見へる傳藏……遅い……と鶴の丸の紋の付ました提灯をつけまして段々傍近く來る此所い錦子堀で向よズーと屋敷窓よやのかに提灯が見へまして此方等の紀の守様を離れると二軒御家人衆の家が澤井勝司古小路數右衛門様と二軒並んで居る前へ來かゝると　忠「お迎ひと云おがら提灯を打つけて赤合羽と饅頭笠を刎る早術福永い一刀を上段頭上に振冠つて斬付る森い狼藉者と言ながら引抜て相上段よ構へる後から池邊小藤太ブル〳〵慄へおごら半分抜きかけましたが實に森の身の上い浮雲ことでムい升是から何う相ありますか次にヤわげます

第四席

儲引續まして荻江の傳記で後よ露友となり升森庄五郎がおかのと縁組のため重役よ憎まれ戀の遺恨で福永忠之丞が錦糸堀で網を張ッて居る事い神おらぬ身の夢にも知らず微酔機嫌で浮々澤井正治殿の前へ來ろと赤合羽よ饅頭笠を跳のけ　忠「御迎ひ、と言おがら引抜て斬かけました下男と心得ました所長イのを振冠ッて突然に斬掛け升此方い心得がおり升から一足飛下つて一刀の柄よ手をかけ　庄「何もの、と云ふ後おい小藤太が引抜て居る進退ともに庄五郎い浮雲所で御坐い升斯う云ふ時よ善人いはからざる佑を受升もので澤井正治殿の潜門をガラリッと開て出ましたい矢張同家の下男で提灯を持ッて先へ出まして續いて宗十郎頭巾に脊割羽織爪掛けの掛りました高足駄を穿イて烏銀拵ひの大小を落し差にしてズート出升る道幅が狭いから鼻の先へ提灯がヒョロリと出ましたとさい膽の据らぬ池邊いブル〳〵と慄ひおがら抜かけた所へ提灯が

カッと光りましたから ハッと思ッて遽て何う心得たか提灯を切て落しました下男ハ驚きまして
澤井の前の小溝へ ハッと落ます機轉よ出ましたい立派ナ武士下男の提灯を切落したから立腹し
て突然飛込みざま右腕を逆に取てドンと前の錦糸堀へ投込みました池邊ハガブ〳〵水を喰つて
向岸へ這上り加勢が出たと心得ましたから驚きまして福永の跡をも見ず中の橋の方へバラ〳〵
と遁けました 士「お怪我ハありませんか お怪我ハ御坐いませんか 庄「ハイ何方で 士「浮雲所で今予が
是へ參ると齊公樣へ前から一人斬付る者があり後からも忍ンで斬ッて掛る者があり手前共の下
男の提灯を切落し憎い奴と心得たから利腕を取て投ましたが向ふ岸へ這ひ上ッて逃た樣子齊公
ハマア危險事で挾み打でお怪我ハありませんかつたか 庄「ハイ何とも千萬忝ふ御坐い升前より切付
ましたい手前家來かと心得ましたが案に相違して何者か存じませんが拔て私を打んと致し升と
又一人の曲者が後から切付んと致す者ゲでござるが何故あつて切付ましたことか解せません 士「ハア夫ハ何うも何の遺恨であらうヲ 庄
「左樣被仰れバ常にあく今日池邊がヤすい事ハ一々怪しく心得ます樣ナ事で 士「實ハ危險ことで
庄「お蔭樣を持まして危ハ所を遁れました後から切付ますものい頓と氣ゲ付ませんでしたお蔭
樣で 士「イヽヤ左樣にお禮にハ及バん何方のお方で 庄「手前ハ津輕藩で森庄五郎とヤもの何れ尊
公樣へお禮よ罷り出ますが御尊名丈をも承知致度御坐い升 士「津輕公の御藩で夫じやアツイ
御近所で拙者ハ御邸から二ッ目手前の横町で山村半左衛門とヤ者で近邊に居りますからお非番
の頃ハチトお咄しに 庄「左樣で何れ御屋敷へ罷出升 士「イヤ〳〵態々でハ困り升近いからお尋
下されバお茶でも差上升 庄「有難ウ御坐い升 山「これ彌助ヤ逃たかナ何所ゐ 彌「ハイ 山「何所

に居る 彌「ハイ溝の中に居り升 山「上らんか 彌「上らうと思つても腰が拔て仕舞ました何うかヤ
ア引揚て下さいどうも前へ出ると ピカリと拔てどうも突然でヲ 山「仕樣のない奴だと言ながら
襟首を取て漸く引揚げ是から山村半左衛門ハ二ッ目の二ッ手前の横町を曲ッて屋敷へ歸る此方
い津輕の屋敷へ歸り翌朝にあると紀の守樣の横町に下男が一人所殺されて居ると云ふので死骸
を檢ると自分の家來傳藏で扨い下男を斬殺し其裝に姿をかへて庄五郎を打んと致したのであ
る何者の所爲か知らんが何にしても命の親山村へ早々禮に行あけれバあらんと先づ下男の死骸
を引取り舊來召仕つた者といひ情ある人でござい升から宿へも充分の手當をして相應よ野邊送
りをも致しました其翌日森庄五郎ハ山村半左衛門の所へ參つて案內を乞ひ遣ひ物を差出し升と
直ぐにお通り下さいといふので通つて見ると十疊敷の對客所で躰て主人半左衛門が出て 山「サ
アこれへ何うぞ 庄「ハイ彼の節ハ夜中碌に拜顏もせず御禮も述ませんで 山「私も碌よお顏を見
ませんでした何とも危かつた此後とも幾久敷別懇よ 庄「不圖危い所をお助を蒙りました故早速
お禮よ罷出ませんけれバあらぬ所をヲ下男が殺害されましたので死骸を引取野邊送りを致して遣
はす抔の取込みで引延よ相成相濟ませんい所でした只今ハ又何か結構ナ下されもので御心配下すつてハ困る其う云ふ譯でハあいから庄
「イエやんの到來合せで御坐つて詰らんものですが御笑納下されバ千萬有難事で 山「折角故ッレヂ
ハ頂戴致します……コレ半次郎お菓子を此方へ持て來ンか 半「ハイ、と若衆頭髮で羽織あしの
袴を着た裝で菓子器を持ッて出て參り傍に置て跡へ下ッて手を突まして禮を致します年齡ハ十
三四で御坐い升ゲ汝かと思ふ程色白ナ總角の若樣でござり升 庄「宜若樣で

いや最うどうも柔弱で御坐います　庄「實にどうもお美麗事で嬢様かと存じました　山「イヤ男いナ少し斯肥〳〵して色が黒く嚴丈であけれゞ武士よい往カン彼の様お柔弱でい困り升併し劍術を習いせたら少しい身体の藥よもあらうかと存ずるが俄に荒い事をさせていけッて體に障るで有う抔と家内い心配を致して夫もせず殆ど厄介お悴が出來てナ何うか是を縁として折〳〵ナ庄「何の手前方い至つて不潔御坐い升が御尊來下されゞ有難イ事で老婆一人でござるが方々不行届でいござるが是を御縁と遊ゞして　山「此後とも幾久敷御懇意に願ます、と是ゟ森い此家を歸ります時玄關まで送ッて出ましたの九郎の姿に見立ましたといふ武士でござい升餘り標緻の好いのも善し悪で御坐い升元文元年の庚申年に生ました者で諺よ庚申に出來ました子い盜賊よあると申升が當らぬ事もございませんこれい後日のお話しで森ハ宅へ歸りまして池邊の容子を段々聞と不快で番よ出ないと云ふから何う云ふ容子で居るか見て遣らうと池邊の小家へまいりました同人い四年跡に御新造が卒去てから何うか艮者が有ッたら世話をして下さいと諸方へ賴ンでおるが緣遠く今以て獨身で年を經た雇女が一人りよ家來が一人居りましたがこれい下つて自分の居間の所へ一人り只寐て居る池邊の所存でい近々に祠永が失敗おッタ意趣晴しに已れを斬に來るよ違ひおい今斬に來るか〳〵と思つて居る所へ思ひがけおく森庄五郎が來て　庄「どうの御不快で番を引たさうダノ　池「これいどうも宜こそ御入來手前少々不快で番を引て居ります　庄「夫い往ンチどう云ふ御容子で　池「ヘイ何うよも斯にも只モウ一命の所が旦夕よ迫り升のでたが錦糸堀で何うしたのだ　池「彼れいどうも左樣深くお尋が御坐つてい何どもどうも尊公樣へ

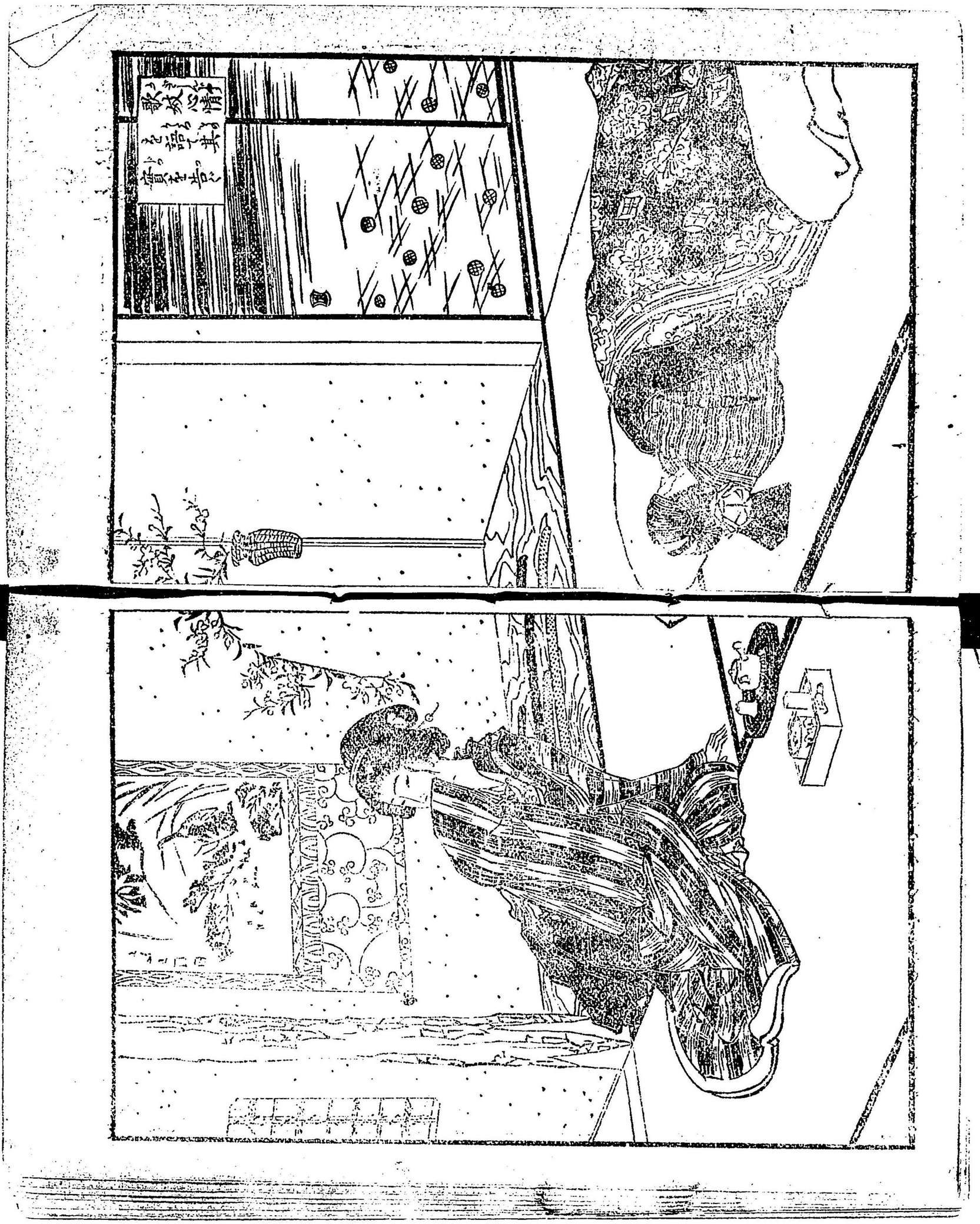
合す顔いおいでナ手前が一体愚ですから時貴公いナ世私の後から斬のけたチ　池「中々以て斬かける所でいおい狼藉者が正面から參ったらう助太刀を致そうと心得て尊公樣のおたので　庄「虛を言ても徃のん全たくお前の斬かけた事い確に其場よ見た者がある山村の家來の灯提を切り落したので山村い立腹して錦糸堀へ投込み向川岸へ這上つて逃て仕舞ッたらう　池「どうも其鼻の先へ灯提が出ましたので只尊公樣へお加勢を致す心得の所へヤッと出ましたからハッと思ひ機合から狼藉者が出たと心得突然よ手を逆に取りポンと機轉よ錦糸堀へ投込まれ水を呑腹梅擔が惡く夫から不快にあり　庄「貴公い口賢イお默被成私も幼年の時分から別懇にしてお前の祖父と私の祖母と懇意よりどうかも有るよ何者よか賴まれたチ何うも私を殺さうといお前慾に絆され信義を失つたチと星を差れまして池邊い默して返答を致しません池邊い實よ面目ないと存じて脇の下から汗を流しまして池「何も仰ッて下さるナ手前い遠からず首が落ますから　庄「何ンで首が落升　池「何ンてーヤ事い出來ません手前愚ですからナ迂濶金打を爲たからで箇樣ナ事と存じません外あらぬ尊公樣へ刃ものを向ける譯にい參らぬですゞ金打致しましたから何うしても首がおいのでするからナどうも跡で成程其うだ宜い氣味だと仰つてお笑ひ下さい此の外よいお答い出來ぬから何卒御免下さいどうも致し方がおい尊公樣に顏い合されおい　庄「然れゞ向後出入い致さンで貴公とい絕交だ　池「どうも仕方がおい一言もおい譯で實に愚ですからナ今に首が落升。と何だか分りませんから森い其儘宅へ歸りましたスルと其年の十二月廿一日よ森の老婆い七十二才で卒去

ました其頃い忌服とヤて武家い月代を生して引て居り升翌年い鳳暦三年二月十三日忌も奇麗よ明けましたが暫く宅よ許り引籠で大きよ森庄五郎い力を落し看病疲れで體が悪い三月十五日に い其頃梅若で本母寺へ人か出ますので菅野紋次郎と云ふ下役の者が來て 紋「森氏左様よ御宅よ許り入ッしやると お氣が結ばれて お悪いお氣晴し旁々お散歩い如何恰ど非番で宜から是非入らッしやい手前も久敷 外出をせんが向嶋い眞盛りださうだから是から御同道を致さうと達ての勸で 據ろなく仕度をし着流しで出ましたスルと菅野紋次郎が 紋「どうも向嶋い塵芥立て強い群集であらうから却ッて彼云ふ騒がしい所へ お出よあるよりい貴公乗物町の伏見屋で都一濱の一中節を聽た方が宜でい御坐らんか夫よ貴公も 庄「夫も左様ダ私しも半段位ねい唄つて見度心持もある 紋「じやア直よ參りませう、と是から二人で伏見屋へ參り升此家のお傳とヤい故人都和中の後妻で和中の亡後い後家世帶で張ッてをり升當時一中節が流行ましたが此伏見屋の一濱とヤすのい年二十才よります別嬪で都和中の實子でございい升が御座敷へ出て一二段やつても澤山御纏頭を戴いて母を養ッて居り升が一濱の愛嬌で伏見屋も殊の外繁昌でございい升菅野い先へ立て 紋「此間い…阿母い在宅かノ お傳「チヤ入ッしやいまー誠にお久し振で御坐い升……チヤ森様もマア何も寔に御不沙汰致しました承りますれバ御祖母様い卒去あさつたさうで一寸お悔お出度とい存じても お屋敷へい出られないで濱と日々ヤ暮して居りました 庄「順講抔へ聽よ行度も出られないでナお前い何時も壯健で 紋「どうか濱が居るあら氣晴に一二段聽たい 傳「恰ど居り升お花見抔よ誘引ッて下さる方も御坐い升が彼ア云ふ人込みのごた〳〵した所い厭がつて靜ナお座敷でおけ

きバ參りませんで我儘許りヤて困り升 紋「早速濱を聘で夫に今日い和八を聘でナ彼れい座敷でお饒舌が面白いから聘で呉んナ お傳「有難う御坐い升彼れい閑暇で御坐い升から人さい遣れバ直よ參り升、かねや早くお煙草盆をと是から二階で先有合もので一杯出升都一濱い五年以來森庄五郎に岡惚を致して居り升子供の時分から可愛がられまして良旦那様と思つても身分ある森庄五郎へ妾人の身で及バぬ事とい存じていい居り升が其森庄五郎が來て逢れるので心嬉しいから直よ二疊の小間へ這入て化粧をして居る所へ這入て來たのい都和中の弟子の和八と云町の幇間で餘り良い幇間でいなく一中節も遣り升が聲が悪いのよ時々調子が外れると云ふので分いあいが座敷で饒舌をするのが一興で 和「阿母さんイじやアないか お傳「何うしたので直ぐにとは遅も一寸着物を着かへて一張等れ羽織の算段抔といふ人のしらない手間が取升和替らず森様が入しッて彼ア行たい柔和で彼ア云ふ方いない處人抔いい可愛がつて其容子テートナありません別です 菅野さんい氣障で彼れいお饒舌武士で お傳「大きナ聲をおしでない 和「濱ちやんい家何所よ……チヤ化粧……今日い此間いスッカリ醉て仕舞てどうも今日い森様が入らしつたので 濱「イヽヨ二階へお上りヨ 和「今日いたッて宜トやアないか 和「彼の位ねの方いありません 濱「入しつ阿母さんに内所で澤山御馳走して下さい和八い頻りに庄五郎を褒まして 和八「誠お彼の位ねナ武士いない實に二本差さんの様じやアない大小を帶して居ても大小いない様に見ゆる彼の容子テーナない子今日い何か御馳走あさいヨ 濱「何故妾が御馳走をするノ 和「ヘイ〳〵。トン〳〵 和阿母さんに内所で岡惚一條を言ない替りよ 濱「早く二階へお出ヨ 和「今日い有難ウ 庄

「久しく逢あいのう　和「誠よお久し振で去年す三夜に巳屋で彼の時にゝどうもお久し振で太夫様のお聲よゝ恐入ました彼のメリヤスゝ實よ本業人でも唄へあいと跡の評が大層で本業人ゝ間が悪いと横綱の師匠抔ゝ首を傾げて考へて居る何う云ふ譯で彼ア云ふ咽喉を持て居るか實よ別でタッテネ、ヘイ　紋「其方にゝ久しく逢んし淋しいから森氏ゝ老母の忌中で被爲在たから氣晴しと云ふので花へ往うと思ッたが却ッて當家が宜らうと云ふので濱ちやんの跡で憶面あしで遣るテーのゝ其所ゞ和八と云ふので有難イ理由で……まだお禮も申上げませんでしたが彼の後煙草入を頂戴致しまして結構ナ物で難ありましたナ大變に良物で彼れを二十一お抔ひでゝ大變ナ事で誠よ有難イ事でございました、阿母アさん宜敷　お傳「毎度入らッしやる度にお前を聘んで下さるのゝ先の師匠テーゞ彼の位ね光るのゝ御坐いませんナ旦那寺の阿彌陀樣よりゝ光つて居升からネハア……是ゝどうも頂戴太夫樣彼のおよしてエ次中ネ彼れゝ舊くうら居り升が來初よゝ彼の頬端ゝあいと思ッて居ましたが段々下火ゐありましたネハア……濱ちやん〳〵、一濱ゝ恥かしくモシ〳〵して居りましたが和八に呼れまして漸々森庄五郎の傍より少し隔れて坐りました紋「濱ゝ何時でも美麗からネ自然の愛敬があるからネ　和「天然自然ですナ只濱ちやんゝ妙ナものが好でナ玆でゝ些差でお阿母樣の前でゝヤ憎ゞげネ　庄「何ゞ好きか好きお物を御馳走し樣和「イエ今日ゝ和八へ御馳走するテーので玉子燒や天麩羅抔ゝ往けないので何でも森ゝ限ると云ふので夫よテ濱ちやんゝテ鯨ゝ何でゞ突だらう……あれゝ守抔と言てネ　濱「お止ヨ。是から二階で一中節を遣りましたが細い聲で美味のある聲でお好みでモー一段と大きに森も浮かれまし

て　庄「私も短いメリヤスを、と言ッて簡單半段許り遣るとお幇間もありますが素人よしてゝ上手から皆感心して居ましたが森ゝ酒を强られ苦と云ふので　濱「少しお横よおあり遊バせ、と是から下へ連れて來て四疊半の小間よ二ツと寐ましたが暫時過ッて見ると枕邊よ都一濱が坐ッて居りますから　庄「濱や今日ゝひどく酩酊した何ゞどうした紋次ゝ　濱「菅野樣よ濟あかつた如何よ醉てゐ「大きよ菅野よ濟あかつた如何よ醉てゐから暑い、少しも知らンでノ今日ゝ大分暖氣ダノ下へ來て居てゝ濟まあかッタ庭を少し開て呉ンナ籠るのを訝いと思つたが貴方ゝ眞實よお惚然で御坐いますネ　庄「惚然とゝ何だ　濱「妾がヤたと云ッてゝ濟ませんけれども貴方妾のヤた事を何卒後生ですから默て居て下さい母よ知れると往けませんから　庄「知れて惡いとゝ言ゝぬ和八ゝ何うした　濱「和八ゝ先きへ歸しました　庄「お前ゝ何うして玆よ　濱「妾ゝ先程から貴方が熟眠て入ッしやるからお目の醒あい樣よ靜よ致して居りました　庄「何ダ、言て惡い事テーのゝ　濱「妾が聽あい振をして居りましたがお阿母と菅野樣との密〳〵噺しをきゝ升と貴方がお屋敷内よ言号けの美麗お嬢樣がありますか　庄「言号けと云ふ程でゝあいが上役の娘を貰ふ積で老婆が約束した女がある　濱「其お嬢樣がネまアどうもお標緻が餘り好いので外に惚れて居る者ゞあつて其お嬢樣を嫁に欲いと言ふよお嬢さんゝ貴方よ惚れて居るので何うしても他へゝ行のゝ嫌ダ森樣であけれバと御仰るので貴方があつてゝ誠に邪魔よあつて往けあいからと云ふので種々ある巧をする人が多勢あつて貴方をお屋敷を出したらお嬢樣も諦て他へ緣付だらうと貴方を追出す工風に今日菅野樣が連れて來たのですと　庄「フウ



ン私を追出す相談とい何う云ふ譯か　濱「貴方が妾しを御贔負よして被爲入ッて下さるのを色氣か何かで贔負わして下さると菅野樣い間違ひ森が醉て寐て居るから妾しお何でも一所に寐ろと無暗に座敷へ引ずり込だので若しや妾しと其樣な事でも有ッたら菅野樣が早速上役へ話して夫を慮よして不品行だとか言てお屋敷を追出さうといふ謀をしたに相違ないので御坐い升ヨ夫で母にこれが宜く往けゞ是丈け禮をすると言て母も喜んで居り升親の恥をやてい濟ませんが繼母居る中ですから隱すのが當然ですが今日い正實よ愛想の盡る事を菅野樣と詰し合ッて居りましたが貴方い御可愛想で貴方油斷していに往けませんヨ　庄「左樣か夫い危險宜く言て呉れた實よ贔負よする甲斐が有ッタヤ子濱お前い夫程の深切者とい思はンかッた宜く親よ内密で私に知らせて呉れタ丞おい失敬お言分だが多寡が藝人だから母と共謀よあつて私を欺して斯うと云ふのが通常藝者や何かの常だがお前い誠よ感心ダノ夫じやア油斷い出來ぬおいかお前私の座敷へ出るのが樂みで苛酷い繼母の側よ居り升がせめて月に一偏位ゐい入らしつて下さいナ　庄「そんなおいだらう迂濶門外へい出られぬいから愼まあけれゞ成ぬ　濱「宏やア最う是切入しやらないのが宜い　庄「最う來ぬとしあけれゞ成ん　濱「アラマア往おい事を言ました子其樣事お言いあけれゞ宜かッた　庄「イヽヤ宜く言て呉れた實よ私のてもお語ッて仕舞と直ぐ歸り升がわあなたの御座敷でい何時までも斯う遣つてお側お居て我儘一ばいに勤めまして阿母よ森樣へ行と長いとヤして叱られ升が一年よ五度お呼入ッしやるのを樂みよして苛酷い阿母の側よ居り升がせめて月に一偏位ゐい入らしつて下さいナ　庄「そんなことい出來ぬじやアおいかお前私の座敷へ出るのが樂みで苛酷い繼母の側お務ると云ふのい何う云ふ譯か　濱「何う云ふ譯てエ妾ゞ此樣事をやてい濟ません失禮ですからやめませんが妾い五年跡から。と言かけましたが有繋よ藝で世の中を渡りまする身の上でも人が上品丈けよ恥かしいと見えまして森の顏をヂロリッと見た計り首を下へ向けて少し赤くおりましたゝ、美人の少し染めました顏い又美敷ものゝで暫く物をも言はず下を向て居ると一軒隔て隣りよ島屋と云ふお茶屋の二階で頻にメリヤスを彈て居り升折柄聞へ升メリヤスい色見えでうつらふものゝ世中の知るもよしおや身の上を庄五郎い思はず笑ひ出して　庄「菅野の巧みを知らせて呉れた信切よ引替矢ッ張阿母と同意をして色仕掛けで私を免職させ樣といふのか私い屋敷育ちで粹お交際い玄らぬが惡が好だから折々順講抔へ參ッて藝人よ心易く成ッて人情といふ事も少しい知て居るが私の樣お不粹お者にお前が惚れたの晴れたのと言つたつて眞實にいせん矢ッ張母と同意と外さやア思れん　濱「そんなことを仰やッていい誠よ面目あふござい升お身抱お貰君よ妾共が何う斯う思ッても及ぬ事と存じ升から色の戀のといやらおツ氣おしでお座敷を勤め升から可愛想と思召てあおた何卒内密で家でおくとも宜う御坐い升から月に一度位ゐツヽ召で下さいませんか　庄「濱やお前が眞實左樣いふ了簡から私もナ是がございませうか　妾い其替り生涯婦で暮し升れ迄すら贔負と云つて座敷へ召で祝儀を遣る許りでおく何うか末にいお前の身の立やうよしてやり度と思ッて居たが今日の眞實を見拔たから急度身の立樣にして遣らうが其の替りお前よ賴がおあるが聽て呉れ升の　濱「聽ますとも何んお事でも　庄「少し耳をかしお

うに森の肩へ手をかけて耳を寄せると森ハコッ〳〵何か囁きました此時又も聞ゆるメリヤスハ
わかし兼たる春の夜の夢よも憂を忘れしと
濱「承知しました命よかけても。と言て是から髪のやつれ毛をかき揚て二階へトン〳〵ト昇ッて
參り升と菅野ハ阿母と相對ひで噺をして居り升 お傳「何うした 濱「能く御寐成ッて入ッしやい升
お傳「御寐成ッて森様ハどうした 濱「阿母様の言ッた通り這入うと思ひましたら跳起きて床の
上へ坐ッて呆た奴だ藝で飯負よするよ貴様ハ色戀で溺れると思ふか自己も役柄も勤る身の上女
の身として不埒至極ナ奴だと言つて煙管で毆打れて悔りして逃げて來ました 紋「夫ハ怪からん
チどうも眞實よ怒ッたか チ 濱「怒た位ねじやァ御坐いません初めて彼お怖い方ハないと思ッた
ら厭氣よありましタ大概のお客おら酔て居るとき側よ居れバ這入て寐ろ位ねい仰やい升ダ夫を
煙管で打てへのハあんまりです お傳「いつ迄お前ハ子供だチ夫だのら往やァしねへ年頃におつ
て男の樣たと人に云はれおがら森樣が來ると耻かしがつて森樣に岡惚をして蔭で噂抔もする向
ふ樣でも惡くないから召のダ夫を只側よ坐て居るから往けない森樣が御寐て居たら枕と肩の間
へ手を入れて抱しめて森さんくと云へバ宜よ只入れてお呉ン被成まし。夫で往ける物か幾年
にもある二十才じやァないか已ら抔ハ二十才の時ハ旦那の四人もあつた 紋「ダガチ森ハ不思議じ
やァないか濱の樣な者が側へ來て入て呉れと言に煙管で打てへそんなのハない手前どもなれバ
直ぐよ引ずり込ひ 濱「二度と再び來ないと言ましたヨ 紋「宜敷イ仕方が無イ芝やァまァ歸ると
して御膳を喫て行ふ今日ハ手前が懇望だが阿母ァお前ダ得手の香の物を細かくのくやにはやし
て美味チ女中でハ往かんお前切てお呉れナ濱お前茶の代のを入れて來て 濱「ハイと二人を起た

せまして銚子の替ッて來た計りの温燗のへ紙入の間ら小さな服紗に包んだものを取り出し藥
台紙に包んでありますのハ福永から渡された砒石といふ毒藥を酒の中へ入れ包ンダ紙を横の窓
から外へ捨まして少し斯う振廻はす工合ハ恰と白酒の徳利の樣でござい升これを密と持て出樣
とする所へ茶を入れて來ましたお濱ダシロット見るに徳利を振て立て居るら訝しい事をする
と思つて見ると裏階子を下りて森の寢て居る所へ行て 紋「森氏〳〵 庄「大きよ酔酊して甚だ御
不禮で酔てナ許して下さい 紋「斯う云ふ所へ遊びに來ていあけれバ往けません結構で御心
持ハ 庄「少し頭部が重イやうで 紋「シヤア斯しませう今お畑の宜いのを持て來たから一杯召上
つて御飯を召上れ却て宜しからう 庄「イエサグーと召上ッて跡でお湯づけを今婆ァに細香を賴まし
れを召上れ 庄「モウ往けないヨ 紋「イエモウ飲ン 紋「デモ一杯召上れお畑ハ恰ど宜敷サアこ
たから 庄「モウ往のぬ呑ン 紋「召上れヨ 濱「一寸菅野さんお廢あさいヨ森樣ハ頭が痛くッて呑
ないと仰るからお止あさいよ 紋「餘計お事を言ハないくッても宜手前が酔をするので婦人の酔と
ハ違ふ……一杯召上れ 庄「實に呑めんから 濱「およしあさいヨ森さん毒ですヨ 紋「ナゝ何が
濱「何ダッて呑ないと仰やるものを無理よ進めれバ毒じやァありませんか 紋「餘計おことを言ふ
ナ……サア 庄「呑ぬから往けん 紋「そんナことを言ハずよ折角紋次がお進めやすよと無理よ口
の所へ持ていく慾と云ふものハ恐敷いもので斯る善人を毒酒を以て害そうと致す是から一濱が
これを救ひ升事ハ次よヤあげます

第五章

扨て菅野紋次郎ハ福永忠之丞に多分の禮を貰ひ首尾能く往けバ笠原に駈入つて上申致すやうに

あると心得で慾といふものゝ怖敷いもので御坐います何恨もあい庄五郎を毒酒を以て殺さうとして今森の手を取つて口先へ湯呑を當てがひまして強俑をいたします一濱ゝ毒酒とも氣ゝ注きやせんが美聲から汞でも入れたのでゝあいかとの懸念から濱「おゝよしあさいヨ菅野さん否と仰しやるものをと横合から湯呑を取らうとする機轉に手が障り德利の酒が疊の上へズーと流れた時ゝ菅野ゝギョッと致しましたが市ケ谷の入江玄龍と云ふ町醫を抱込で百兩の手當を遣つて調合させた毒藥を首尾能く森に飲ませる目論見の處を醜したのだから赫と立腹致しました紋「はま平生ゝ最貧で斯うやつて同席致しお互ひに戚たことを言ふが今日ゝどうも甚だしい森氏よ一杯上たいと思つて出したものを引たくつて高價酒をこやして仕舞怪しからぬでゝあいか濱「高價たつて湯呑よ一ぱい許りのお酒を轉覆したつてそんなよ怒らなくつても宜ジャ御坐いませんか森さんが否てエのを貴方が無理に勸めて毒にあると往けませんから支へる機轉よさはりましたのでゝ庄「菅野氏そんなお叱言をいわなくつても宜いジャア濱「一濟ませんヨ濟ませんけれどもモウ此お酒ゝ廢止ませう延喜ゞ悪いから、と德利を庭へ投ましたすると德利ゝ碎けて毒酒ゝ泥ゞ呑んで仕舞ました紋「アレ濱「宜ジャア御坐いませんか折角の呑めと仰やるのですから妾ゞ貰のを持て來ますと新たに貰酒を持つてまゐり濱「妾も呑で森樣も お上りなさい。と其所ゝ藝人ですから就成ましてそこ〳〵おして森も菅野も歸りました、すると四五日經ちまして急よ池邊小藤太の所から森庄五郎を迎ひよ參りました何事かと存じて行て見ると變死と見えて池「ウーン〳〵、叫つて居ります庄「池邊氏乘て驅居ゝ跨がぬ絶交と言切つて昨年來お前の宅へゝ來ぬが急に來て見れと云ふから取敢ず來たが餘やどの

重病だヂ池「ハイ能くお出下すつた御腹立で假令お招ヤても迎も御尊來ゝあるまいと心得ましたが宜うこそ入しやいました誠よ千万忝ない手前遠からず相果ますがヤ存生の中一言尊公樣のお爲メからお耳に入れて置度ことが御坐いますもるお招きヤました庄「何云ふ容子だへ醫者ゝ何と言たへ池「醫者ゝ少々風邪で持病の疝氣が起つて居るから疝癪よ極宜敷から聊か粉藥をと云ふので粉藥を貰つてそれを飲まして二日目から段々斯うありまして何うも變だと思つて居りましたが次第よ斯ありますゞ毒藥變じて貰藥とあり貰藥變じて毒とある何うも卑怯至極一端假令手前どもの樣ヤ下役で拙ない池邊でも金打して約束したことゝ口外ゝ仕ませんそれを手前の口から事露見すれゞ自分の身の上と心得て手前へ手を廻はして毒藥を飲したよ違ひない庄「これゝ怪からん何う云ふ毒藥か知らぬが醫者のことも何もヤません毒を飲で死だことが知れていゝ先祖の苗跡よ濟まんでヤ手前表を浮羅〳〵歩行ゞ暗打に致さうと狙ふ奴もあり今夜お招込ものゞあるかと感念したよ卑怯にも斯やうよしました貴公ヤ手前よ毒を調合やうナ奴ゞ屋敷中にあつて思ひ掛なく殺される貴公よゝ舊來御恩を受けた其御恩報じに死ぬ前よ一言ヤ度ゞ貴公ゝ河野の孃樣を御新造にしていゝ往けません河野の孃樣を貰公ゞヤ受れゞ貴公の命ゞ危險ヨ庄「かのを貰ふと他よ憎む奴があつて私を毒殺でもをやうと云ふ奴がありますか、池邊ゝ苦しき息をホットつきましてらず迂濶金打したばかりで尊公樣よ遺恨あるものゝ手傳ひを致さねゞあらぬ仕義よあつて今に世間へゝ言はぬが錦糸堀であの仕義に及んだ譯で併し何うしても貴公樣よ向る刃ゝあいデヂ錦糸堀で投込れても貴方に切付あいゞ宜かつたと跡で心得た位で、名前ゝ言ひません金打して口

外しあいと約したから先方の姓名い言はぬが大縁を取る身の上で鼻怯ナ奴で何うか向ふで遣らうと言ても河野の嬢様いおよし遊ぜせ他ふ懇望する奴が一人あつて其奴が貴公を狙ひます　庄「能く言て下すつて私もどうも危いことが両度あつたこともある何よしろふ前の病を治療さんでい往のん　池「イエ癒ません次第々々に斯のごとく、と袖を巻て見せると節々が紫色に黒みがかいつて痣が御坐いますこれい節々へ毒が廻つたので御坐います　池「今日漱をいたしますとき痢か血を吐ました夫から何うも五臓六腑を絞るやうで悩乱して最う何分口も思ふやうよさけません尊公様お身の上を大切よおさい是を下せバ最ふ何も下置くことないあい定めし信義を失つた人非人武士に似氣ない酷い奴と思召もあらうが何卒免して下さい愚で御坐いますからこの箇様ナことい知らずよ金打して、尊公の顔いこれが見終、ときかない身躰が漸くよ手を突き起上つて森の膝へ手をうけ森の顔を見あがら〳〵と毒血を吐ました　庄「正直ナ人じやナお前い、万一してお前が死でも痣が出来て居るやうナことだから變死じやと言て醫者が届け検死をたつたときい家よ潰るやうナことを遺恨を差挟む奴等がござまいものでもあいが其時い此森が心配して池邊の家い細くも立行様にするのら心配せんで宜い　池「有難う御坐る何分よも願ます早くお歸り下さい茲にお携おく　庄「左様あれバ、と袴の塵を拂つて起上りながら　庄「氣の毒ナ、と振返ると床から這出して　池「何うかナお身をバ大切よと言ふ聲も最う少し危篤様で森が基礎を跨いで彼れ是れ七八軒も行たと思ふと最う宜いと思つた氣の弛みからガッパリ前へ俯つたあり悪血を吐て池邊い其儘相果ました。醫者が來て立會ましたが森い深切で有ますから飛で來て漸々變死で無いやうよして池邊の家い立て他から養子をするやうに致しました先づ池邊の野邊送りをして事相果ましたが是から森いどうも彼のおかのを私が貰ふと言てい悪い何うか断りたいものだが約したものを此方等から断る譯よも往かんが先づ兎も角もと先方の母親に逢て縁談い御無用ふ願度と話しますと母親い中々聞入ません　母「おかのい何の様あことが有ても他へ縁付く心得い御坐いません一端お約束致し夫よ又命を助けて戴いた御恩人で御坐いますものを、かのが参つて何うか手を盡してお恩報じをしたい卒去遊バした祖母様の追善供養佛事も致して日々御佛間よ香花の絶へぬやうよ致し度心得で御坐いますから何卒御意よい入りますまいが貰つて下さいと言て歸りましたが是から何うかお嬢さんの愛想の盡るやうなことをしたいと工夫を考へて番の日い欠きませんが非番の折い間があれバ故意と碁落者よおりまして乗物町の伏見屋へ行ていか都一濱を聘で遊びましたが度々あれども門切れ抔いあい整然と刻限よい歸つて來るからこれを慮よして退出すことよも出來ぬ河野のお嬢様いこれを聞て心配して居ります〳〵と人の言ふことを聞てい思ふとが溜り胸よ積つて食も通らず心配して醫者よかけると薬も服ず次第〳〵に病い重行きますこれい森を案じる計りであく父親の慾心心得違ひを案じて来の収まりを考がへる處から煩ひますのでこれが真の戀煩とやすので御坐います夫よりおかのい食が段々減て來ました幾何勘ても喫ません翌年の二月頃いメッキリ痩せて参りました六郎の家よい四疊半の小間がありまして次い三疊の間で其所へ娘の手箱や引出しのある様あ小お針箱抔が棚へ乗せて書物抔を積でありまして娘の心を紛らす様にと云ふので傍へ來て母が種々の世間咄し抔を致し升又おさんとやて舊來居り升デップリ肥満ッタ下婢ゲ居り升是い忠義あ者で晝夜枕邊へ來て看病

致しますかの「時計が鳴るやうだがさんや何時だへ　さん「左様で只今恰ど六ツのお時計で御坐いますかの「然うかい　母「かのや目が覚て居ますか　の「ハイ、と八丈の二重布團よ黄八丈の掻巻の上へ唐更紗の中夜着をかけて萌黄天鵞絨の切で母が捨へた括り枕へ呉服紙を柔らかにして太い太白の糸で中締をしたのを仕て居りますが少し痩ぎすの所へ烟つたから此所へ插て置くヨ些と起てお詠かの中へ這入て居るやうで　母「アノ宜い桃の花を貰つたから此所へ插て置くヨ些と起てお詠かの「ハイ親母様庭の櫻も餘程能く咲ましてお前アノ今夜ハ親父様へお泊り番だから妾ハ誠よ間が悪かつたけれども森様の處へ行て來ましたヨ　かの「チヤ親母様能く森様へ往て下さいました何と御意遊バしました　母「親父様の非を言ていも濟ないけれども六郎が風と他へ約束致しまして事が面倒よありまして夫もお御縁組も延引まして貴方がお出下すつても六郎ハ碌よ御挨拶もしませんで、夫が御心に障りて入ッしやることか其の後ハ頓と被入ありが娘ハ昨暮から心配致しまして只今ハ大病にありまして六郎ハ武士よ似合ぬ約束を違へ、心得違ひ、憎い奴と御立腹も御坐いませうが何も存じませんかのを御坐いますが何卒妾とかのが命を助けて戴きまして御恩ハ死でも忘れハ致しませんかのを憫然と思召して何卒御否でも今晩ハ六郎が泊番でありますから、併し下男に知れても貴方も御厭でも御坐いませうから庭口の方よ三尺の開きが御坐いますが其の開きを明けてお入れヤすから今晩御出下さいとチ、誠よ言憎かつたヨ　かの「能く入しつて下すつた森様ハ嫌つていも居らッしやりませんか　母「誠よ彼ア云ふ柔和い御氣性だから其う云ふ譯あれバお見舞に參りませうと御得心でうで御坐いますか能くマア入らしつて下さるねエ、若し親母様被入ときハ此お狹い所でハ却て此方が宜いワチ……さんやさん「ハイ母「森様が今晩内所で被入が家のしげや何か男共に知れぬやうに三尺の開を明けてさん「チヤ被入の私も子心配してもお嬢様ハ斯う云ふ御氣性の勝つた男優りで入ッしやるから涕抔を落したり鬱ことハあい御氣性で御坐いますが此回のこと許りハ世間様へ御噺ハ出來ぬが、其んなことを少ハ濟ませんが旦那様がお悪う御坐います彼ア遣つて御坐いますれ子向うハ悪く色が黒つてデク〳〵した厭ナ男でそれだから嫁の口ハあいのでそれを無暗に嬢様を貰ふと云ふのハ鐵面皮と申すものので御坐いますかの「其んお事を言つてさん「他へ行けとチエ被仰たつて嬢様が厭と仰しやれバ其嫌と仰しやツたのハ當然ですワ、真正に男だつて好くもあし、女ハチエ少しも好い所へ參りたう

損うといけないヨきん「私にお次へ起つたりあかしますからかの「それじやァお前首に括つておき置ききん「糸が御坐いますから貴嬢縛て入らッしやいよ其うあさいかの「アノ着物を　母「晴着姿をしない方がかの「でも蟹れ丈けでも直しませう、と娘に寐まさを脱ぎ親母に着物を着かえさせて仕度をして火を起しお畑の出来る許りなつて居ります恰入江町の九ツ時の鐘がボーン、すると梨を引たと見えて鞠がコロ〳〵と轉りますのを見てきん「彼入ッたヨ御新造様母「騒でい往けませんお静におしヨきん「第一お屏風が母「静かよおし、と自分の家で憶することないが奉公人を氣遣て庭下駄を穿さ母が出ますると森い縞い姿で山岡頭巾に無地の黒の羽織細い縞の小袖よ脇差を一本差して母「サア此方へ何卒庄「暫くお庭を拝見しませんでしたが今晩い月い好し賞よ好い氣色で母「斯んお狭隘所で庄「先刻いがお取急きも有、母「とう致しまして御繁多の所へ御無理を申わげ、早速かのよ申聞ました所が飛立程喜びまして誠よお目よ懸るも面目無いが一目お目に掛つて死ねば親母様何も思ひ置ことないおいと今にも死ぬやうあことを申升て若しものことでもあれば一度もお目お掛らず死去る様お事ゞ有つてい娘が迷ふだらうと愚痴の様で御座い升ゞ親心で夫もゑ貴方を無理にお出を願ひました宜うこそお出下さいました有難う御坐いますつても何う六郎様のお顔色がお悪い様に存ますよお連あすつた、おのの様病い氣から出るとお阿母様が御心配デおのの「ハイ。と想ふ男に言葉を掛られ嬉し涙よくれて口も利かれず　かの「親母様お茶をいれて母「アヽきんやきん「ハイ母「アノ何をヨ、お茶とお菓子をヨきん「ハイ母「あん

だチ重箱を持て來て其方のお菓子ナきん「ハイ庄さん　誠に能く被入つて先達てから嬢様がお目に掛り度が迚も被入つてい下さるまいと夫計りを御仰やつて幼少時分からお氣性も存じて居りますが、誰れにもお話しを去あいで私と嬢様とお阿母様と三人でお噂計りして、森様い美麗婦人計り見て入ッしやるから母「ナニを言ふのだそんあことい言はあくつても宜いきん「ヘイしおいチきん「大丈夫で、宜敷う、私が番をして居ります母親い膝を進めまして　母「お前アノさん少し彼方へ行てお出ナきん「ハイ　母「誠お貴方よい何とも申譯が御座いません庄「イヽエ左様ナ事を何も御心配成る事い有りませんイ母「其所をビッタリ締てナさげヤ何か參りい賞いお約束を致したい老婆と貴女とのお約束で結納をも取替さず女と女の口約束と云ふ迄で六郎殿の思召しも無い所へ無理よ縁を結びましても素より纏りませんし殊に親と頼む六郎どのが私がお氣よ入らぬでいナ、末始終誠に案じます何うか他よ懇望のお方があれば其所へ御縁付下されバナ庄五郎身の上も安泰又おかの様も孝道の達譯で何卒約束丈の事で別に確とした證を取換はした譯でも御座いませんし是迄の縁と思召して下さらんか誠よ申にも申憎いが手前殊よ譯あつてうちあけても申されぬことで些と身分に障ることで、是まで再度大難が御座いましたそれも此方のら起る譯でも御座いますまいが誠に申憎いが此縁談い破縁を願度いと両度程申たことも御坐います、おかの様斯様申と森い不實の様だが何卒親父様のお好の所へ縁付けば貴嬢の御孝心も達お阿母様も御安心だから其うあすつてチ　母「ハイ素より六郎が不當で國から歸たとき申たら夫い良縁だ殊に命を助りつた御恩がゐるから當人同志が宜ければ何うでも宜いと申、縁組い口約束でい御座いますが一端約束してそれを反古ゐい出來ません夫ゆゑに貴方に不

實よありまして何とも誠に申樣が御坐いませんかの、彼の通り緣を切拂と云ふと泣て計り居りますから病ひ重る計りで左樣にのの〳〵就ては御迷惑お事があれバ貴方もお氣が濟ますまいから、でいお宅へ差上ませんで假令一生奉公をさせましても手許へ置ましても一端お約束を爲ましたからい妾も武士の家へ生れまして約束を反古にい出來ません娘い奉公でもさせ生涯貴方を夫と心得貴方い御新造を貰ひおすつても何卒不愍なものと思召してかのを女房と思召して下さいと今にもこれが病氣ゞ全快致し他へ生涯御奉公をさせましてもそれを樂しみに勤まらうのと存じますがそれ丈い何卒お聽濟ゞ出來ませうか立て下さるあれバ宜敷庄五郎も生涯女房を持ますまい生涯獨身で居りませう、ダが都一濱と申ものい手前ゞ目を憚け升もろ何か不品行と思召があるかい知れんがこれい仔細あつて私命を助けられて、夫もおかの樣を懇望の者が緣談の調はぬい私がある也邪魔よおると思ふもろ名か實ふ危い事が御坐つたが證據がおいから何者とい申ませんが、實よ其事い心配で御坐いますおかの樣が奉公をして下されバ私も生涯女房い持ません老婆へ對しても他から貰つてい濟ませんと……おかの樣假令貴孃に離れて居ても庄五郎い夫と思召して下さい私も貴孃を女房と思つて生涯離れて居ても睦敷幕しませう　うのー　ハイ能く言て下すつた……お阿母樣其お言葉計りで澤山でこんおありがたいことい御座いません　母「これでかのも思置くことい御座いませんヤアそれじやア妾がお調子を把ります一寸お盃の眞似ことを、かのから貴方お受け遊バして下さい　庄「ハイじやアおかの樣のらお盃を頂きませう、と心計りの三々九度、床の間を見ると細もの〳〵高砂の二幅對庄「さてい婚姻をさせる心得であつたか、と心に想ふ其內よおさんが出まして肴を並

べ四方山の話をして、成丈早く歸らうと云ふので夜が短いのら取急ぎ　庄「もうお暇を致します母「左樣なら何卒來月六日い六郎が泊番で御坐いますからお間がありましたら庄「存外よ更ましたら左樣あれバお阿母樣のの「旦那樣御氣げん宜敷。とののいさげんよく樣側まで見送り開戸を明て母「左樣あらバ御氣げん宜敷。と母も見送り庄五郎が外へ出ました時い恰ど夜が明はあれる時分提灯退で歸て來たい河野六郎で御座います河野六郎い宿直から歸り掛け自分の宅の細い横町から頭巾を被つた怪しいものがコソ〳〵と出ますから六「狼籍者取押へろ。と云ふと下男がツカツカと寄つて襟首を押へまする六「ナニ者だ庄「誠よ飛だ所てお目に掛り、何うゝ河野氏、森庄五郎で御坐るお見通しを願ひ度六「ナニ森と。河野六郎腹裡に想ふにはてナ庭うら出るい殊によつたら娘の所へ逢引に行きいせんか併し何ーろ是れを幸ひ表向役所へ引致て彼れを免職せる手段よ宜敷い素より笠原と言合せてあるうら少しの廉を取て追放させるよ相違おいと想つて　六「森氏とい存せんお前も役柄をも勤める身の上でなんで出なすつた私しい森氏とい存せぬ假令屋敷中ゞ雖も一刀で參ることいありますまい、サアお役所へお出あさい森氏であるかおいか役所で申譯をした方が宜いサアお出なさい　庄「それい誠よ何も困ります實い一寸とお塀の外を通りかゝると御庭中の櫻が滿開で景色が好いから櫻を拜見したいと立寄と開きの戸が明て居りますからお告申さうと存じまして御庭へ這入つて、少々櫻を覩ましたので六ヶ敷た事を、夜の明けおいうち人のうちの櫻を見に來るものがあらう變なことを仰やる何う云ふ譯で這入つたか無沙汰で這入ることいナセ取次を以てしおい、イヤおりませんお出あさい。と言葉も高くありゴタ〳〵しますから何ごとかと母親が見ると森が若

武士ゑ押付られて居るからそれへ出まして 女房「何ごとかそんお分らぬことを仰やつて森様い かのゝ病氣見舞ゑ來て下すつたが庭の方が近いからと言つて今お出しやつたので……おんだい 勘藏「へイ 女房「森様を押へてなんだい放してお仕舞 勘「へイ 六「放していゝあらぬ 勘「へイ 勘藏「放しヤ 勘「へイ。何方等よして宜いか分りません森い仕方があ 六「放していゝかのが失策と思ひ い娘が私しゑ逢度と言つていかのが失策と思ひ 庄「實い手前お庭の櫻が結構でありますから明 方の櫻を拜見したいと存じましたが開きの掛金が外れて居り無用心ですから告知やうと存じま して 六「默止あさい大小い何の爲ゑ帶ますそんおことを言つてそれい匹夫の言ふと前町の町人 共の言ふとと違ひますお前い帶刀し役柄をも勤る身の上降らぬ言譯して、夜の明けぬうち櫻 を見になんてエー上野や飛鳥山とい違ひますサア役所へお出あさい私しい賊と思ふ 女房「貴夫 そんヤことと言つて 六「森氏あれバヤゼ帶刀しおい 庄「一寸とその 六「一寸と言つたつて無刀で歩行 ことありません私しが濟まんヨ私しが不取締りにあり私しが 濟まん相あらぬ。とこれを機會に屋敷を追出させやうとの了簡で中々聽きませんこれを聽かね て出ましたい娘おかのかの一爻上様お歸り遊バせ 六「ハイ、お前が出い悪い引込んでお在でか の「只今承まれバ賊だとか役所へ引いて表向にすると御意遊バす 六「ハイ左様サかの「お情あい ことを仰やるでいありませんか森様い病氣見舞に入らしつたのでありますから此所から歸るが 近いと言ふので此地等からお歸しやつたのでそれゑ相違御坐いません母上様と妾が證據人で御坐 いますかのい倘も語を繼ぎまして森様い私しどもの迷惑にあらぬ様に彼ア云ふことを仰やる ので全く見舞に入らしつたつて明方來るものがありますか違間來るゞ

宜い何う云ふ譯でわけも分らぬ者を引ずり込んで 男としか聞えぬでいないか かの「そんヤ横ゑ曲つたこと計り仰やつて森様が病氣見舞ゑ來て下 すつたので 六「分らぬでいないかヤゼ女關かゝ 庄「全く病氣見舞に來たので御坐らぬ 庭中の櫻を拜見に參つたので御坐います……宜敷い、お引致下さい 六「引致とも かの「アレ父上 様貴方引致あれゞ森様に濟ませんから私しい一所にお役所へ出て證據人にあつてヤ開きを致し ませう 六「そんヤことを言たつて容躰が悪くつて役所へ行てい風をひきます かの「譯の分らぬ人 と仰やつても森様で譯の分らぬ人でいありません森様い妾しと許嫁にあつて居ります婚姻のお 約束も段々延び〳〵にあつて居りますが妾しの病氣見舞に入らしつて下すつても父上が訝しヤ 顏付きをあさるから來憎くつて入らつしやるから何卒入らしつて下さいと妾しが無理に願つて お招びヤしたので 六「そんヤ詰らぬことを言て困る子森が來たつて訝しい顏付をする譯いない 又森ゑ願つて入らつしやるやうゐ抔とい何う云ふ譯か覺ねがいありません 女房「ア、云ふことを仰やる貴夫お國からお歸りのときヤし上たら直線じやと仰 やつて森様の老婆様とお約束にあつて、それをお忘れ遊バして 六「そんおまとい存じません ハイ 女房「そんおことを仰やつて貴方確に仰やつたから森様の老婆様と約束にあつて居ります それ ゞ延〳〵ゐなりますからかのが不快よありましたのでかの、病を重らせるのい貴方がするので 貴方娘をお殺し遊バすも同樣で 六「詰らんことを言ふ 庄「全く私しい病氣見舞ゑ參つたのでい御 坐いません お詫をヤてもお聞入れがおくゞ餘義ない參りませう かの「わあた父上樣何で森様を お憎み遊バす妾しが一所ゑ參つて森様の罪にあらぬ樣よヤますから一所ゑお連れあすつて。と

ホロ〳〵泣おがら親父の袖お絞つてヤますおいかかの「病氣でい、御坐いませが森様お御迷惑をかけてい御座いません情と義理を思召して無理よ來て下すつたのよ能く病氣見舞よ來て下すつてとお禮もせず賊よ陷す抔とい為んで父上い其う云ふ御心におありおすつたお禮を仰やいヨウ六「お禮だつて言ふ譯いあいかの「ないことい御坐いません……それじやア妾しがお役所へ出ませうまますヨかの「そんあらお禮を仰やいヨ六「申ずヨ……誠に然う云ふことと心付かず全く家事不取締りよあらぬやう言ふので娘が病氣お付き殊よ明方お見舞下され有難く千萬忝けおいう致しまして。と森ハニガ〳〵敷顏をして素との塀から出て行きました娘い情けおい親父樣と倘々心配いたします河野六郎い又倘々森を憎み何うかして退出す工風いおいかと笠原と共に工風を考へるこれより森が大難のお話し一寸一息つきまして ヤあげます

第六席

引續きまする荻江露友の傳記津輕樣の御家で百石を頂戴致しまするから好んで藝人よ成り度い譯でい御坐りませぬが終よ已むを得ず御屋敷を出ることよ相成りまするナレども河野の娘のおかのい誠よ貞節お者で御坐りまして親がドノ樣に森庄五郎を惡んで罪よ落さうと致ーても娘おかのい挑成しと毋も森庄五郎をかばいまするから庄五郎い己に危うい所を再度逃れて參りまする樣お事に相成ます然るに其年五月の五日に市村座で狂ひ曾我と云ふ狂言があり幸四郎が改まりまして三代目市川團十郎幸藏が改めて幸四郎とあり藤田吉治と申す者が歌謠ひで御坐いまーて中村仲藏の初舞臺中村傳九郎の朝比奈で大入よ成り度い

つて乘物町の伏見屋へ歸つて居りまするとの其頃い太夫樣と申して坐淨圖の上で庄五郎ハ茶お飲んで居りました 男ーへ大夫樣御機嫌宜う能御見物でェー大夫樣に誠お恐入つた事を御願ひまして出ましたが今日いドウ云ふとか立謠が病氣で御坐りまする夫に就きまして歌謠ひの方が三人程參りませぬ所がドウ致しても傳九郎の引ッ込みが歌がおけれバ引ッ込れぬと云ふアノ氣性で御坐いますから一同心配致して居りまする就ましてい何と恐れ入まするが陰で宜う御坐りますが紙半枚バかりの所でも大夫樣の御聲で願れまずれバ芝居一同の助かりに相成ります是丈の見物を扣へましてドウモ傳九郎が出ない抔と申しては一同の難儀何百人の難澁に相成りまするかも知れませぬ斯樣の事を願つて御立腹かい存じませぬが人助けと思召してドウカ御願ひ申上升 庄「困るぢや無いかマサカ芝居へ出て歌い謠へおいい萬一知てい相成ぬから 男ーイエ夫い決して口外い致しませぬ必ず世間へ洩れぬ樣に致しますお若し歌謠ひが參らぬことが知れますると雛子方一同の失敗御承知の通りアノ八釜敷屋の傳九郎で御坐いますから外の方でい往ませぬが貴方いアノ氣性も御存じで被爲入ますると此通り二階方迄が一同揃つて御願ひよ出ましたが何か 婆「貴方御厭でも御坐いませうが婆々がイラナイ口を出すと思召すか知りませぬが貴方の御聲で是程御遣あさいますれバ、御聲でい大夫樣いお五人前だと云ふ位ゐ大きお御聲眞當に措い樣おと云つて居ります一寸出て戴けバ多勢の助かりは丈の見物のあるに出ぬと云つてい一同がドノ位ゐ難澁をするかも知れませぬ 庄「サウ云ふ事ならー寸出ても宜が此事が萬一世間へ知れると大失敗で御坐いますから極內々で決して外へいやしませぬ何か一寸御頭巾でも何でも御召し遊して

庄「イヤ夫い暑苦しいから頭巾を被つてい往ぬと是から困つたものとい思ひあがら好お盛とヤすい妙あもので殊わい多勢の勤め乗人の難儀をする事だから己が一すと出たと云つて之が爲よ大して役儀に障る様あこともあるまい又た知れもしまい私が歌つたとい誰も思ひしまいとつひ年が若いから浮かりと庄五郎が出て謡ひましたのが身の誤り天稟の美聲大聲で向正面までも突切て聞えると云ふ程で大した評判が宜う御坐いました其日い夫ありで濟んで仕舞ひますとその後ち津輕侯が御登城から御歸りで本所二ッ目の所迄御歸りの時ハオーハオーと云ふ制し聲御乗物も津輕様の御乗物い格が別で御坐いまして御共の者も多勢、其時乗物の左の方よ附いて居りました者い森庄五郎スルト髪結床に若い者が多勢集つて居て甲「オー金太アノ駕籠の脇よ附て居るのい森様と云ふ津輕の家來だが何もの歌謡ひよりも強氣だと云つて大層お禮を持つて行つたとヨ何も大した者だせア、何も喫驚した乙「エ、日本一親玉〳〵日本一と云れて森庄五郎い大さよ赤面致してコー下の方を向いて通る殿様い何の事か御存じが無いから御駕籠の中で殿「コレ源吾〳〵源」ハ、ア「今市中の町人共が親玉日本一と高聲よ呼んだのい何ずヤ源「エーアレい下世話よ其エー親玉とヤすい此上あい言葉で御坐りますので御前の御駕籠を見まして上が親玉日本一だと斯うヤーまする事で殿「ン親玉日本一と云ふのい余のことをヤすかト何も御存じ無いから其儘御屋敷へ御歸りに相成ますスルト笠「森庄五郎い怪からぬ奴で御坐ります芝居道へ出て河原者と交つて歌を謡ひ殊に多分の謝禮を受けましたとヤす何うも御家名を穢す不埒至極お者御捨置よ相成つてい宜しく無いから早々退放仰せ付られて然るべく相心得まするとヤ

上る其時津輕侯ハ、ア駕籠で通る時よ市中の町人共が日本一の親玉と云たのい全く庄五郎の事をヤしたのヂヤあと御氣い附ました津輕侯い町人共が日本一の親玉と云つたのい森庄五郎の事をヤしたんヂヤあいと御氣い附ましたが元來聰明寛仁の殿で御坐いまするから殿「コレ主膳森庄五郎い唄が上手でも聲が美くてもヨモヤ芝居道へ出て河原者と交て唄を唄ひしまいソレい下様のものゝ惡口で、何かの風説であらふ笠「イ、エ風説でい御坐りません慥かに承知致して居る者あり現在庄五郎の唄ひまする所を見ました者も御坐りまする殊よ芝居道で囃子方とヤしまする者も一同打揃つてナニカ商賣の妨げを致すとヤして惡く庄五郎を惡み居る事を承いりますい慥かよ主膳心得居りまする第一芝居道へ出て唄を謡ふい宜しく無いてと其上よ多分の謝禮をも受けましたよ相違御坐りませぬい慥かに證據が御坐うますと云ふ。斯う慥かよ證據があるとを云れてい最う御捨置よお為る事い相成りませぬから殿「夫い不埒至極お事である早々退放をヤ付けろ笠「ハーッと直ぐよ是より物頭から森庄五郎よ出る様よ御達ーがある庄五郎が出て見ると小澤彌右衛門い席を改たうてチヤント凛々敷扣へて居るから庄五郎い何事とも分りませぬがナンだか知らぬが嚴格お様子御加増よでもあるか或い貶黜のか、併し何も貶黜様お事をした心得いないと心得ますから庄「ハーッ至急の御召に付き取敢へ罷り出ました何卒御用の次第を承いう度う存じますトヤと年齢五十一歳よ相成ますする所の小澤彌右衛門とヤす方が彌「コレ庄五郎其方心得違ひの儀あるよ依つて御退放仰せ付られるぞ庄「ハハッハー彌「サア讀み上げエ大「ヘーッと小谷大藏が仰せ渡され書を讀み上げまする。「一其方儀役掛をも顧みず賤しき河原者よ立交りい段不屈至極の至り依て永の御暇仰附けられい然る上い江戸御屋敷いヤすに及バず本

國領分迄も決して立廻りや す間敷旨仰せ渡されい事重役判」と聞いて、ハーッと庄五郎い疊に額を擦り附けまして脇の下から油汗を流しまして實に面目ない事を致したと思ひ其儘顔をも上げ得ませぬスルト彌「役目の表い是で相濟んだが一寸詰所まで歸り掛けよ寄て下さい　庄「へへへっズーッと引けて仕舞ます跡で庄五郎い歸りがけに寄れと云ふ事で御坐いますのら詰所の方へ參らかけれバあらぬがドノ樣な事であるかとコワ〳〵詰所へ參りまして平伏致しました　彌「表向の役目い相濟んだが何モ重々の大不出來しェー何も芝居あどへ出ちやァ往ぬぢやァ無いか何分にも今更致ー方が無い是も内分ゝ致ーたけれバ成らぬでいないが何もサウ云ふ譯にい往かぬ事がある手前御尊父とい御懇意の中殊にい外よ緣類も無い貴公の事だから早々御屋敷を出ても嘸御困りであらふと思ふが御屋敷を出てドレへ居付よなるの住居が定まつたら一寸一封御遣し、若し不自由な事がおつたら御尊父と深い馴染の中だから如何樣とも工夫も致ーませうから其時い一封を遣いされ手前の方から行く譯にい往かぬが如何がの御相談よも乘りませうからナア庄「ハー千萬忝けなう存じます庄五郎にい何とも申ー樣も無い全く魔がさしまして此上も無い心得違ひの事を致し今更お顏を合さう樣い御坐らぬ仰せに從ひ早々御屋敷を引拂ひまする事で何卒此後とも好さ折が御坐りましたら彌「イヤ夫い、既に小谷と申した事だが別よお前い失敗の無い人であるよ何も好さお事い往ぬもので浮りした、何も年が往ぬから斯う云ふ事よおつたのだ庄「へー小谷樣誠よ御役目御苦勞に存じます　大「イヤ何も手前い少しも心得ぬで笠原が惡い樣でと云ふので庄五郎い悄然と自分の宅へ歸つて直ぐに召使のものよい多分の手當を取らせて暇を出し諸道具を運ぶ所も御坐いませんから先づ取り敢ず乘物町の伏見屋へ參つて諸道具を預けて來る事に致して御屋敷を引拂ひました　庄「サテ此頃芝居へ出たバかりで永の御暇是い困より當然の事で全く私ーが心附かなかつた夫故よ内分とい云たが包む事い破れるもので何も已むを得ぬから當分厄介に相成ります　濱「オヤマアお氣の毒樣あること　母「オヤオヤマア、お氣の毒樣あことだ〴〵何にも御心配あく被爲入まーよト金もあり諸道具も持つて居りますから體の善いことを云ひます所が都一濱ハアッコン庄五郎を思もつて居りまするから決して困らせる樣あ事い致しませぬお袋の側でい御厭やで御坐いまうからと云ふので龜河岸よ一寸とした小奇麗あ狹い家を修繕つて是へ人を賴んで宇八あどが引越の手傳ひをーて住む樣あ事よ相成りましたがサテ引越して見ると御膳を焚く事も出來ませぬから小女を附けて置いて都一濱が庄五郎の爲に誠よ心切よ致します是から庄五郎い段々藝人や何かと交りを致して見ると武士よりい却つて心切よしして大夫樣お氣の毒樣で御坐りましたと云ひ芝居の方でも誠にお氣の毒樣あこと全く御暇よ成りましたのも私共からの事であると斯彼と云ふので諸方から進物あどをして心切に見舞つて呉れます森庄五郎い都一濱の深切でお屋敷を退放よおりましても何一つ不足あく却つて氣樂よ暮して居り升スルト、サラチラ耳よ這入るのい御屋敷を退放よおつたのい全く芝居の方で歌唄ひが差支へた譯でいあく外に手を廻して庄五郎笠原主膳の謀つた事であらふシテ見れバ再び屋敷へ事が耳よ這入つて見れバ是も必ず河野六郎笠原主膳の謀つた事と云ふ此歸つてもアノ二人よ惡まれていい迚も勤めい出來ぬうら夫よりい一層町家で暮す方ゞ善からふ何をして暮しても一生コレい好きあ事をして身を終る方が能い却つて藝人の方が面白い殊にい藝

人い心切があつて士よりも義理を知て居から一層藝人よ成て仕舞ふかと思つて居ますと中にい詔佞よ何か御稽古を願ひ度おどゝ云ふ者もあり庄五郎い三味線い彈けませぬが一濱が三味線を彈て庄五郎が歌を歌へる樣おことよ相成段々〳〵と面白いが長じて終よ藝人の心持よおりまする其頃藝人仲間でも黒い羽織を着る樣にあると何所へ行ても樂よお飯が食られると云ので此黒い羽織を着ませんでい交際が出來ませぬ庄五郎い年功い御坐ませぬけれども生れ付の藝で諸方の御座敷へ出て多分の目錄を頂戴致しますゐ所から終よ黒の羽織を着て見たいと云ふので黒に荻の葉の附いた羽織を着まして自から名を荻江露友と改め是から又相替らず歌を謠ふ樣おことよ相成りますスルト笠原の方でい最〆タ庄五郎い藝人にあつたから最御屋敷へ歸る譯い無い茲でおかのゝ緣組を申し入れてと云ふので其年九月の事で御坐いますが彼の菅野紋次郎をもちまして河野の方へ申入る菅野氏サア御上り下さい紋「御免を蒙りますエー其後い存外の後無沙汰を六「イヤ是い菅野氏サア御上り下さい紋「エー就ていおかの樣い六「サアヽヽ是へ紋「エー如何あ〳〵サアヽヽア是へ心配致ましたが些とい御宜う御坐り升か六「兎角ブラ〳〵致して居りまして御樣子かと心配致して生來餘り達者お方でも御坐りませぬから紋「ソレハ嘸御心配ナ、コレハ御新造今日い妻「時に此頃い御役替でい御坐りませぬか紋「エー有難う存じます何少々ばかり昇進致した處が緣類抔が六「イヤコレハ御心附けで恐れ入ります紋「エー早速申上ますグ參てお話しを致した筈原殿の一件おかの樣を早々お緣付よおらんけれバおらぬ今迄御約束を致して仲々に相成つたが最年も十八歳にあるから早いが宜いと取急ぎまするうら早々何か、貴方早速何か願ひま

す六「コレハ、サウ急に被仰ても夫よ就ていい傘てやし上げた事もあり紋「御話も有りましたが先方でい悉く御急きて誂よ善い急げと云ふ譬へのゝ通りですから何か御早く六「夫に付ていい傘て相談よ參つた事もあるが何分よもおかのが不承知をやす夫い既に笠原氏にもやし上げた事で紋「エー其おかの樣の不承知と云ふのい森庄五郎の一件ヤヤア有りませぬう全体アレヲおの樣が御慕ひあさるのい何云ふ約束がある知らぬが餘り詰らぬでい有りませぬか妻「イーエ夫よ成りまして此程い大分加減が悪う御坐いますい故のある事で御坐いまして夫が爲よ病氣よ成りまして妻「デハ御坐いませうが何も人に逢ふ事を嫌がつて居りますから紋「ダガ一寸何か御目通りを致し度是に御在ですかイヤ是い此方ですか御新造「エー御嬢樣へ被爲入ますか一寸御目に掛つてかの「サー何か御這入り遊しませ醜に見苦敷くハイ是い御嬢樣一寸開けても宜う御坐いますか取散カッて居ります紋「エー是い何も誠よ大シ遊バーてい往ませぬど全体貴嬢い男勝りの御氣性で一旦斯と云おかのさん、貴嬢サウクヨ〳〵ふ約束をしたら違へぬと云ふ正しい志操がある者い往ませぬ御屋敷交から御話しのある溜池の御屋敷へ御緣付あさいチーアノ森庄五郎と云ふ者を御暇に相成つてから謹んで遠い所へでも身を隱して居れバ又御詫の叶ふ折もあるがアレハ迚も御召歸しにある事い出來ませぬ段々聞いて見れバ貧屋町邊で矢張り唄を謠つて此頃い藝人あ相成つて諸方を步行いて漸く僅かの祝儀を貰つて藝人交際を致し都一濱と云ふ者を女房にして宅で稽古を致ーて居ると聞きまーた馬鹿氣たことゝ云ふも、左樣お馬鹿氣たことゝいありませぬ全体御暇よあれバ身を謹んで居おけれバおらぬ夫を謹ますよ藝人仲間へ這入つて交際をするおどゝ

い餘り怪からぬ事でいありませぬのヂー御嬢様庄五郎の事い御諦めあさい菅野い無情に庄五郎を悪く云つて福永へ縁組の事を勸めますので　母「左様ゐ事を被仰てい誠に困りまず乗て御案内かい知りませぬが庄五郎と約束を致しました譯い私もおかのも大洪水の時よ命を助けられましたゆゑ、貴方そんゐ事い能ジャァありませぬか貴方ゞ是迄よ道を立つて夫も庄五郎が御屋敷に居れバ又道を立てんけれバあらぬゞ庄五郎い不埒ゐ事があつて御屋敷を御退放のみあらず藝人よおつて歌を唄ひ武士たる者が大聲を發して滿座の中で怒鳴るとい實に馬鹿氣た話しでいありませぬかダカラ速かに庄五郎の事い諦めて千石取りの立派ゐ御宅へ被爲入本當に手前い先方の様子を御覽よ入れたい先達つても一寸參つたら……立派ゐもので御嬢様ゞ被爲入と御入れヤすと云ふ八疊の座敷がありますが此間其壁を塗り替へたり疊替へあどをしておかのが來れバ斯々とスッカリ準備が出來て居りますが其前の小庭の景色の好いことドウモ何とも云ひ様が無い、貴方御嬢様、被爲入ませぬか、貴方、往ませぬか　母「マア貴方往ませぬヂー、ソー、キヤア〳〵と被仰と泣ますから　紋「ア、是い、往ませぬゐア　母「ドウモ娘が此通りで毎度御挨拶が出來ぬので心配を致します何分ゐも判然と答へを致さぬから參るとか參らぬとゐ答へろと詰めれバ泣より外い無いので誠よ心配を致して居ります　紋「ヤア夫でい、河野氏御娘が可愛から笠原との約束を反古ゐ遊ばすか　六「イヤ反古に致さうと云ふ氣が無いから詰める所が詰めれバ泣バかりで答へをせぬだから子ー　紋「答をせぬうらと云つて答へをせぬけれバ何時迄も御返答が出來ませぬか今日い愈々御返答を承ハり度い其返答次第で笠原のヤすにい役柄を勸めて居る者が一旦應と受合つて置いて娘ゞドウコウ云ふからと云つて約を違へれバ氣の毒だゞ腹を切るであらふ斯おつても娘い親に腹を切らせるかと云つて居るがドウデ御坐る河野氏御切腹あされるか　六「誠ゐ何も武士が約を違へるとい無いことだからヤア篤と當人よも申聞けて御挨拶を致します　紋「ヤし聞けると云つても其度々い參られませぬ乘て笠原と京屋の二階でヤーた事があるじやァ御坐らぬか　六「誠よドーモ、何か、最兩三日を　紋「イヤ、其うい參りませぬ手前い子供の使ひでい御坐らぬ主膳殿から仰せ付られて橋渡しを致さうと云ふ譯ヂヤア御坐らぬか　六「ソー　紋「イヽエ此儘よい歸られませぬ河野氏御切腹あさるか但しい御縁組あさるか晩と御返答を承ハつた上で彌々御縁組あされるあら早々結納の取交せも致さねバあらぬサア御返答如何此大祿を取る身の上でコレシキの事よ御返答が出來ませぬか手前い下男の使ひでい御坐らぬぞと吉相を換へて小脇差を引き寄せた時い河野六郎も返答に差詰つて暫くの間默して居りまするとヤ迄床の上よピッタリ寐て居たおかのが　かの「誠よ御尤様で御坐います全く私ゞ惡いのゝで親共が御約束を致しましたものを今更私が嫌だとヤーまして親よ腹を切らせてソレで善いと云つて見ていい居られませぬから私い仰せよ從つて參りませうがドーカ最兩三日の所、結納取交せの事を御見合せ遊バして下さる様に菅野様、笠原様へ願ひます　紋「エー御聞濟み下さるかソレハ忝けおい何も御孝心ですヂー、イヽエ、是が外の者でい聽き分けが出來ませぬが乘て御發明で男勝りの御氣性、是非義理を立つて斯と云つても善いが又夫でい濟ませぬから斯仕様と直よ御聞分にある所い實よ感服ナニ決して御心配よ及びませぬ縱令ひ三日や四日延びても極りさいすれバ宜いので、夫でい明々後日よ出て結納の御取交せを致しませう早速歸つて悦バせます何も其溜池の御屋敷の結構ゐ所を御見せヤー度

い殊ゑ其御両親が誠ゑ善い、御母様ゝ極優しい御方で此間一寸参つた時にも…チヨット見たとがあるが容姿と云ひ動作と云ひ流石河野さんの御娘丈ゑ長刀も習つて居るさうだ…と云て被為入ました早く此事を御聞かせやしませう何様に御悦びか知れませぬつひ前刻ゝ手荒い事をやしたグドウカ悪からず手前届かぬあぐら此事に付ゝ萬端御世話致すから悪い所ゝ河野氏充分に仰せ聞られて左すれバ手前ドノ様にも計らひますから、ナニゝ兎も角も早速悦バせませうと云ふのでヅーッと菅野紋次郎が歸つて仕舞ましたおかのゞ得心の趣を挨拶したので菅野ゝ安心して立歸りましたらハーマア善かつたと河野六郎夫婦の者も安心致て居りまするスルト其翌々日に改まりまして結納物を以つて参る其品物ゝ悪く結構ゑ物で　紋「エー今日ゝ改まつて結納の御取交せゑ六「イヤ、コレハ、サア此方へ紋「御約定故に詰り出ましたが御嬢様ゝ何ヤ御容子でも御ざらぬ尚更食も進まぬので色々心配致して勧めても食せぬでチー　紋「夫れァ何モ詰らぬ譯ですゑァ縦令森へ約定が有ても結納を取交せにゑつた譯でもゑく又御嬢様の事だから眉目形でドウコウと云ふ御氣性でも無いが何云ふ御様子で被為入かゝ今日ゝ實ゑ肝腎の所でゲスから御緩り御養生ゑ成てチヘ、マア兎も角も手前が仲人ゑゑるのゝナンだから何れ本當の仲人ゝ改めて重山ゞ宜いと云事でゲスゞ小祿の手前が仲人ゑゑるのゝナヤして居るが先づ結納ゝホンの御使でゲスから手前が参りました就て一寸何ヤ御様子か御嬢様ゑ御目ゑ掛り度いハィ御免此處を明けまするに六枚折の屏風が立廻ーて庭の方の障子が明けて御坐りますゑゑのゝ括り枕ゑ額を付けて打伏にゑつてホロ〳〵と泣いて居ります　紋「御嬢様ェ今日ゝ御目出度う御坐いますゑ結納の御取交せを致す積りで上りましたおかの

さん御起き遊バせゑかのさん母「コレ菅野様が爲被入タから起きたら何だいかの「ハゝゝと云ふので漸く起き直つて膝の上ゑ手を突いて暫くの間ヂーット菅野紋次郎の顔を見て居りますから紋「何云ふ御様子でゲスカ大層御痩せが参りまーたナアと云れてもゑかのゝ何とも云はず前ゑお在る手焙りを引き寄せまして火箸で炭を挟んで斯う疊の所へ並べまするから　紋「御嬢様貴嬢何を遊バすエー何を遊バすと云ふ中ゑ仕舞にゝ火を取りまして疊の上へホーリ出しまするから紋「オイ何を遊バす往ケませんよコレ何を遊バす、其ンナ事をゑすつてゝ往ケませんと慌て火を取つて火鉢の中へ入れ様と思ふと又火箸で火を挟んだゑり紋次郎の胸の所へ打附ましたから紋次郎ゝ驚いたの驚かゝいのザアゑゝ紋「アー驚いたドウモ、怪からぬ事どう成さるかの「お前ゝ誰だへエーお前ゝ誰だへ　紋「手前ゝエー菅野紋次郎でゲス　母「コレおかの、何したのだへかの「私の身の上ゑ就てゝ成りませんお前ゝ菅野様が分りませんかコレおかの、確かりしおくナヤアと云れてもおかのゝ何とも云はず前方が何と被仰つても私の身體ゝ構ひ売ゑあつて居ります　紋「コレ御嬢様確りあさい、何か遊バしたかかの「夫デモ、モー……ゑ涙高くとやして唄を謡つてゝ庄五郎位ゑの者ゝありません私が庄五郎ゑ縁付いて……鹿毛の馬に乗り鎧を着て長刀を揉い込んで立上りますと其上へ黄色い玉や青い玉が八ッバかり飛び出す其玉ゞサッサッサッと裂けましてスーッスーッスーッと五色の糸が出ます　母「コレ早く醫者を呼んで來ゑ、是ゝ困つたものだ全く狂氣を致した様だ早く醫者を　紋「左様でゲセウ、火を打付けられてゝ驚きました若しおかの様確りゝ遊バせ、其うゑ打ゑすつチヤア往ません氣を靜めゑけれバ往ませんぞ六「コレおかの、何をするのだ確かり致せ其う云ふ狹い心を出してゝと云ふので兩親が押へ様とするとズーッと立つて長押に掛つて居た氣て奥方のら

拝領の時給の柄も付いた長刀を掻い込んで立上つたから紋「コレ御嬢様往ませんと云ふ内よスーッと鞘を拂つて紋次郎よ切つて掛つたから紋次郎い驚いたの驚かないの飛出す拍子よ沓脱石で去たゝかに腰を打つて漸々這つて逃げました續いておかのが飛出すから後から河野が抱き留めてサア早く醫者をと云つた所が中々暴れて居て何する事も出來ない此氣違と云すい怖ろしい力の者で醫者ゞ來ても取ッても附けません漸くに母が來て和めると少し落付いて床の上へ横よある其處で御醫者が脈を取らふとすると又持つて居る物を投げ附け火鉢を引繰返す、何も如何とも仕樣が無い中々藥處でい無い何も物を食べずゐ狂つて居たのが三日間何分致し方ゞ御坐りませんから先づ重役の方へ話しを致し座敷牢を拵へて監の中へおのを入れて氣を靜める樣にして置きまする所ゞ監の中でも時々暴れ出してドン〳〵〳〵ンッと地響きのする樣よ疊を踏みますゐ其うかと思ふと落付いた時い何か仕事がして見たいから針箱を入れて下さいおどゝやします、けれども鋏や針箱を入れたら何樣事ゞ致すかも知れませんのら其ンお物を入れることい出來ませんから折物を出し御細工物をと云ふので千代紙おどを母が切り細裂て宛行と丁寧に細工を致して居る細工を致して居るかと思ふと折角出來上つた物を引き破つて拋り出す何も劍呑で何分にも致し方ゞ御坐りませぬ

第七席

扨其年も果て翌年寶曆五年の十一月よおつてもおかのハドウモ能くないサレバと云つて醫者ゞ來ても見ることも出來ません或日河野ゞ蓑たれて歸つて參りまする　妻「御歸ゝ遊バせ大層お遲御坐いますヲー　六「エー今笠原へ行きまして親ひ物をして來ました物を懇望におつた

福永がチエおかのが氣違ひよおつたので先方でい最う迚も直らぬ醫者よ掛つて藥を飲んでも發狂の直る藥いおい只マア下劑でも用ひるより外に仕方が無いが何分アノ通りで夫も往ぬ大抵氣違ひになれバ七年か或ハ十年位ねだが十年迄生きる者ハ少おいから先づ三年も立てバ暴れ無くおり其あれバ大抵い死ぬと云ひます　妻「死ぬたつてもナニモおかのハ壽命で死ぬのでハ御坐いません全く貴方ゞ其ナ事ゟ遊バしたので御坐いますよ　六「ナンソヲと云ふと直に貴方が遊バーたと云ふけれども親ゞ好んで氣違ひよ致すと云ふ譯ハ無い　妻「無いたつて庄五郎の處へ遣ハされゝバ斯ナ事にハあらぬのに貴方ゞ主膳と約束をして是非福永へ行けと被仰から娘氣にも一旦約束をして置きましたのゟ變換へてハ義理が立ないと云ふ所から、貴方ハ女の心を御存じ御坐いますまいけれども女の心で斯と思へバ一途ゟ參りますす夫にいまだ年も參りません夫を彼の斯のと切腹までも勸められますのら何ぞたら能からふと心配をして氣違ひにおつたので全く貴方ゞアレの心を狂ハしたので御坐いますよ　六「何も重々惡う御坐いますよ惡いが其う貴方が〳〵と云ふて下さるおよ私ハ本當に憂イからチエ斯う成り行くも前世の約束で有りませう　妻「前世の約束も無いもの貴方ハ御墨量が御坐いませうが、私ハアレがまあ無つたらナニ樂みゞ御坐いませう私が色々とヲせバ少し落付きますが、私ハ夜分も寐やヲ致しませんよ　六「お前バのりじやア無い私だツて寐られやヲ仕ない左樣よ私を責めたつて仕樣が無い夫だから詫りますゟ本當よ困りますあヲ是よい引換へ福永でハ御新造が來て最う五月の帶と云ふので祝ひがある其來て居るのハ元ハ紀州の藩の入江玄龍と云ふ醫者の娘此入江と予すのハ元と紀州の藩の入江玄龍と云ふので今ハ養子が跡を繼いで五

（荻江の一節）

拾石取つて居ると云ふ尤も紀州藩の入江惣右衛門ゲ里にあつて縁付いたと云ふこと誠に目出度いと云ふので御客をしたり祝ひよ行く様あることだが若しおかのが行つてアノ様あらと存じて居るのだ夫い兎も角も先方へ恥入つて貰よ弱るテ　妻「アノ何で御坐いますか市ケ谷淨瑠璃坂の醫者から御新造が参つて居りますか千石も御取り遊バして其ナ者を　六「ナニ入江惣右衛門の妹分よして縁付けたのだから何も仔細い無い惣右衛門と云のい紀州藩だからノー　妻「夫い何時縁付いたので御坐いますエ　六「何でも昨年の事だつた此方ゲ氣違ひに成つて迚も往ぬと云ふので直ぐに縁談ゲ整つたと云ふことで　妻「夫に付きましても早くアレを森庄五郎へ御縁付け遊バす様あら疾うに子供が出來て居りますものを　六「ナニ出來ますよ、本當に私しいアレがたのでアレが成り度いと云つて成つたのじやァありません皆ナ貴方があすッたので御座いますよ　六「ナニ私が好んで氣違ひにすると云ふ譯い御坐いませんよと云つて居りますると監の中から細い聲を出しましてかの「御親父〳〵」　妻「貴方呼びますよアレが呼びますよ河野夫婦が頻りよ押問答をして居るうちおかのが監の中から御親父さま〳〵と呼びますので　妻「貴方呼びますよアレが呼びますよ　六「イイエサ何か宛行いぬが善い何でも打附けるからチエ全体御椀よーなさい茶碗でい毀れたのを踏むと往けません足を切升うらチエ……お前確かり仕あけれバ往ません　せお前氣を沈めて呉んあさいよ私い御母に責られて誠に愛い私が悪いうら堪忍してはやく全快して下さいよ、分りませぬのへ、かの「ハイ、御親父さま只今承いり升すれバアノ福永い入江とやす醫者の所から緣が參りまして五月帶に成りましたとヤすのい夫い眞で御坐いますか　六「アイ眞で今日い結

（荻江の一節）

の祝ひを致すとヤーますから是ゲお前であつたら結構だと思つて誠よ私い殘念よ思ふのでかの「夫い御爺さま全くで御坐いますか　六「全だつてお前向ふでい最う お前い迚も往ぬ只の病氣と違つて縱令へ直つても元の通りにいあれぬと諦らめて小祿の五拾石と取り詰らぬ役を勤めて居る者の妹を貰つたのだ尤も容姿い美いそうだが何も詰らぬ事でかの「ハイ、御爺さま何卒夫でい私を監から御出し遊バして下さいよ　六「イイエ夫い往けませんよ何時でも落付いて居るから出さうと思ふと亂暴を初めて恐ろしい力が出ますからチエ此間も妙な所を押へられて呼吸が止りましたイイエ出す事い往ませんよかの「ハイ最う決して御心配い御坐いません福永へ嫁ゲ參つて子供ゲ出來まして帶の祝ひと承いりましたので夫故よ安心致しまして私の病氣いスッカリ直りました　六「イイエ毎も直つたと云ふから安心して出さうとすると酷いことを仕升よ此間の様に私の鼻へムシリ附くから怖いよ　かの「イイエ御兩親に長らく御不孝を致しましたが私の病氣い全く僞氣違ひで御坐いますから　六「エ、何だへ僞氣違ひだと　かの「ハイ昨年の九月に菅野ゲ參りまして若し約束を違へたら其場で切腹するかと貴方へ御難題　私も御母様も森さんと約束を致ーまして縱令へ生涯離れても女房だと森さんも被仰つた事も御坐います夫も私の方から願ひまして森さんが御屋敷を出る様な事に成りましたのも元い私から起りまーた事で御坐います夫故よ何も福永へ緣付きましてい私ゲ庄五郎様よ義理が立ちません故に何致さうと思案の餘り誠に御兩親様にい長らく御不孝を致しましたゲ全く先方で諦めの付きまする様ゐ僞氣違ひに成りまーた其證據い只今迄御母様や御父様が御心配を遊バして監の前で御話しの事を皆ゐ覺えて存じて居ります最う決して御心配い御坐いませんから何うぞ監から御出し遊して其うして私を何

（荻江の一節）

うか一生奉公お御遣り遊ばして下さい御両親様何うか只今迄の不幸を御宥し下さいまし私いどの様お事があつても森庄五郎様と言ひ交は、したからい決して他へい縁付きませんと云ひながらワット聲を上げて泣き倒れまする河野六郎も我が折れてウワンと聲を出して男泣きに泣き出しまする妻「ソレ御覽遊ばせ是程よおかのが思つて居りまするものを貴方が御無理お事を被爲仰ばかりで縱令へ僞氣違ひでも是迄躬命して監の中へ這入つて居りましたアノ氣性だから長く辛抱致しまーたが是からまた何ナ病氣に成るかも知れません六「何うも恐入りました重々濟まん妻「濟まんぢやア御坐いませんよ早く鍵を持つて來て錠を明けておかのを出ーまするおかのハヒッタリ疊よ額を付けて詫をする河野六郎も大きお我が折れて望みの通り赤公を致すが能いと國元の方へい書面を出し是から阿部伊豫守樣と云ふ備後福山の御城主で小川町の御屋敷へ奉公よ上り是が野川と名を改め六十年の間奉公を致して七十八歲で身退りました荻江露友い龍河岸へ世帶を持ましてから屋敷の者に見られるのを恥て居りましたが終にい段々馴まして最う藝人と共よお座敷へ聘れまするど何とも思いず此方が結句樂だと惡人口もあれて苦勞人よあり段々藝を磨まーて其頃名高い荻江露友殊に聲が宜いのよ小聲で狹い座敷で唄ひまするこどが至て上手で其うかといつて又廣い處で唄ひますれバ感も呂もきいて節廻しが宜いと云ふ寶よ銘人で御坐いますスルト、何うせ貴殿い生涯これでお仕舞あさるおお厭でも貴方劇場へお出あさいませんか貴方あれバ十分に宜い給金を出さうと謂ひますまア貴方がお出のけにあれバお客もつきませうから此度富士田吉次が初舞臺で御坐いますからと勸められて、何うせ藝人に成た身の上だゝら劇場へ出て唄つて見やうかと云ふ樣お事よあり出唄ひのことだゝら赤い上下を着て並でやる了簡み成ました、富士田吉次と申ものい故の都和中の弟子で可愛がられて居りましたが一体い京都のもので此頃ろ京都に佐野川萬蛸と云ふ役者がありまして其門弟で佐野川專藏と申す役者で御坐いましたが江戸へ下つてから都和中の弟子よ成りまして都節を上手に唄ひ聲が宜いから富士田吉次と改めて唄うたひよありました其初舞臺で立を富士田吉次が唄ひ脇を荻江露友ゞ唄ひ、寶曆八年正月十五日から初て三日迄大入で御坐いました劇場の外題い今摸樣導成寺で此位這入た事い無いとやしますなゞ實よ爪も立んやうお大入で其頃の劇場い打出も遲う御坐いまず三月い花時分でお屋敷のお客が多く御坐いますかゝ御殿女中が大したことで樣敷い椎茸髷ばりで御坐います、スルト中幕の導成寺が濟まするど川島と云ふお茶屋へお客樣が來て富士田吉次さんと荻江露友さんに御用が濟だらどうか是非御膳を上げ度いゝら入しつて下さい其御客い御殿女中と云ふと御同然に稱代おもので女に聘れた心持い能いものとみへて富士田吉次いもと俳優をして男振も宜いから女に惚られたともあり己惚が強いから想ひつかれやうと云ふ了簡で身衣裝も奇麗に致し兩人揃て出まして女の案內で二階へ上りまず、廊下の障子を開け吉「ヘイ今晚い、、富士田吉次で露「荻江露友で吉「ヘー今日いどうも有難いことで宜うこそ御見物で、また幕數もかづ〳〵御坐いまず、、これから切がまた宜く、大詰い華麗お處で女「サアこちらへお這入遊バーて露「ヘイ、と首を上て見ると床付の處に坐て居りまするいお屋敷風で、重役のものい肩はづしにいお召結ませんさげ下地といふ髮で、中老役い頭捲へも違つて居まず御殿女中の頭髮い油でテカ〳〵光つて塊まつて居りましたソレガ今いおくおつたから下刺（油店）抔い間隙よあつた譯で着物い

腰摸様で、細かい摸様を着る者やど役が高いと云ふこと、彼の女中い此細かい摸様を着て金純子の帯をしめ箱せこと云ふペラ〳〵した簪屋の看板みたいあものを下げて顔もペッタリ白粉をつけて唇い萌黄色よ光て美麗ともあんとも品が一格高いものでズーット床の前よ坐つて居りまーたが、どうも立派あ御家老様とも應對してピタ〳〵遣込る中老の見識い大したもので御坐ります年齢い二十一二位のと思いるゝ其側に居るの部屋の者で劇場でするからお初のやうあもので旦那様を大事よ致します荻江露友い富士田吉次と御殿女中の座敷へ出ますと側よ附て居りました部屋方が女「さアお揃あくお師匠さん此方等へお這入遊ゞして、夫でい往けません此方へお這入遊ゞして御遠慮あすつてい往けません本當よ旦那様い世間知らずで御殿勤めたかり遊ばして世間の事い些とも御存じ御坐いませんから下方のことを御聞遊ばすのが御樂で貴方ゞたをお聘申たのですから決して御遠慮遊ゞしてい往ませんサアドウゾこれへ」吉「これい何も恐入ます御免を蒙りまして、銘々へ御膳をこれいどうも恐入ます」露「有難う存じます。富士田吉次いナニ皆最うデク〳〵したものが多い大抵い何だかどうも最う頬片抔い落さうあ顔の子ざるを荷負つた拙梅で力い五人力もあるやうあ体格の者が多いゞ此御殿女中い劇場で致す尾上とも云ふやうあホッソリした姿で二重目瞼の惚々とした愛敬もうるおいやうで首を下げに居りますると女「どうゾ貴方お酌をさして下さいまし今日い旦那様ゞ久しく振のお宿下りで被入たのでアノ何で御坐いますか多勢女中も連れて被爲入ましたが芝居でい邪魔だと云つて御返し遊ばして私が一人お供よ參たので御坐いますから御遠慮遊ばす様あ人い一

人も御坐いません旦那様い演劇を見るよりも御師匠さん方の唄を聽度と云つて被入たので貴方がたわお目よかゝれゞ御安心にありますで御坐いますのだから御緩り召上りまーても恐入ます劇場を見あいで未熟の唄を御最負よ遊ばして殊よ御殿女中方にお酌をーて頂くとい有難いとで冥加至極あ事で」女「ナニ私どもゞ冥加至極で御坐いますよ旦那様い万一してお宿下りに劇場へ行てお師匠さん方ゞ御加減でも悪くてお出ゞあい時い何う云やう信心するより外よ仕方いあいと云てチエ貴方紙絢でさしを拵へて御廊下でお百度を致しましたよデモ一心い貫くものので御坐いまして今日御師匠さん方わ御目に掛る事が出來たのい全く鎭非戸の天神様の御利益だと思つて、寔にドウモ能く被入て本當よこんな御嬉いことい御坐いません坂う云ふ御氣性で御坐いますから別に御世辭を口に出していふ被仰いません心でお喜びで御座いますから御遠慮あく面白いお話しでもい聽せあすつて其うシテ緩りとお遊び遊ばせ」吉「有難う御坐います」露「是い何うも恐入ますると盃を受ける露友い盤よ「これい何んで御坐います旦那様からお盃を頂戴」女「疑ッて居りまするから長唄の文句を考へて下ゞかり何て居りましたが盃を手よ取りかがらヨイと床付の所よ居りまする御殿女中を見たやうあ面影と思ふコレハ其筈で河野六郎の娘ふのが中老姿よ着飾つて凛々敷整然として居るのら露友い面目なくて口も何も少しも利あくありました」中老「アノおやや皆様が御酒がお厭あらゞ御膳を上げるやうにお前宜いやう女「宜敷御坐います……御酒い少しい召上りませう……」何も吉次さんの御評判の宜いこといふ大した事で御坐いますが又何うも露友様の御聲が宜いので其御評判の宜いこと實よ何で御殿でも最う俳優よりもお評判が高う御坐います此度のお劇場い其唄と俳優の長いのと兩方で這

入るので然うでおけれバ此様ゑ這入譯い無いと被仰つてい御坐います本當ゑ貴方がたにお目通りしたいバかりで一年も信心して被入位ねで「露」恐れ入ります嘘よも左様御意遊バして下されバ露友有難いとゑ今晩い心嬉しく頂きまして少々酩酊致すか知れませぬ失禮い御免を蒙ります

第八席

吉次い自惚ゞ強いから是い己れお岡惚をして居るゑと思ふから俄かにハッンデ元々好きゑお酒だから酔か出る程續けて頂きました　女「アー御酒ゞゑんで御座いますゑらバ旦那様い少し御用があつて御急ぎにありますことも御座いますゑんの心計で御座いますが　吉「多分のバ御酒の御對手でも女「イエ少し御用も御座いますの有難う御座いますす直ぐゑ御歸りと仰しやる露友お禮チ　露「有難う存じます、最う少し飲んで居たいが歸らぬときまりが悪いから吉「左様ゑらと露友と共に歸ろうとする、スルト　女「アノ若ー〳〵露友様誠ゑ恐れ入りますが貴方少し跡へお殘り遊バして旦那様ゞ一寸申ー上度ことゞ御座いますから、吉次さんいお歸り遊バして宜いの吉「へィ〳〵左様ゑら、何だか訝しいと思ふと下へ降りても嫉妬根情がありますから帳場へ往て煙草をのんで愚圖〳〵話しをして居り用場へ行つゑ裏から首を出して見たり種々ゑことをしてをりますさァ此方等へ入らしつて餘り間ゞ廣過ぎますからさァ此方等へ。誠に間が惡さうに露友い這入つて來ます　女「さァ旦那様此方等へ、貴方様面側へ……私しいゑゃと申す不調法者旦那様にい一方ゑらぬ御恩を戴きます者で此後ともお目を御かけ遊バして下さいますやう露「是れい初めて、其う仰やつてい甚だ恥入りました事で　女「旦那様

が常々お話しで御坐います誠に何うも妾故からァ、やつて藝人にお成り遊バして町家住居をして吶御不自由で入らツーやらう誠に申譯がありません斯う云ふ譯だヨゑゃと言つて子御身拵を段々伺ひますると御悼しい事ゑ存じまして、實ゑ毎度御贔屓で御坐います今日いでァ思ひ掛けなくお目通りが出來ます樣ゑ事ゑゑつて斯んゑ嬉しい事いありと御意遊バして貴方が御壯健で入らツーやるのい何樣ゑか御喜びだか知れません　露「誠ゑ面目次第もありません　女「さァ此方等へ入らしつて餘り間ゞ廣過ぎますからの罪ソレを慾もゑく劇場へ出て吶をうたふ樣ゑ了見違ひの者かとお輕蔑であらうけれども、屋敷へ歸參しても再び奉公い出來まいと思ふのい兼て知つての通り重役に憎まれていい辻も勤めい出來ません夫故止を得ず何で暮らすも一生と云ふので藝人にいありましたが實ゑ暮し方にも困るから箇樣ゑ身の上ゑゑつた何うも笑つて下さるナ、あれども斯うやつて居ても河野い何うゑつて居るかお前い何うして居るかと心に忘れた事い無いけれども兩國を渡つて上屋敷の近邊へ行くとも出來ません依つて、ヤア、人の噂でありとも樣子を聞うと思ふゞ何うも屋敷のことハサッパリ分りません親父樣親母樣いゑよもお變りいないかへ中老かの「能くまア夫れでも、恰五年もお目通りを致しませんから妾の樣ゑ不粹ゑものいお忘れ遊バしたと存じて居りましたが片時も忘れた事い無いと仰やるお言葉で何より妾しい嬉しく存じ升陰ゑがらコレ〳〵だと云ふ御評判を聞きまーて吶まァ御不自由を遊バすだらふとゑゃと申し暮して居りましたが一濱と云ふものが貴方の爲ゑ親切を盡して御不自由の無い樣にする事も屋敷で聞きましたが其う云ふ親切ゑゑ人でゑるゑら一濱と云ふ人よも一寸と逢つて御禮も言ひ度いと存じて居ります能くまァ夫れでも貴方思ひ切てお厭でも御坐いませうに左樣ゑ事を遊バし御身の上ゑお成り遊バしました、ヲ

エおや　おや「本當で御坐います時々ヂ何う云ふ譯だか御親父樣のお心持が何で一寸とした行違ひから斯う成つた事で嘸お恨み遊ばして入ッしやるだらうと中してヂ　雛「私も誠にお前の志し知つて居るし何處迄も一旦約束をした以上い必らずお前と連添あけれバおらん殊にい老婆のゆいたん言も有りますが何うも私がお前と連添へバお前の身にも係り私も命よ障る樣あ事だから其時い思切つても親母樣のお志しが忝けあいから生涯離れて居てもお前とい夫婦だと約束を致しましたから縱ひ一濱が能く世話をして呉れても一濱い私の女房でいあい離れて居ても矢張お前を女房と思つて、イヤ氣休めでいあい本當よ其う思つて居るのだがお前が左樣あ身の上にあつて劇場見物よ來て私を聘で呉れやうとい思いなかつた大層立派ナ身の上で宜い役を勤める樣に見えるが何方等へ　中老かの「アノ阿部樣へ御奉公を致しますおかのが阿部樣へ奉公致して居ると中すから　露「ァ、左樣でお役拂で宜敷と見込て其う遣て立派よしてお目に掛れるのだから今日の樣あ思ひ掛あい喜敷こといあい　中老かの「何か失禮の段いお宥し遊ばしてアノお一人お聘ヤさうと存じましたけれども又御一人だと人が何とか思ふと往けあいからなやも心配致しまして聘度も御坐いませんが彼の吉次と云ふ人を御一所よ聘ました露「左樣で女「ソレデ彼の人が立を唄つて居るので呼バあいも世間へ悪いと思ひまして貴方と一所お聘でみれバマア厭あ奴で愚頭〳〵して厭よ御世辭を言て居て早く歸れバ宜いと思ふと最う一ッ頂戴杯と實に厭あ奴でと……富士田吉次い之を聞て怒たの怒らんのであい突然裏階子を驅下て是から高麗屋と云ふお茶屋へ行と鐵砲洲の上總屋文藏と云ふ元締が四人の子分を連れ都和八と云ふ幇間が取卷て居る　文「和八和「へイ　文「まだ師匠い來ねへか　和「おんだか師匠い奉氣で逆上て居ります今日い肩外しのお客と來ると何だう扇で頭を叩いて、何も女のお客と來ると氣が若いからヂ　文「濱こういまだ來ねへか　和「濱ちやん、まだですか　文「阿母に師匠が萬事話しを付けて極り付たのだらふ　和「マア一寸話しが付いた樣あ譯で　文「一寸譯と云ふ筈が無い師匠が話を付けたと云ふから家の者い皆揃つて來たので外の者でい往けあいがお濱あら善いと云ふのだが何うも妙だのう外の者を家へ入れて妾おするてエバ何だとの彼だとかブツ〳〵言ふが一濱あれバ私が先へ惚れて居るからお濱の樣あ氣象あら妹分にして目と掛る縱令へ元締さんが放拋ても私が放拋ねエと女房が言ふので和「恐入ましたナ何も姉さんの氣象い違ひますナ何だつて何時も先づ人扱ひの善いこと私どもが一寸行ても直よ何か喫させやうと云のでドウモ違ひますヂ　文「ヲ、師匠來たか濱公いまだ來あいか　吉次「大きに何も遲くありました　文「濱こういまだか　吉「へイ文　酷いせ御殿女中に聘れて惚氣て居ちやァ無いの　和「元締さんが早く呼んで船に乘せん　文「和八や和「エ、文「エ、ぢやアヂエ濱公いまだ來あいか　吉「へイ文「エ、ぢやアヂエ濱公いまだ來あいか　和「困るたつて阿母に逢て話しをして阿母が得心で濱ちやんに話をして置くと云ふからチヤント家へ連れて歸るてエんで濱ちやんを迎ひに行ても厭だてエのだが何も困るヤアアあいか　吉「困るたつて阿母に逢て話しをして阿母が得心で濱ちやんに話をして置くと云ふからチヤント話しが付いてると思ふのら安心して　和「所が阿母さんが何と言たつて私い厭だてエーので私共の言ふ事い聽きませんからヂ師匠の娘で私が食客ーた事もあつてお前是をと云ふので足駄の泥と落ーて呉ろと云ふアノ氣性だからヂ何も往けません　吉「困るヂ　和「極りが悪いうら私が行つて、來ることい一寸來て直ぐに歸てもよいが宜いからつて胡麻化して据ゑ樣と思ふつても濱ちやんが勝手を言ふからヂ、厭だてーので吉「其ァ困るヒやァ無いか　文「師匠濱こういまだ來るだらうのう吉

「〜イ今迎ひに行たので只今よ參りませう文「これハ皆家の子分で、長く贔負にあさるが一濱許ハ親分の手よ入るめエと云つた所が今度當人ダ得心で來るとあつたから迎よと云ふので家のやつが吩付たから頭立所の者が來て呉れたので吉「〜イ何うも誠に何でゲス。とハ云つたが吉次ハ若し一濱の厭と言て來あけれバ大變と思ふからどぎまぎして階子を下りて帳場へ行たり饅頭〳〵して居る、溜らんから又迎ひよ遣りましたので一濱ハ厭々出て來て二階の坐敷へ上らうとすると吉「一寸〳〵一濱「チヤ富士田のお師匠さん吉「一寸コ、へ濱「今日ハ何で玆へ呼びよ來ーたの吉「濱チヤン困るじやアないかヲ阿母さんよ話をした所が阿母ハ何しろお前か抱れるのだから萬事任せるから師匠の宜い樣にして家ハ立行さへすれバ夫で宜いアヽ遣つて何時迄も家に獨りで愚嗅〳〵して居てハ當人の爲にもあらず又親父さんの死んだ後ハ家よ不都合もあつて借財あどゞ殘つて居るから心配ーてると云ふ阿母さんの話だうら兎も角も厭でもあらふがウンと言て一年でも半年でも鐵砲洲の元締の處へ行てヲ、お前さんが行けバ姉さんハ直ぐよ隱居して仕舞と云ふのだから此上もない仕合だ濱「亦極りを言てるヨ阿母が何と言ても私ハ厭だヨ私ハ都和中の娘で阿母さんハ全体内へ來た御賄炊で夫よ手が附て後添にあつて今ハ阿母の役をして居るが彼の通りの慾張た氣象だから私に旦那を取れあんて聞度もないお前さんが阿母よ云つたもんだから眞受お受けて長く贔負よあつた人あら行くが善いと云ふから私ダ厭だと云つた所ダ最う約束をして仕舞つたのらと云ふのだがお師匠さんだつて餘りじやアないか私よ一端話しをしーて夫から阿母さんよ話しをしても宜いに突然よ阿母ふ云つて仕舞ふから阿母ハさア行けと云ふので私ダ獨りで困るヨ阿母ハ何と云つても私ハ嫌だヨ吉「嫌ダガヲお前ハヲ狹江露友に義理

を立て居るのだらう濱「立て居たつて宜じやアないヶ一濱が露友の世話をすると判然云ひ升ので吉次ハ最前の事ハあり少し憤然とあつてヲ、ダガ夫れハ分らんヨ狹江露友を彼樣よ世話をするのが世間の評判よあつてまア濱ちやんハ夜の明けあいうち露友の處へ行つて飯焚迄をする譯ハあいと云ふせ本統よお前さんハ好い藝を持て居あがら露友ハ大した藝人でもあいよ稼いだのを入り揚げて其上内所で借金をして苦しんで居ることハ知つて居るが餘り馬鹿氣るぢやアあいか私も一旦親父の弟子になつたもんだから私ハ常よお前の事ゞ思つて居るので、お前の身体が立派よある樣にするのハ當然の人情で、夫れよお前ダドコ迄ゝ露友の女房にあれるあら能いが女房ハ古派にあるので今日川島へ來た御殿女中ハ滅法宜い女で已れと露友と二人一所に聘れたが富士田さんハ先へお歸りあさい抔と云ふ、何だか知らぬが仕方がねエから先へ歸つて蔭で樣子を聞くと牛涯隱れて暮しても女房だと言ふと一濱が世話をして呉れてお前さんハ仕合だと厭みを言ふ其するとナアに一濱ハ女房にハ仕あいホンの一時の妾で雇同樣よ置くのだから私ハお前と約束をした以上彼あ端多ねエ女を女房よするる氣違ねエとお前の事を惡く言つてたヨ馬鹿〳〵敷いぢやアないか藝人がお客を馬鹿よするのハ當然だが御客筋の者よ藝人が馬鹿よされる實にみつともねエ其間抜さが溜らねエ夫れよりハ元締さんの所へ行て姉さん代りをするので其うすりやア狹江露友を聘で禮儀でも遣れる身の上濱「私が好て露友さんに親切を盡してもよ入揚ても私の了見だから何もお前さんの御世話よハありまセんヨ元締さんハ普通へ藝で聘で經頭を出せバそれで宜い吉「其んなお詰らんことを言てハ仕樣がないヶ一寸顏を出して　濱「厭だヨ文「コレ和八〳〵ま

だか和一最う参ります、ヨー先刻からヲレ込んでるのだ吉「其あこと言すに一寸濱「ヲやアまア富士田のお師匠さんの顔を立てゝ行ませう文「濱こう來たかエ和「今參りました文「濱公面側へ來ねエ和「濱ちやん元締さんの間へ一寸お坐りあさい濱「ナニ私ゝ自分の坐り度い所へ坐るヨ……親分まア和八と富士田のお師匠さんに聞ましたら阿母と相談の上で私をお家へ連れて行て妾にする其事ゝ姉さんも承知で迎ひに來あすつたと聞ましたけれども私ゝ阿母から別に斯うと云ふ詳話しもあいので和八から聞いて初めて漸く話しが分つたのですが今迄藝で最負よして招で下すつた元締さんが妾にあんて其あ色氣を出す樣あ親分であいからと云つて、エー妾ゝ正直に言ますヨ和「そんあ事を言つちやア仕あい困りますヲ濱「イヽじやアねエか文「チイ〳〵富士田の師匠吉「ヘイ文「ヘイじやアねエ何だお前阿母よ整然と詰しい濟て居るてエからそれ丈のことをして今日濱こうが慥かに來るてエから斯う道つて家のものを殘らず呼で來たに今日にあつて當人よ馬鹿氣た事を言れちやア顏の立端が無いじやアねエか夫じやア未だ話しが屆かんのだ吉「然う云ふ譯ゝあい私ゝ劇場へ出て居りますから和八が話しを致したので和八お前が惡いヨ和「私ゝ困りますチー濱ちやん私が萬事受合た譯でも何でもあいが何うも大變よ行違ひよあつてる事があるので是ゝ斯うしてゝ入られません何か濱ちやんお願ひですから厭でもあらふが何か容子の宜いことを言てお呉んなさいお願ひだから憫然と思つて何時でも親分が癇癪を起すとげんこと煙管でポカリ遣られる其痛さゝ無い何かお願ひだから和八ゝブル〳〵頭へあがら手を合せて拜まぬばかりに賴みます、けれども一濱ゝ颯張取合ません濱「お前ゝどうせ暫間だからお茶々濁を言て取持口を利てるのだから仕方があいが富士田のお師匠さんが餘まりじやアあい

か富士田吉次さんと云ふ立派ナ堅唄ひの人が桂庵口を利いて色の中立で禮を受あくつても宜いじやあいか富士田の苗字の名前ゞ廢るヨ私の家よ居た事もある人で死で親父の外聞にもあるから止してお呉れ私ゝ前醫を賣る身の上でゝありません私ゝ藝一方れ一濱ゝだから若し藝の氣に入らあけれバ招あい方が宜い妾よありたけれバ自分の好た所へ行きます私ゝ厭たから厭だてエの許り女じやアねエ、けれども斯しが屆いたと云ふから斯う遣つて來たんだ夫を今よあつてお濱で誠に正直あ話ですヨ文「チイ師匠チイ吉「誠に何うも文「誠にたつて厭あれバ厭で宜いヤ一濱に其んあまとを言れてゝ困るじやア無エか吉「是にゝ種々譯があるのでコレ和八お前が全体屆かんトやア無いか和「ヘイ何うも困りますチ段々此地へ和八が廻つて來る樣あ事でモシ濱ちやんお願ひだから濱「厭だよ、若し親分私よゝチ荻江露友と云ふ約束をした男が有ますから縱ひ話しもせずにお前さんの所へ行く譯にゝ往きませんから今迄の通り奇麗よ藝バかりで招で下さいと却つて其方が宜い私ア妾にあるのゝ厭ですよお師匠さんも色の取持いよして下さいとサンザ腹を立たせて極りが惡いからズーッと褄を取つてパラ〳〵と歸りまする、さア座中ゝ興醒たの興醒けあいの、上總屋の親分ゝ額へ皺の樣あ筋を出して物をも言ずよ和八の額をポンと打た、其痛いの痛くあいの飛上るやうで御坐りますが痛いとも言ずスーッと跡の方へ居ざつて廊下へ出ます、するとサンザ座が興醒だから續いて子分の衆も皆下りて來て何うも親分に氣の毒だ餘り届のあエじやア無へかと愚頭〳〵言ひあがら電河岸の方へ出やうと思ふと川嶋の潛りを開けまして露「左樣あら女「露友さん誠に今日ゝお構ひやせんで、イーエ跡へ御殘りで御迎ひが露「然うで御坐いますかと見返りあがら露

「左樣あら女」露友さん左樣あら露友さんと云ふ聲が耳に這入ると彼の四人ハ……ト目を付て提灯をつけて跡を尾いて來ましたが一人脊の高いこと六尺もあり肩巾の斯んあにある子分がハヲ〳〵と早足で前へ廻つて　男「チイ〳〵露友〳〵露「へイ　男「チイお前ハ露友と云ふ惡人だナ露「お見外ヤましたが何方樣で御坐いましたら　男「何方樣だつてお前ハ好い男だ惡人で居ながら立派あ妾を持てるノ露「エヽ男「チイ都一濱と云ふのハお前の妾で大層あ人間だ近頃評判が好いから增長して居やアがらア露「ソレハ人の噂で御坐いませう私ハ其んあことハ存じません困りますナ　男「何が困るのダエ箆棒めエ手前ハ惡人の癖に癪よ障らア此間抜めと言ひながら突然手を出して露友の胸倉を取たときにハ息が止るやうで通常の者あら驚いて其儘キャッと泣出すか倒れるので御坐いますが其處ハ元が百石取りの森庄五郎露「ナニヲ成ると、言あがら逆よ取て捻り倒すと大きお奴がコロリ轉がります、すると跡あら來る奴が男「此野郎と打よ掛る　露「ナニヲト身を避けて相胸倉あつたあら片足上げて罪あがらヅドント一人を投る又後の二人が重あつて來る所をポン〳〵と蹴たが一人の奴ハ罪玉を蹴たから氣が遠くあつてドンと臀もちをつく、すると上總屋文藏が腹を立つて歸つて來る後から親分〳〵と止めあがら芝居者が附いて來る所へ荻江露友と子分が喧嘩をして二人ハかり投られた飛デモ無い事だと云つて參りましたから上總屋文藏ハ兼て酒癖の惡い所へソレと聞いたから子分の仇きと云ひながらスラリート二尺許の小長いのを引拔まして切て掛る子分も三人許りで打てかゝるから露友ハ如何に手者でも刃物ハあし縱令へ寐て働らいても終にハ切られると云ふ危うい所へ川嶋に來て居た河野六郎の娘野川が飛出し直ぶ拔刀の中へ割つて這入ると云ふ御殿女中と喧嘩のお話しに相あります

第九席

荻江露友ハ上總屋文藏の子分四人と喧嘩よ相成まして多勢に無勢多人數の時ハ寐て働くと云ふ木刀流の腕前或ハ取て投げ又足を持て受留ますと云ふ四人を相手よ働いて居ります處へ上總屋文藏通り掛つて我が子分が露友に投られたと云ひ憾の遺恨で小長いのを引拔て切掛け樣とする子分共長ものを引拔て切うとする露友ハ覺悟致して居ります、喧嘩〳〵と云ふ三月の十四日朧月夜多勢の人が出て來まするが何分よも白刃が怖くて誰も中へ這入人があい此の事を聞て驚いて飛出しまーたのが川嶋に居られました中老役の野川と申て阿部樣の御異見番を勤めた女中年齡ハ二十二で極標緻の好い殊よ發明の者で御坐います其衣裝ハ藤色の柳櫻の流模樣金純子の帶をしめて箱せこを帶の間よ挾んで居ります其綺羅〳〵致します美麗い姿で飛込ましてハ小川金太郎が今露友よ切掛樣とすると女の姿で金太郎ハ驚いて跡へ下ると又た一人進で切掛る是も腕を取て逆よとり、ニイと投る假令力のあい者でも柔術の手ハ術で御坐いますから自由自在にあります物ので、上總屋文藏い酔て居りますから眼に入らず唯露友を目がけて一途に切掛來る腕を把て野川「文藏、暫らく待て文藏。部屋のおあやと云ふ女中が出まして　女「チヤ文藏……中老野川樣だヨ麁相あつていけ成りませんヨ上總屋文藏文「へイ、と見ると美麗姿で喫驚して文「皆扣へ、と言ふから子分衆も驚きまして跡へ下る　野川「怪からん事で夜分といやあがら白刃を振て此の賑かお往來を騒すと云ふい宜敷あい事でヤ聞ける事もあるから川嶋の二階まで參れ文「へイ、と元締あれども一言も口ハ利ません身体がすくんで文「へイ恐入ました　野川「皆其方の子分の者か皆是へ連て參る樣、

露友様にお怪我いかいか直に是へお連れ申様、と細聲で申ます、川嶋の若衆が出て來て　若「まア〳〵此方等へと云ふ、頭髪もこわれて居る着物も泥だらけにおつて居る露友を連れて來る、何故か知ぬが文藏い酒の醉も醒て少し面目ないからすくんで居り升　野川「文藏手前御酒を飲ると御酒の上が惡く大分よ市中で亂暴を致すと屋敷の御用をも聞ぬて居るし左樣あることを度々致していそ方商賣柄にも障らうと存じます御屋敷の御用をも達す身の上其方の身分にも係ります別して今晩のことい怪からん事で文「へイ何うも誠よ何うも面目次第も御坐いません　野川「殊よ何故か知らぬけれども相手い弱い藝人と聲へにもやす、何の遺恨おつて露友樣に左樣お御不禮お事を致す殊よい一人よ多勢寄てたかつて刃物を持て掟でも附たら何う致します　文「へイ私共の子分どもが喧嘩を致して居ります處へ通り掛り露友が私の家の者を取て投まして打擲致しますと、見れバ何も耐へかねて捨置難いと存じまして中へ這入ましたので子分の者よ怪我でも御坐いまし時い御用の差閊よも相成ますと存まして夫故手前も捨置れず中へ這入まして　野川「何の樣お事がおるか知らぬが口で言て分らぬ事もあるまい御中老の野川い詞を銳どく致しまして「殊に荻江露友樣い上も御存知である妾の爲めよやない大切お旦那樣此後い何うか藝人よなつて被入からお前方も目を掛て力におつてわげて呉んでい困ります　文「へイ貴女樣の　野川「ハイ上も御存知で斯う云ふ藝人よお成遊バしたも深い事い申されおいが皆妾故からの事で餘儀おい譯でお屋敷をお出遊バして久敷お目もじを仕おかつたが今日い上からのお許で實い芝居見物に參つて久々で御目通りをして歸り掛け大勢の聲よ驚き何事かと心得て出ましたゞ文藏とい少しも知らおかつた何うこの何の樣お事があるか知らぬゞ是迄の事い水に流して此後い露友樣よお前方力

になつてお上ヤしてお呉れ何分妾からお前よ賴む向後い必らずともこれを還恨に思ひ寄て集つていぢめたり喧嘩を仕掛る樣お事がおれバ却つて恐入りました〳〵　野「此方樣い兼てお前も知ても居やうが津輕越中守樣の御家來樣であるし又お前い斯う云ふ所へ徘徊る事も存ドて居る今日の事い何うぞ何の樣お事があらうとも妾お面じて氷に流して跡々いお世話を致す樣よ何分賴み升今日の御無禮い上總屋お前が先へ立てお詫をおさい　文「へイ誠よ何うも左樣とい存じませんで飛だ事を致しました何分御立腹も御坐いませどもが少々食醉て居りまして何も辨まへませんで何うぞ恐入ります、と先づ其場い羞くしく夫が御勘辨を願ひます……皆お詫をヤせ子分「へイ何うも成りに事濟まして野川い屋敷へ歸り文藏い築地へ歸りました、おれども此後露友い芝居へ出まするも喧嘩を仕掛けられる事が度々で殊よい上に立つ富士田吉次が嫉妬ねみが有て藝人交際が出來ませんで、ア、此處許り日が照いすまい何處へでも行うと思つて居る此頃ろ吉原の玉屋山三郎が頻りに荻江節が好で自分も唄ひます或る日山三郎い露友に向ひまして　山「何うか露友さん此方等へ來てお出おさいお藝者よも些とい移したいから至つて八柄で飛だ宜いから何うか貴方の工風でお座敷の狹い處で唄ひます樣よ敎へて遣て下さい　露「尤も然うで大きお聲で唄ふ許りでもおいから私も考へて四疊半位ゐで陰で聽ても騷敷おい樣に唄ひ度と思つて、飛だ面白い、遊ぶ行ませう、と言て芝居を退て吉原へ稽古よ行き後おい吉原揚屋町へ退まして剃髮して名を台春と改へますると云ふい後のお話しで御坐います偖てお話い二つに淚れまして彼の荻江露友を毒殺致さうと巧みました漏永忠之丞、毒藥を調合せましたが今日い猶更

で御坐い升が其頃とてもお醫師方が毒を調合抔のことい中々法が御坐いまして容易に毒殺れ出來ぬ事ださうで假令君父の命たりとも毒藥調合の事い仕らぬと云ふ証文をお醫師よ弟子入の時取られるので中々毒藥を調合ことい出來ぬが市ヶ谷淨瑠璃坂の入江玄龍と云ふ醫師が南蠻舶來の硝石を調合ました事で其頃百兩と云ふ禮を受け是が縁にあつて口止旁々玄龍の總領娘お清と云ふと標致望みで兩永が嫁よ貰ひましたが千石も領るものゞ端たない醫師の娘を貰ふ譯でいゞ入江玄龍い紀州大納言樣の家來よ入江惣右衛門と云て百石を取た人で一体放蕩無頼な人で御坐いますから娘よ養子をして若い時分から他處へ許り出て居りまして遂よ醫師よあり升して市ヶ谷淨瑠璃坂よ玄關を構へ町醫で御坐いますがお清と云ふい頗る美人で御坐いますが嫁して七ケ年も經まするから最う四歳にある子供もあります玄龍にい似ぬ心掛けの能い娘で本所南割下水の山室半左衛門と申す御進物番を勤めた御旗本へ緣付ました一体先代の山室半左衛門死去の後御子息の半助と云ふ人が家督で御坐いましたが此方い何う云ふ譯か身体が惡く俗に申す中氣で、御酒い好だと見えます、思ふ樣よ步行ず蠶の縁あいから順養子と云ふので二男の半次郎を以て相續蹴躓づいて座敷で轉びあぞして家督ゲ覺束ない樣よ成りました、其嫁い即ち入江玄龍人と致す了見で早く嫁を貰てと云ふので部屋住の中よ嫁を貰ひました譯で其嫁い即ち入江玄龍の娘お谷實歷十年二月に緣付き間もなく懷姙致ーました翌年の正月元日に出生致しましたい男の子で此の名を東壽郎、ひがしのことぶきと云ふ名を附ました何う云ふ譯で御坐いますか元日よ生れた祝辭で御坐いますか元旦に生て運の宜さゝうな事で御坐います家內中喜びまして御坐います扨山室半次郎い前よも申上まーた通り美男で肌の細い鼻筋の通つた口元の締た眼ルいゲ

りッとした黒目勝の眉い濃く若い時分から薄く靑髯の生へて居りまして其頃の御旗本樣の御髮い大概自分で結たもので御坐います大髻でい御坐いません少しそらした樣お風で表へ出ます時近邊の娘や後家さんい出て見ます位ね美男で見た處い如何にも美麗ゲ腹の中い宜くないので子が出來ても子抔い何とも思ひません山室半次郎い出步いて許り居りまーて頓とお屋敷よ居ることい稀れで御坐い升が子を思ふ親心で母親樣いお兄樣が例の通り中氣である半次郎許りを樂みに致して何の樣なことがあつても遠慮ーてお小言をも被仰らないから尙更往けません正月廿一日に廿日正月も濟でお屋敷にい左のみ用ゲないから半次郎獨り市ヶ谷淨瑠璃坂入江玄龍の所へ來て　半「頼む〳〵」男「ドチラー……能く被入やいました、お上り遊ばせ　半「御親父樣い家かね男「へイ在宅で……先生エー何がお出で御坐いますか本所の殿樣が被入やいました　ヂヤ然う……是い能うこれへお通り下さい誠に能く、お一人方で、夫れい何も大さよ何うも暖氣ありまーてまア大きに、餘寒の處も此程い凌ぎ宜うありました一寸と伺ひ度心得ますゲ御覽の通り醫師い人に遣いれる身の上、寸暇を得ませんで存じあがら意外よ御無沙汰よ相成り、先頃年頭に罷出ました時よ隱居樣ゲお逃めで多分よ頂戴して失禮しました彼樣に醉つた事い御坐いません快よく頂戴いたしました今日い御年頭の殘りでも御坐いまして　半「イヤ靑山邊まで用ゲあつて一寸參ぬらんでいゝらん事がわつて夫れに父親父樣少しお願ひがあるゲヂ一寸診て下さらんか少し產後が惡い樣で玄「左樣で若樣が　半「左樣屢々伺ひ度心得まして若樣れお守でもし度と思ひますが何うも間が御坐いませんで、何う云ふ譯で奥方が　半「ナニ大した事もない樣ですが產後であるから日立んかして万一乳でも止ると惡いから心配しますが貴方往つて診察

遣つて下さらんか家へ參る醫師もあるが却つて親父樣の方が其處ゝ間柄で遠慮あしで宜いから猶りも速からうと思ひますから玄「夫ゝ何も、取敢ず出ませう夫迄お思し召して下さるゝ誠に恐れ入ります、有難いことで、直お出ませう貴方ゝ是れから青山へ半「青山へ參るのだが誠よ何ふも足が疲れた樣で少し足休めを致したいが二階で少ー休ますヨ玄「宜敷御坐います……滝や二階へチお布團を、寐ある樣あら更紗の少し幅の狹い方をあれを上て枕紙を取替てたき「ヘイ玄「貴方一口召上つてゝ半「ィヤお摶ひあさるナ玄「成程他で御馳走が出まして宜しくあゝ御飯あれゞ宅よゝ碌あものゝあいが召上りますあれゞ取寄せます半「イヤ摶ゝず早くお出下さるやう玄「ヘイ取敢ず出ませう半「親父遠慮して早く歸ると隱居が心配いたしますから酒でも出ましたらお厭でも隱居を對手に緩くり召上つて玄「イエ何うも隱居さまゝ澤山召上りませんが御相手よあり終々長居をしますでマア取敢ず出ませう……伊助ヤ藥籠を伊「ヘイ、と下男に藥籠を持せて本所へ參る道程ゝ兩國橋を渡つて三ツ目から津輕侯の前の處まで來ると横町から出ましたのゝ福永忠之丞、上下よ大小紺足袋よ雪駄穿き若徒を連れて參ります入江玄龍ゝ福永忠之丞と行逢ひましたが立派ナ武士もあ直に目に着きます玄「何も是ゝ何も誠よお久敷忠「チヤ何處へ玄「イエ一寸此邊迄、存じおがら御無沙汰致ーました今日ゝあんで、兼て一寸ヤ上ました妹のお民を何へ緣付けまーた此二ツか三ツ許り先の横町で山室半左衛門とヤお旗本へ緣付ましたお年齡ゝ何でゞす何も年若でありますが順家督よありますので山室半次郎とヤます慥か宅で一寸お逢ひありましたゞ八幡の祭りに貴方がお出あすつた時山室半次郎も參つて居りまして只今迄ゝ屆もしません部屋住でしたゞ兄か病氣で家督にありますので昨年の二月娘を緣付まして子供ゞ

出來まして、ナニ、〜イ正月元日に生れて産後少し悪いのでナニ大した事い御坐いませんが夫婦の情合で直參の身の上でも自身お山室が出掛けて參り何うも抱へへの醫者もあるが親子だからお前の方が遠慮がおいうら直ヨ行て呉れと言ふから取敢へず出ましたので忠夫い何も染々お目よもかゝらんが宜敷玄「愈々家督が極れバ表向から賑めを致しますが其時い是非お招きヤさおけれバ成ませんとヤて居ります忠「直ヨお出かへ玄「ハイ直に參ります忠「何か些と玄「ヘイ何れ伺ひます……お供様御苦勞様、左様おら御機嫌宜う。是から分れまして山室半左衛門の家ヨ參りまして娘を縁付てある舅でありますけれども向ふい天下の直參の勢ひ此方等い町人ゆえ玄關から頭をさげて下て玄「頼む〳〵男「ドウーレ……お上りあさい玄「ユー殿様お出で慥て取敢へず「御尤居様御氣嫌宜「左様で、此方等へ男「お前様市ケ谷の先生がお出で母「チヤ此方等へ男「ハイ直に出まして何も遂々御馳走ヨあり長居を致しました其後一すお礼に伺ひ度心得ましてもう一ー過日い出まして何も角取紛れ御無沙汰にありました母「何も困り升何うも云ふもの、能く被入ました先達ていお鹿相致しました春にあります上草までい遥かけ〳〵客來で夫た、故貴方が被入ても思ふやうヨ御構ひも致しませんで玄「何致まして長居ヨ致しましてユー殿様い如何で母「何も困り升何うも云ふものゝで御坐います誠に危險て往ませんしたので御坐います誠に危險て往ません當人い悪い氣でい御坐いませんが厥抔へピヨコ〳〵出まして飛石抔ヨ蹴躓づきましたり人様が被入ても挨拶に出まして尚厭しと云ても矢張出ましてヂ舌も廻らぬ癖ヨ同じ様ヨ素の通り挨拶致します、氣象い勝つて居りますが何分身体が利ませんし舌が廻らんので誠に心配で御坐いまして、何も長いと醫師もヤますので玄「お困りでせうナ

御酒がお好で、成程毎々御坐いますヨ充分御手當い御届でせうが何も長う御坐いますよハイ母「今日い生憎半次郎が他出致しましたが玄「ハイお出で御坐いました母「チヤ貴方へ玄「ヘイ青山の方へ何か御用の事ゞ有て被入まして次手にお立寄で奥方が産後で加減が悪いから、馴染の醫師も有るがお前の方が遠慮が無いから行つて診察と被仰るので直に藥籠を持つて參りました入江玄龍が半次郎の云附けで嫁の病氣を見舞ヨ來たと云ふので後室い不審に思ひましたが母「へイ……少しも悪い容子い御坐いません先刻まで何で御坐いますヨ小兒のお守をしたり何かして居て今朝も御膳いたんと喫た様で産後い至て壯健で玄「〜ヱ、……兎も角も母「マア伺ひませう母「何卒御見舞下さいまして、と玄龍産所へ參りますと布團の上に居りますが日立撲様も宜しく女中が側に付て居りまして玄「矢張産所で御坐いますか母「ヘイ左様玄「宜敷御免を蒙ります兄「父親様被入まし玄「ハイ先達ていお大きに心配して取敢ず出ました兄「ハイ誠に仕合と私も壯健、小兒も丈夫で玄「ハイ左様でゲスか坊い寐ねですかア目を明て居ります抱へませうアーもじ〳〵して口を尖がらして色々あ顔をします殿様の口元ヨ誠に能、似てね、ヌが何うも少し加減が悪い様あ拙梅かへ兄「イヽヱ誠ヨ壯健で、御案じ遊バすナ玄「左様かへ、兄「出で産後少し悪いが遠慮して居る容子だから行て呉れ出入の醫師もあるけれどもお前あら却て遠慮がおいからと云ふので兄「ハイ然様が貴方へ被入たので、然うで、ヱー斯うと今日い廿一日だから被入と思つて玄加減が悪いお我慢していい往ませんヨ兄「ハイ……アノお幣ヤお茶を入れてヂお菓子を持て然うして少し此

方等ゐ嘶し度ことがあるからお前用があれば手を拍つから此方等へ来おい様ゐ畏りました
民「其處をピッタリ締て……親父様此方等へ被入ませう　玄「ハイ脈を診ませう　民「イエ殿様ハ今日ハ乾度貴方の處へ被入らうと存じて居りました殿様ハアノ去年市ケ谷の八幡様のお祭りの時貴方の處へお出ゐ成ましたヨ　民「彼の時私も参る積りの處五月の帯で却つて人中へ出おい方が宜いと存じまして、予が行と御意遊バして殿様が御一人りで被入いました其時アノチ溜池のお姉様がお出で玄「左様ゝ　民「親父様ハ何も御存知ハ御坐いませんか　玄「何を　民「溜池へお縁付ゐありましたお姉様と家の殿様と疾から深い交情ゐあつて被入る事を貴方ハ御存知ハ御坐いませんか　玄「お清とうへ……其んな事ハ有りません……夫ハ能くおいつしむべきハ客気嫉妬をする夫を私が常々言ふのでエー慎まんけれバ成ません清ハお前子供も出來、縁付て七箇年も被ア遣つて何不足おく夫婦ゐおつて居るゐ其様疑念を起してハ往おいと　民「私の疑念許りでハ御坐いません、貴方も御存知で貴方のお二階でお姉様と家の殿様と御得心でお遊あそバすのでハ無いかと存じました位ゐで　玄「馬鹿ゐ事を其んなを、何んで私が承知して、左様ゐ馬鹿ナ事ハありません

第十席

此時お民ハ尚も膝を進めまして　民「夫れでも殿様のお紙入れの中ゐお姉様の彼のお薬人の香箱が這入て居ります彼れハ母親様の卒去ゐあるとき姉様ハ一つ、私ゐ一つ、姉様のハ模様ハ慥かに菊で私のハ萩で御坐います菊の模様のありますお香箱の蓋が家の殿様の紙入の中ゐ大切さうにお包で這入て居りますのハ不思議でハ御坐いませんか　玄「あれハ成程御人ゐ一ツづゝ遣たのだツけテ……夫ハ何デせうお祭りだから雑踏して詰らんものを召上つてお酒や御肴を上つて腹痛か何かで殿様ハ腹が痛いか醫師の家へ來てもゴタ〳〵して居るから……ア、此處ゐお薬があると云ふので丸藥か何か上たのだらう……誠ゐ結構ナお香箱で誠ゐ良いと世辞の宜い殿様だから被仰たのだスルト彼ア云気象だからア、宜敷けれバ差上ませうと繋る縁合の義理で差上たのゐ相違おい　民「蓋許り大事ゐ包で持て行ますか　玄「蓋許り、身ハ有りません　民「何處迄も然う正直ゐお思召で被入いますゴタ〳〵テ　民「何處迄も然う正直ゐお思召で被入いますゴタ〳〵テ　玄「身ハ何處かへお落し遊バして、祭りでだからお見せヤませんと思ひましたか、表向誰ゐも言ふ事ハ出來ませんお姉様のお耳ゐ這入ていおらず隠居様ハア、遣つて御本妻で被入ると存じまして私ハ種々心配致しましたがお姉様ゲお贈りあすつたお手紙を昨日お清し遊バしたを殿様ハ御存知がおいので、御即遊バせ　玄「ウーン清のら殿様へ贈つたのかエ成程……此程ハ久々お目もじ致ーヤさず只々其方様の空の「大さゐ聲をしてお讀み遊バさぬヨウ　玄「……清の手跡だ……ゑよき折から一筆しめしみ打眺め寒ゐ烏一羽さへ羨ましく朝夕暮れ居りまする……怪からん、是ハ何も怪からん言語同断……左りおがら現在妹の御連合様と存じおがら思ひ切られぬ此ゑの因果能々深き悪縁と思召永ゝ御見捨あさる様願上げまする……夫れゐ付き色々ゐ上度ことハ盡しも間明後廿一日ハうちうちの首尾宜ーくハ間市ケ谷の入江の宅へ参り御待ゐ上ハ暮ゞも御出の程願上げまする……ゐ上度事數々御坐いへども人目の關ゐ何事も惜しき筆とめまする……あら〳〵かしこ、清より御

元へ……何うも呆れた、何うも呆れた、是い何うも呆れた、半次郎殿参られて直お是れから行て呉れと、お前が病氣だから行て呉れと云ふので若し隱居が一杯出したら緩り飲で居て呉れ然うしおいと隱居の機嫌ゞ悪い抔と私お早く歸らぬ樣お言ひなので是れ何うも呆れたお前いこれを疾うから拵付いて知て居るのかへ玄龍いお清の手紙を見て驚きました驚きてお民「何時頃から拵付いたと問ひますので　民「ハイ存じて居りますがゞ、けれども他お逢ふ場所もお坐いませんー御身柄のある家の殿樣殊お福永樣い彼の通りの癇癪持の方で御坐いますから何處か外で逢引致します事かと案ずまーたが丸山お居りまする横須賀周作と申御家人が來くい隱樣とコソ〳〵話しをーて居りますから其家でお逢遊なしいかいかと實ゟ外へも知れないやう　姑樣ゟも知れおい樣四邊を氣ますので私い實お昨年邊りから心配致しました　玄龍　夫でもお前乳が上りませんでした子是を見ると大概お者い乳ゞ上りまするもの何うも不實千カ如何お清い悟むべきで、宜敷い心配しないで宜敷い私が談じて　民「貴方ゟ餘り貴方平素の御樣氣でガミ〳〵お怒り遊ばすと姉樣が悪いとい申ながら彼ア云ふ姉樣の氣象でハッと思つて淵川へでも身を沈める樣お、人樣のお家お゛も障る樣お事ゞ有てい成りまいせんから何卒何事も孫ゟ兒して從前通を願ひます　玄「孫だつて斯う云ふ最愛小兒もあるお殿樣もく〳〵でいないの可愛らしい子供のある お呆れたものだが何うか兩人お諦めの付く樣お、ア、お前ゞ無れゞ清い只い置う不埒お奴で　民「アノ伊助を連れてお出で　玄「ア、彼れい芝邊へ使ゟ遣つて私一人で兩人に餘外おがら意見しくと是から絲き歸りまして伊助と云ふ下男をゞ使お遣いー入江お龍一人で宅へと急ぎます此方等い斯う云ふ手紙を見られたとい知らずお清い着飾まして入江の宅へ來て　下男「頼む〳〵。お瀧と云ふ耳の

遠い婆アが 瀧「チャ誠ゐ何うも餘りお出が遅いから心配ーましたお二階ゐ山室様が先刻からお待兼で 清「静ゐおしョ何んだヂお前耳が遠いかいョ 瀧「氣ゲ付きませんで、お待ヤて居るので一遂ゐヤて……先刻からお待兼でお一人で御体屈と思つて何も御坐いませんが近處で少し許り取て只今たんとん召上りませんが只今御酒をお初めで 清「彌助彌「へイ 清「お前ア ノ 歸んナ……ア ノ私ん遅くなるから詰り掛ゐ剩の紅屋婦馬で薄皮とヤのん 清「坊の食る今坂だョ 彌「へイ成程 清で薄皮を百疋許り取つて行ナ 彌「ナンデげす薄皮と ヤのん 清「少し歸りが遅いのも知れんがお素じゐ成らん様ゐ、旦那様がお歸りゐ成たらテア ノ八幡様へ參詣あがら入江へ參たら入江が病臥居りますから枕邊で看病致しますから少々遅くおりますが若し遅くおりますれん盥籠で參りますからと ヤのん下男ん歸りがけよ紅屋婦馬で薄皮を買て歸ります此方等ん福永忠之丞が歸りまして出合頭よ忠「彌助何處へ參つた彌助ん何よも知らんから正直にヤーします 彌「御新造様ヤ市ケ谷の八幡様へ參詣に、其うして入江様へお寄で忠「左様か 彌「少ー〳〵お歸ん遅いさうで玄龍様ゲ少々加減が悪いので病臥被入のので枕邊でお氣を慰ゐるから案じおい様よと宜しくヤ聞られました歸りよ紅屋靜馬で薄皮を買て今坂の事ださうで忠「是々誰が不快で居ると 彌「入江玄龍様が不快で、御親父様のお氣を慰めて行からと被仰て忠「玄龍様が不快で、誰か外に參つて居る者ゲ在るか 彌「左様で、何だか婆アが出て能く被入ました山室様が先程からお待兼と忠「ウーン左様かッウーンあのナ赤坂邊まで用事ゲあつて朋友の處へ寄おけれんあらんが歸りに些と買物もあるから身が一人で參て宜いから手前ん部屋へ歸つて休足致せ 彌「左様ゲ左様ゐから

御機嫌宜敷。と下男ん部屋へ歸る忠之丞ん訝ーいと拗付たのん玄龍に逢ました事で、變だナと思ひ素より嫉妬深い福永忠之丞で癇癖持で有ますから取急いで市ケ谷淨瑠璃坂へ掛るとトップリ日が暮れる向ふん水野様のお屋敷處々にお寺がありまして御家人衆の居る淋しい處で玄龍の宅ん門を這入まして玄關ん與深う御坐います 忠「頼もふ誰か居ないか 瀧「ハイ被入いと、お瀧が出ましたが福永を見て驚きましたの何の、入れまいと思てピッタリ玄關の敷臺へ坐りまして 瀧「ウ……被入ました 清が來て居るだらう私の家内が參つて居るだらう 瀧「イ……イーエ何方様もへお參りして來るが歩行悪いから輕い下駄かていい往かん居るに相違ないー。其お事を言いおけれバ宜よ、忠之丞ん ッカつかまる處を癇癖が强いのら 忠「邪魔致ナ。と一刀あびせました慨然あのいお瀧婆アで百疋しか頂戴ーないので、安い命ゲあるもので、御新造と云ふ聲で福永が來たとは思ず入江玄龍が歸つたと思ひ山室半次郎ん慌て大小を抱て雪隠の屋根から揚込の中へ飛込むお清ん瞞着うと思つて帶を締直して梯子段を五六段下りると思ひ掛おく福永あのでハッと思ふ處を福永ん裙ご取てズーと引ますとトッ〳〵と引摺落されん機會に入江玄龍が立顯ると福永忠之丞ん お清を引摺落して高い梯子の段から落しまして何處を打ましたか高い處から落ちまーて打處ゲ悪いと見ゐて其儘清「ウーン。隣があいから宜敷が壁一重の隣あーバ何の位ね驚ーますー知れません、處へ入江玄龍玄「今只ト、見ると此体ゆゑ玄「御尤で、御立腹ん御尤ですが暫くお待あすつて、此事が世間

へ流布致しますと貴公様の家名を汚し世間の物笑ひよあります暫く御待ち下さい御立腹ハ重々御尤で、今日承りまして手前も實よ驚きました位ねで、何卒暫く御待下すつて。忠之孫ハ腹立ちで坐ろう方角もあく扱身を携たあり様で立て居りましたブル〳〵慄へて總身土氣色よあつて居る玄「暫く御待下さい他の者が參ると悪い門を締て緩くりお噺を致しますから暫くお待下すつて御立腹ハ重々御尤で忠「玄龍お前ハ私ガ女房と山室半次郎とに二階を貸して逢引を、親ガ得心で應轉をさせますか玄「何う致しまして左様ナ事ハ得心處でない忠「ないと言てお前の二階よ現在半次郎と逢引をして居た、私が參つたら下婢がお通あさいと、何うも怪からん譯でハないか武士道が立ぬから此儘よハ捨置れん半次郎を是へお出しあさい兩人並べて打斬からこれへお出しあさい玄「お靜かよあさいナ騒ぐ事ハありません御尤の次第で手前もよもやと存じまして、心得ませんからチ今日半次郎が參つて產後が悪いから見舞つて呉れと言から取敢ず出ましたので、欺されたので、手前得心で逢引させるあれバ先刻貴公様よお目に掛り宅に半次郎が參つてこれ〳〵と云ふ噺と聽て何うも憎い奴で取敢ず家來を他へ使ふ遣て一人で飛で參つたので、親を欺き親の家の二階で逢引をするとハ人非人で言語同斷呆れまーた、山室へ參つて妹娘に實はこれ〳〵と云ふ噺と聽て何うも憎い奴で取敢ず家來を他へ使ふ遣て一人で飛で參つたので、親を欺き親の家の二階で逢引をするとハ人非人で言語同斷あれども斯事を表向よあされバ貴公様も千石の名跡に疵が附き山室半次郎の家も絶ます左様ハ御坐いませんか、何うぞ當年十九歳年に似氣ない產後乳も上らず姑の前を憚し終せて父上様何う致さうと言出した娘ガ如何よも憫然で、何か事を穩よ致さうと存じて一人で歸つて來て、貴方がお出とハ氣が附かかつた、斷付れた天命で御坐います、斯様ある立派ナ旦那様がありて

殊よ四歳にもある子供を設けた交情でハ愕ましたが總身ハ冷凍て居ります、素より醫師でありますから直よ脈を把ると脈ハ絶へ齒を喰しめて上瞼をして空虚を摑んで居る玄「罰當りめ……貴方の處へ緣付れバ貴方の女房だが相果ました、貴方當身でもあすつたか氣絶致したのが只今脈を取て呼吸を測るに中々助り様ハ御坐いません相果たよ相違御坐いません殊よ手前方の下婢よ貴方御手打よあすつて忠「取縋つて邪魔よあるから斬拂ひまーた玄「フウン何も下婢位ねを斬んでも宜敷でハ御坐らんゥ忠「斬んでも宜いと言ても私が二階へ上ろうとするよ裾へ縋ゥ邪魔だから斬た……さア半次郎をこれへ出せ出さぬよ於ていお前が得心の上逢引をさせたとしか思ひません出さぬよ於ていこれ限よハ捨置れん山室の宅へ踏込玄關から奥へ推參致して彼の半次郎を打切て仕舞んけれバ手前武士道ガ立ぬから夫丈ハしあけれバあらん山室の家ハ立ぬのハ當然の事だ玄「ヲヤ事を穩便よハ出來ぬか御勘辨ありませんゥの忠「罷り成ぬ刀の手前捨置れん玄龍ハグット落付拂ひまーて玄「左様あれバ宜敷い表向にあさい清ハ相果ました死人よ口なし半次郎ハ逃ましたのら覺あいと云へバ夫迄よありますま貴方ハ千石領るお身の上輕いづみよ山室の玄關のゥ踏込み半次郎と應對して何故と謂ても別よ貴方が取押へる證がない兩人寐て居る處を見た譯でもない清が死んで居るからお身柄よ障りませう忠「障らうと障るまいと四歳にある子供もあり是へ參つて逢引をするとハ玄「夫じ靜かよ大聲を、出してハ往んで手前にお免じ下さい宜さ樣よ取計ひませう忠「イヤ罷成ぬ玄「夫じやア致方ゲない夫あれバ表向よあさいた處が手前ハ多寡が町醫の事で、入江玄龍の家ハ潰れもしない又手前一命に障るとも、當年五十五歳年に不足ハない、貴方ハ千石の家ゲ絶

る丈の事で忠「何で私の家が絶ね升玄「静におさい十……貴方の清を差上る時の縁合をお忘れかチエ貴方屬根御懇望の津輕藩河野六郎の娘おうのを達てと云ふ森といふ言號があるから予の方へ靡て來ない毒藥調合いたせと被仰る故毒藥を調合いたし多分のお禮も受ず夫れを試しよ池邊小藤太よ呑せ森が助つたが池邊い貴方が毒殺した樣あもので、左樣でい御坐らんか手前も存じて居る菅野紋次郎を助てい置かれん欺して引張出して殺して呉れとのお頼で七ケ年跡に紀州の屋敷へ連れて行と欺き櫛田原まで誘引出して、青山の權田原で五月雨の夜に菅野を殺したも尊公樣のお頼みで致し、然う云ふ惡事を互ひに隱し合ふが爲め箇樣よ懇意にかつて大祿の御方へ諂奠ともあり、左樣でい御坐らんか手前い町醫でありますが斯う云ふ御緣合よなつたので夫だらお腹が立あら立やうよ玄龍斯うせ彼ァせと被仰て相談合手にあらうじやァ御坐いませんか腹が立と云つても若い身空でもあるまいに下婢を殺して、お清も貴方が殺したので其上山室へ行て何あさる、お任せがあい時い手前が表向にする私い町醫で家があくつても惜くもない年も惜い命でもあいが私が命を捨るからい貴方樣も千石の家を打潰す町醫の家と千石の家とお引替でい合ますまいと思ふから言ふので、何うしても表向にあさるか忠「誠よ何うも手前の子までである間柄でありあがら密夫を拵らへて親の宅で逢引するい尊公が得心よ心得て痛癖で輕機みあ事をして誠よ濟んで何うか内分に取計ひ呉んか玄「夫い當然の事で、内ぶんに致しますから二百金頂戴忠「ナニ二百金與ろと忠之丞い二百金と聞いて驚ろきましたが玄龍は一向平氣あ顏で玄「左樣で夫で貴方をお歸しヤして宅へ賊が這入りましたと言つて抽斗を開散かして强盜が這入つて下婢を一人殺したとして恰ど留守中參り合して福永へ緣付た娘が何したか此の

通り打殺したり忠が絶へて居ります被盜たものい是々と拵へものにすれバ宜い貴方の家に疵も附かあいで檢死沙汰にする二百金い惜しいッて私も娘を殺され些とい美味酒の一杯も飲あけバあらん二百金でい廉いもの千石よ替へるのだから忠「清よい箇樣ある事をされ其上で二百金よこせと然う云ふ無理あ事いあり玄「無理あ事いありません腹を立つあれバ宜敷い暇立あれバ偶刺へて死ます些とい劍術も知つて居ふ貴方い若いが私しも昔し取つた杵柄眞逆無慚よ切られいせんからヲ忠「只今持合せがあいと五十金許りあるが是れをお前に上るが跡金い少々待つても宜ろう玄「宜敷い跡文い夫れで宜敷いが証書をお渡し下さいお屆けがあいと御玄關から行ますヨ忠「其あ詰らぬ事を言つて夫いお互ひに斯う遣つて聲高の間抔だけれども構が斯うあつては緣いありませぬサッ〳〵とお出し下さい長く彼入やると下男が來るから出してサッ〳〵とお歸り下さい忠「只今歸りますと、宜面の皮で女房お い密通されるのみあらず檢死沙汰と云ふのを先づ五十金取られ早々歸れと言ふから悄然として福永い歸りまして市ケ谷御門へ掛りますると此方等ハ植込みの中へ飛下りて匿れて居た半次郎コソ〳〵と出まして障子一重の緣側まで這上り手を突て耳を欹つて聽くと段々九年跡に毒殺しまた七年跡よも人を殺した兩人の計畧事を聽き半「不屆至極あ奴い福永自己が惡事をしあがら私が是程あ想ふお清を引掛り落して殺すといふ憎い奴、此上い最うお清の仇突然よ行つて後から切つて遣らう。此んあ間違つた事しあいものだで裏ら廻り見え隱れに跡をつける福永い心持ちが惡いから何處かで一杯飲うと四ッ谷見附の方へと彼の人見の松と云ふ人見樣のお屋敷の土手へついて腕を組で忠「許らんと、考へあがら行くのを半次郎見え隱れよ頭巾目深で來ましたが後のらソウーと扱掛け樣とすると其邊い何うも

油斷致しませんが何か足音がすると思ひ振返る途端に、半次郎ハ扱ましたが福永忠之丞ハ方ハ
り柔術ハ上手ですから直ぐ片足揚てトンと蹴ますると半次郎ハ土手からお壕の中へ落ちた天罰
と云ふものハ仕方のないもので忠「浪藉者と言つた切り、半次郎ハ上らうと思ふに泥ガ深くて足
ダ抜ない漸やくの事で土手へ這上りまして直ぐ屋敷へ歸らうとハ思つたが夫れでハ事が露見す
ると考がへ丸山の横須賀周作の處へ行き半「醉た紛れよ粗忽したから洗つて呉れと云ふ、此方等
ハ多分の手當を貰ひ急いで洗ひ女丸洗ひと云ふものハ急に乾きませんからまア一晩お泊り遊
バせ、と云ふので其の夜ハ一泊致しまつた翌日よりましたが思ふ樣よ干ませんで漸く夕景よ
干まして衣類ハ餘くちやだらけで浮雛りつと夕景に歸つて來ると宅ハ肅然として居ります半
「今歸つたよ、平生ハ今歸つたと言ふと玄關の敷臺へ誰か出ますするが今日ハ誰も出ません半「彌
助今歸つたヨ私が歸つたよ誰れも出迎ひに出んかい、と言ふとツカ〳〵と靈所から出ましたの
ハ彌助と云ふ田舍者で律義もの彌「お歸り遊バせ半「ナゼ出迎ひよ出ない彌「此方等へお出なさ
い半「ナニヲ彌「此方へお出なさいヨ半「不禮なことを、不潔つて坐れいしない彌「此の小座敷が
不潔か貴方の心が不潔かどつちかへ半「貴樣ハ小童うちから奉公ーて居るから我儘を言てあり
ませんヲ彌「不禮よも不禮でねエにも何うもお前樣ハ私魂消て口が利ねエ何と大面さげて此
處へ歸られる譯かハ貴方ハ勘當よおつて居だ半「何でこれが勘當彌「母親樣が急に届けて勘當だ
仕樣がねエ、心得違へで、入江玄龍樣が今朝飛で來たハヨ半「エー玄龍が來た彌「奥樣のお姉樣
に當る福永へ緣付たお清と云ふヲ、己立聞したが驚きました悪い事をして親父樣の二階で逢引
するて何うも貴方二階から飛下りて逃てふ清さんハ打處が悪くつておツ死で、何事も内分にて
葬式を出さおけれバおらんエー表向よすれバ此處ヲ家ハ改易ある事だて内分の詞ひよするか
ら金を二百兩よこせてエので此家にハ替られねエ彼の畜生半次郎夫で歸らぬから直に離緣する
か表向にするか何うかと云ふのだ魂消て何うの内分よ願ますと云ふので金二百兩急よ取られて
奥樣ア駕籠よ乘せて連れて行き男の子ハ男よ附き女の子ハ女よ附くのハ當然だし人非人の子だ
のら置て行くと言たので終に奥樣が親父樣の袖へ縋つて尤もだが何うか生れて間がねエから私
が抱て居てエから來年の春迄ハ此の子丈けハ私が乳を吸ハしてエーから勘忍して下せエ乳が離
れバ又此處ヲ家へ歸しますが何うか親父樣堪忍して下さんシミと言たから玄龍樣も可愛相と
思つて娘の情に引されて成長されバ返すのだと言て連れて歸つたから捨置れヲエーと直よ親母
樣が届けエして勘當にあつたのだ勘當ふあつて來たもの誰が出迎エに出るものか何うして其ん
ナ腹になつたヲ何うもエー半「勘當届をしたのか彌「届けエしたヨ駄目だヨ何方行く前町の酒屋
だの料理ィする美濃屋抔へ行ていけませんヨ御隱見とももねエお前樣檜須賀の處へ行くが宜く
ねエ彼の野郎家ィ來て何でも饒舌して彼んなお奴ハ無エ御隱居樣ア彼奴ハ大嫌エだ家の二男を誘
出してお白言つて、來ると突然奥へ行く奴ハ無エ男が歸つた容子だが一寸、逢ふ奴でいないが
出ナセエヨ私何も申ませんお出あせエ。最う我が折れて悄然て半次郎浮雛〳〵奥の母の居りま
す隱宅の方へ參ります母「どの顏下て玄關からヲカ〳〵歸つて來ましたヲ半面目次第も御坐い
ません母「呆れて申樣も御坐いませんハイ苗跡を汚し御先祖樣へ濟みませんからヲ言ませんハイ
早々倉橋を頼みましてお頭へ届け久離切て勘當、最う物も言れませんサッ〳〵と出てお出

でおさい親の罰でも碌な事いありません如何よ放蕩でも物よい程ゲありますし幼少い時から其んお心でもおかったが、本當に女の様だと人よも言れたがあんな繊嫋よく生れ付たが疵とい言あゲら身の害ゐおつて斯云ふ事をして義理人情い無が奥方よい氣の毒で身を裂る様で子が可愛いとい思ひませんか痴男者めサッ〳〵とお出あさい半「一言も御坐いません、と壁へ額を摺附けて居りますと襖を開けて這入つて參つたのい兄の半助　母「浮雲う御坐いますヨ餘り立腹して病よ障ると往けませんから何事も最う勘當すれゞ兄弟いあい昔しとお諦らめあさい　半助「半次何うも其方ね怪……けしからん天下の直參に生れて義理ある姉と……み密通致し言語ド……同斷御先組の家名を汚すとい實に何うもア……呆れ切つて仕舞つた私ゲ病氣でなけれゞ手打よ致す奴、病氣故何事も言ぬが手前が居てい汚れるデ……出て行けサ……サッ〳〵と出て行けイ……行かんかコ……心得違ひをして置いて面目あいで濟かサ……サッ〳〵と出て行んか　母「早くお出半重々の不埒で少し譯も御坐いません直ぐに出ます　半助「出……て行かんと突きゲ……由すぞ。流石い面目あいと見え出掛け升と彌「隱居樣い泣ながら、行たつて行處もあるめエ何處ゟ遠い處へ身を匿せ又た家へ歸參時節もあらうと所で金を廿兩下すつたゲ親てエものい有ゲてエものだ親子の情で御坐いますヨ貴方親父樣の差一た脇差だつてこれい紀念の爲めよ永正定助汝が心の錆たのを絕へず磨いて立派ゟ家へ歸參れと云ふこれが汝よ紀念だからこれ丈いこれ無あす樣あ魂ひあれゞ最う駄目だ武士の魂ひい錆返つたのだ魂ひを磨く爲めに惜いと思つて親子の情だ隱居樣が内所でこれを下すつたこれを無すと濟ませんヨ、ヨウー　半「有難い　彌「貴方ア私小遣をゟ前町の方へ買物に行きますから美濃屋か酒屋、彼處でも富田屋でもゑエから手紙でも來せゞ又た上げ升ヨ是から辛抱して改めて屋敷へお歸參あせエましヨ、ヨウー　半「有難い、と悄然として永正助定の一刀を小脇に掻込み母と彌助に貰つた金を懷中へ入れ止せゞ宜かつたが又々横須賀周作の處へ參りました尚更半次郎が放蕩にありますが一寸一息致しまして

第十一席

引續きまして、山室半次郎い勘當を受けまして別ゐ是ぞと申す知己もあく屋敷近い處にも居られませんから據ころあく横須賀周作と申ます丸山本妙寺長屋の御家人の處へ參りまして、天下の御家人と申まして他聞い宜う御坐いますが十五俵一人扶持と云ふので約針を内職よ致しますが鋼を鑢で擦りまして釣針を拵へ升うら竈の廻りい金粉だらけて上流しい御坐いませんで溝板いガタ〳〵致し家根いぶつこ抜けて居て雨が漏ります見る蔭もあい姿で、デモ御成の時い黒の羽織を着て大層手柄らしく威張つた者で御坐います　周「誰だへ其處を開くのい半「一寸……私だ一寸開て呉ること　「チャ被入やいまし何もまアお上りあさいまし……本所の殿樣が周「エー然うかさア是い何も半「昨夜いろ〳〵何うも周「イエ最う吶まアお氣味が惡かつたらうとお琴とも云ひ暮して居りましたこと　「思ふ樣よ落ちませんで幾ら擦つても泥が浸込で居て、あれへ撮み洗ひでありません丸洗ひですから乾きませんで無お氣味が惡かつたでせう、昨晩いまた有難う御坐いますあんお御心配をあさあいでも斯う遣つて御扶持樣よありますから殿樣の事をするのい當然として居ります何うも澤山も召上らあいですが矢張炎難で御坐いますヲ御身柄がありますから

ゑちごに親の讐でも有様にわり左衛門如何よ放蕩で有物よい程々ありますが幼少い時から其んな心でなかつたが、本當に女の様だと人よく言れたがおんな繊嫋よく生れ付たが疵といい言ふから身の害わおつて斯云ふ事をして義理人情無が奥方よい氣の毒で身を裂る様で子が可愛いとの思ひませんか痴男者めサッ〳〵とお出あさい半「一言も御坐いません、と壁へ額を摺附けて居りますと襖を開けて這入つて參つたのい兄の半助　母「浮雲う御坐いますヨ餘り立腹して病よ障ると往けませんから何事も最う勘當すれバ兄弟わおい昔しとお諦らめあさい　半助「半次何うも其方ね怪……けしからん天下の直參に生れて義理ある姉と……み密通致し言語ド……同斷御先祖の家名と汚すとい實に何うもア……呆れ切つて仕舞つた私が病氣でなければ手打よ致す奴、病氣故何事も言ぬが手前が居てい汚れるデ……出て行けサ……サッ〳〵と出て行けイ……行かのんかヨ……心得違ひをして置いて面目おいで濟かサ……サッ〳〵と出て行んか　母「早くお出半重々の不埒で中し譯も御坐いません直ぐに出ます半助　出……て行かんと突きダ……出すぞ。流石い面目おいと見え出掛け升と彌「隱居樣い淫がら、行たつて行處もあるめエ何處う遠い處へ身を置せ又た家へ歸參時節もあらうと内所で金を廿兩下すつたダ親てエものい有がてエものだ親子の情で御坐いますヨ貴方親父樣の差ーた脇差だつてこれい紀念の爲めよ永正定助汝が心の錆たのを絶へず磨いて立派よ家へ歸參れと云ふこれが汝よ紀念だからこれ丈いこれ無おす樣お魂ひおれバ最う駄目だ武士の魂ひを磨く爲めに僧いと思つて親子の情だ濟ませんヨいヨウー　半「有難い　彌「貴方チ私小遣を上げてエが此處に二分三朱と百六十ある〆てこれを持てお出おせエ　半「有難い　彌「居る處が知れた

（荻江の一節）

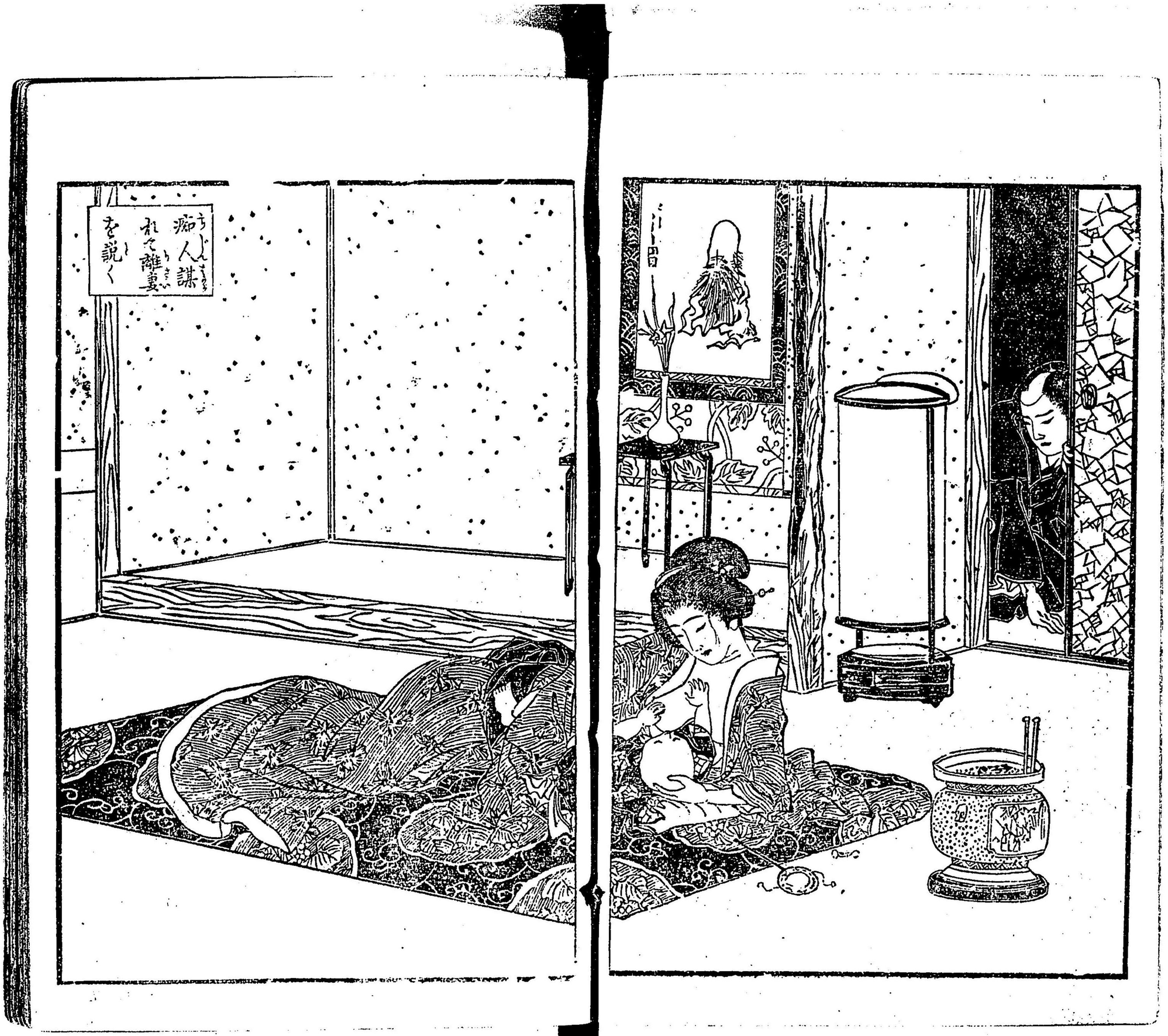
第十一席

引續きまして、山室半次郎い勘當を受けまして別ゐ是ぞとヤす知己もおく屋敷近い處にも居られませんから據ころおく横須賀周作とヤます丸山本妙寺長屋の御家人の處へ參りまして、天下の御家人とヤまして他聞い宜う御坐いますが十五俵一人扶持と云ふので約針を内職よ致しますが鋼を鏃で擦りまして釣針を拵へ升ら竈の廻りい金粉だらけて上流しい御坐いませんで溝板いガタ〳〵致し家根いぶつこ抜けて居て雨が漏ります見る蔭もおい姿で、デモ御成の時い黒の羽織を着て大層手柄らしく威張つた者で御坐います　周「誰だへ其處を卯くのい　半「一寸……私だ一寸開て　周「何方でケス其處い開きますヨ開くのです、誰だへ……コーお琴や誰だか開てお遣りノ次房こと「チヤ被入やいまし何もまアお上りあさいまし……本所の殿樣が周「エー然うかさア是い何も半「昨夜いいろ〳〵何うも周「イエ最う嘸まアお氣味が悪かつたらうとお琴とも云ひ暮して居りましたこと「思ふ樣よ落ちませんで幾ら擦つても泥が浸込で居て、あれへ撮み洗ひでありませんヲ洗ひですから乾きませんで嘸お氣味が悪かつたでせう、昨晩いまた有難う御坐いますあんお御心配をあさおいでも斯う遣つて御蔭負樣よおりますから殿樣の事をするのい當然とヤして居ります何うも澤山も召上らおいですが矢張炎難で御坐いますヲ御身拵がありますから

其う云ふ奴よい御撫ひ遊べすのい御損でお逃遊べすのい却てお強いのと云つて夫ともヤ暮して居りました直ぐあれから御屋敷へお歸りよありて乍「誠よ何うも面目次第もおいてと「何うか遊んでも何か何う云ふ譯でおんでチー乍「尤も夫い申すよ申されん手前何うも重々過失で周「過失と被仰るけれども人間過失のおい者いおい殊にお若い今お盛りの處で何云ふ事か知らんがお兄様い御病身で那邊り隱居して被入やるし他に御兄弟いおし御家督よあるさる許りに及んで居るよ御勘當おすつて誰をお家督よおさる乍「誰れと目當いおいが何うも餘儀おい譯でチ兄も悪く立腹したので周「立腹たつて御自分様い身体が悪くつて思ふ様に舌も廻いらんで何う云ふ御立腹ですかと何よも然う怒る事がありますまい乍「何うも面目次第もおい……當家へ連れて來た、日外厄介よおつたチ一人の婦人がありましたらう周「ニ……左様夕景からお出で夜の五ツ半頃お歸りおすつたあれい何處の奥様でゲスだが主あるお方でいありますまいがお琴にも然う云ふのであの位ねお婦人いおい實に美人でゲスチ何うも嬋娟窈窕たるあの如き婦女を何うも殿様何處からお連れ遊バーたか知らん嫖綴許りでおい一体品が宜し衣裝が立派で實よあの位おものい鮮おい失禮ながらお妾でいありますまい何うもお身拵のある方で何方等のお方様で乍「深く聞かれていま濟まんが實い斯う云ふ譯でと、半次郎額を撫面目おいが身の過失慨悔話しの一部始終を言ふと横須賀周作これを聽て素より酷い奴でありますが驚きまして周「是い何うも酷い何とも何うもこれい御勘當でゲスナ。お琴や是れい何うも御病身でも何でも是い御々勘當でせう是い御勘當でげせうこと乍「何だチ御勘當〳〵とキヤア〳〵云つて周「何だつて是い酷い殿様ゐ罪いおいが婦人の方に多く罪があるので是い何うも成程〳〵イ何うも乍「實よ何うも行處もおいので周「夫れい然うおつてい何うも致方がおい乍次郎がい差向き周作の處より外よ落付く心當りがおいから手を摺つて頼みます乍「何うも今におつてお前だから話すが他よ知己もおし前町の出入の酒屋や料理屋へい眞逆行ても居られおいが當期何うか御馴染甲斐よ御尊宅へ置いて貰ひ度が、身の立つ間チ向ふでも亦た何うか氣の折れる時もあらうから一箇年許り置て呉れんか周「是れい何うも御免を蒙りませう素より貴方い何だつて三百五十俵もお取おされたお家柄へ御生れ遊バして乳母や腰元にかしづかれて何處へ被入やなにも二人位お伴を連れて若様〳〵で世間知らずの御身拵だうら家來とも云ふべき周作の見苦しい處よい居られません第一家内が狹隘つて貴方を養ひヤす程の力がおい釣針を内職よしおいでい住かんと云ふので藏宿抔よい澤山お借財で仕様がおい溝板を修繕ことも出來ませんし屋根い漏ても孤を載せて石で留て置く位ねだから一人養ひヤすか無いので乍「ダガチ然う云いずよことお氣の毒様で御坐いますが周作のヤします通り私共へお置き申しても今迄お女中を多勢お使ひ遊バしたお身の上私し一人でいおの〳〵お客様のお世話い出來ませんものチ周「誠に濟まんがチ恥入た事をお話し致しませうが米櫃いがたつくし第一夜具布團ゲ有りませんからチ乍「夫れい内所でチ勘當金とも云いず彌助と云ふ田舎ものい下男に内所で届けて呉れた二十兩の金ゲあるが是れいまア貰つて來たが夫れよ先祖の差した永正助定の脇差これい賣る氣いおいけれどもイザ困つて賣る時い拾賣にしても五十兩のものいあるこれ丈けい取つて置くが二十兩いお渡しヤすから是れで何うか宜い様よ周「〳〵何うも二十兩恐入つたチお琴やお身拵のある方い違ふのう……ゲが重々貴方が不埒至極ですゲ何と有難いも

のだヂエ……内所で御隠居様が二十両殊に捨賣よしても五十兩からの脇差を下さるとい恐入りましたヂ半「此の金子ハ當期ふ前ヨ預けるから宜敷いやう周「御心配遊バすあどの様にもお世話をしおけれバあらんので段々御贔負に預り御恩分を蒙つた者ですから共ヨ乞食になる迄も御世話をしおけれバありません御安心遊バせ多分の事ハ出來ませんが薪炭ヨ不自由ハいと云ふのであなたの召上りものでも手前共の様お物を上れバ御安心で宜敷い御安心あさい〳〵、火止石油の看板みたいに無暗に安心〳〵と云ひ升先づ是れで借金も拂ひ月日も經つ食客の法を知らんからやまおろそん山室半次郎朝寐をしてハ浮羅〳〵遊びヨ歩行く其中ヨ金がなくおつて仕舞と出て行けがしで周とのさまちようと「殿様」すこれへ半「ハイ大きに暖氣ヨなりました周「餘程櫻も咲きました……時に殿様改まつて御相談致しますがヂ貴方誠に何うも恐れ入りましたが何うか一ツ工風を付けて下さいエー貴方の身の立つ様に何うか御存知の通りお身の上で何分にもお世話ガ出來兼ますがヂ、何うも人増せバ水増す諺の通りで一人増せバ一人丈けの事があるので、何うもお世話い世來ませんヂ何うも周作が突然に出て往て呉れと云ふので半次郎ハ當惑しました半「お前ガ世話アするてエかヨ落着て斯う道つて厄介ヨおつて置かれぬから他へ行て呉れと云ふのハ當然の事ヨ存じますが貴方ハ若様育ちで世間の事を御存じがおい食客ハヂ、食客の様ヨ整然と食客だけの事ハしおけれバあらん貴方のハ主人を一人申受た様おもので鄙重にして何時も据膳で差上るお床をとつておりますし實に何うも溜らぬと云ひますヂ殊お金ハ最う御坐いません米も最う盡るし困りますが何うの工夫ハありませんか、おの脇差をお拂ひ遊バしませんか此間懇望者がありましたガ、下

野屋と云ふ刀屋ヂ本郷三丁目の、あれが拜見仕度様お事を言たがお拂遊バしていけません々半「あれハ拂へません周「じやア斯うおすつて縁ハ切れても血筋ハ切れぬたつた一人のお兄様が病身で若し目でも睡る様お事があれバ厭でも應でも順を以て勘當ハ宥りて參る様にあらあけれバあらん左様でハ御坐いませんか半「何うも外に仕方ハおい周「貴方市ケ谷の入江さんの處へナゼ被入らおいお出でせう親子の情ですから貴方が改心の上からハ先方へ行て泣付て何うか是から辛抱致れてお出でせう親子の情ですから貴方が改心の上からハ先方へ行て泣付て何うか是から辛抱致す屋敷へ歸る様にするのも難澁して居る姿を見せんでハ向ふヨ憐みが興らんのら何處へか世代を持て手前ハ荷負商ひでもする了見だガ留守をして呉れる者がなくて商賣が出來ぬから今迄の事ハ重々の過失で、勘辨して歸つて來て呉れんかと話しをすれバ舅御も何うも繋がる縁の御孫様ハあるし奥様だつて情ヨ引されてお立歸ヨあろう奥様と一處お世代を持つ様ヨおれバ入江様も傍觀ハ居りません半「何うしてあれハ太い奴でヂ毒藥を盛り人までイエサ中々相談ヨハありません周「あらんたつて貴方ハ然うだがヂ奥様ハ實子だから底ハ御情合で半「迚も爺めハ話ハ出來ん面目おいがお民に此度の處で身ガ立つから何うかお前元々の通り夫婦におつて呉れんかと言つたら歸つて呉れやうか周「大歸りでナアーお琴こと「夫婦の情合ですからお歸り遊ばすに相違おいお話しをして御覽おさい半「其んあら行つて來やうかこと「然おさい連れて逃て彼入いまし女龍さんが居おいときに奥様を連れて逃て、お出おさい三晩許りお泊めヤて周作を掛合に遣ります然うして世代を持つに近處へ借家でも求めおけれバありません周「お子様が可愛いと思召すおれバ當分の間某へ借たと思召して何うかお役に立て下されバ手前店受人ヨおりませ


痴人謀れを離妻を説く

う其内本所の殿様が死去にでもあれバ厭でも應でも血脈だから御勘氣い宥て山室の家へ歸らるれバ元との通りの奥様でゝ御坐いませんか誘引して差支へあい三日が定法で三日目お掛合ふから宜敷い連れて被入いと、言されて差當つた分別もあい山室半次郎然うかと考へを起して是から出かけましたゝ恰ど三月の五日の事で御坐います山室半次郎ハ市ケ谷淨瑠璃坂へ參りますと頻りに春雨がシト〳〵遣つて來ましたゞ長延寺谷へ掛つて直ぐ水野樣の長屋下へ行きよ掛つたが万一して玄龍に認められていおらぬと門の傍へイむと女「お早くお歸り遊バして、と云ふ聲が聞える伊助と云ふ下男に藥籠を提させて入江玄龍溜蛇の目の傘をさして出掛けますから好い機梅だ此の爺さい居あけれバ何うか話しが附かも知れんと思つて居るうち蔭も見えあくあつたのら直ぐにソク〳〵玄關から案内も待たず上り込みます玄關の四疊から次の間は三疊敷の茶の間の次よ六疊許りの處よ子供を寐かしてありますゝ仰向におつてニヤ〳〵笑つて居る面側よおゝ民い頻りよ仕事をして居ります　半「誠よ何うも面目あい　民「アヽ……悩り致しました貴方何うして被入やいました　半「お前に于何うも面目あくつて合す顔いあいけれども半次郎殿ゞ分つて實よ進退谷まり何うする事も出來ぬ樣よ相あつた夫れよお前に面會もしあいから何うかして一度逢つて身の過りを懺悔してお前に重々詫を演初めて出來た東壽郎の顔も見度と思ふ故ゝ是まで來たけれども實い遣入りそびれて坂を上つたり下りたりして居るうち父上樣が今何處かへお出にあつた樣子だから實よ遣入り憎かつたけれども思ひ切て這入つて來ました重々の不埒何うぞ許して下さい罰ゞ當つて只今でゝ勘氣を受けて今ゝ周作の厄介食客同樣取扱われ水を汲めと言われあい許りで難澁して居るも皆お前の罰隱居や

兄の罰と思つて人れ恨まん我が身を悔もるので實に面目あいが何うか堪忍して下さい　民「ヘー和郎まア御勘當よおありあすつた事も蔭あがら聞ましたが親父ゞ彼の通りの氣性で御坐いますからあか〳〵許しい致ーません却つてまアお屋敷へ參つて隱居樣よも難題を言掛けましてお氣の毒で私も其場へロを出す事も出來ゞ夫れよ男の子ゝ男に付くのだから東壽郎丈ゝ置て行くと云ふのを乳の離れゝまで育て度と泣付ましたので利ゝん氣性の親父でも憫然と思つて此方等へ子兒丈ゝ連れて來て厄介よおつて居りますが和郎樣ゝ御勘當におつて何方等に被入やいますか姉樣の彼ア云ふ譯よありまするのも私しが皆あ行居かぬ故に殿樣に嫌われて彼ア云ふ事におつたのだと私しも最う届かぬ事ゝ悔んで居りますが和郎と斯う遣つてお目に掛つてお話しをして居りまする處へ玄龍が參ると何んあよ立腹しますか知れません早くお歸り遊バして　半「歸ります、歸りますが可愛子を捨てお前の樣あ信切あ女房を捨て如何よ魔とゝ言ひあがら彼ア云ふことにおつたのゝ我身あげら實よ分らぬので今お前と一處よあらうと云ふ譯に私の口からゝ言へぬが周作の家よ厄介におつて居るが、困るから何處へでもするが宜ゝ味噌漉しを提て出る姿ゝ蔭で隱居が見たら憫然と云つて話をしたら元々の商ひでもあるが宜ゝ味噌漉しを提て出る姿ゝ蔭で隱居が見たら憫然と云つて話をしたら元々の通り屋敷へも歸參る然うすれバ元の山室半次郎天下の直參の家よ生れ周作の家に厄介よおつて居るよりゝ寧そ世代を持て何んあ事でもして見やうと思ふが私が商賣に出ても留守を守つて呉れる者があいから夫れも出來す今迄の事ゝ重々私が悪いけれども何事も鉄の東壽郎よめんじて最う是からゝ眞以て改心致ーたから最う道よかけあい行ひをする心得であい玄龍殿か八釜敷言ゝふけれども私に道を立てゝ呉れ本所でも斯う遣つて孫もあるから何うも元へ歸して遣り度

私れ憎からうがお前にい氣の毒が一ばいあるのだからお前が歸つて呉れゞ殊さ依たら其手蔓で屋敷へも歸られ様かと思ふが私を元へ歸れる様ぁーて呉れるもお前の心一ツよあるものでお前の様な貞心な奥を捨て心得違ひをしましたい實に如何よも分らん我身で我身を怨むので……小兒い斯んなに大きくなつた親父が惡いい許りでお前の顔を見る事も出來ない許して呉んなさいョ東藏郎、と仰のけに寐て居る乳呑兒に己れが頬を押付て男泣きよポロリと泣く容子底い夫婦の情合

民「貴方ほん當よ御改心よ成ましたか貴方　半「本當どころでない改心よおらんで、何うして此處へ參るのい容易あものでない實に身を切られるよりい苦心切られても縛られても最夫丈の罰があると思ふら來るのだからチお民い涙に咽びまして　民「親どもい彼の通りの氣性で一と通りあらん氣性で御坐いますが貴方さへ御改心あなつてお屋敷へお歸り遊ばす様よおれゞ私しい玄龍よ愛想を盡されましても貴方よお付きヤて參りますが今迄の様な御心得でい私しい愛束ないと存じます小兒が可愛いと思召す處でない是れい當然な事で親子の情だから一夜でも忘れたことといありません夜中に側よ居るかと見る様な心持がしますからチ民「ジャア一處よ參りますが宜い様よ貴方話しを附けて下さるの半「周作の云ふのあい出て來いと云ふので、出て來て三日が定法だから夫れからして話をすると云ふので　民「貴方と一處に玄龍に默つて出ますか　半「默つて出あけれゞ往ません　民「へー　半「私い貯蓄があいのだゞ資本があいからお前少しでも貯蓄があるおれゞ宜いが無けれゞ何商賣するよも二三十金丈入るからチ母の方へ〳〵實に汚れまーて見苦う御坐いますさァまァ貴方へ何うも奥方が御一處でそれい何うもさァ此方へ周「何うもチお噂のみ云ひ暮して居りました欠違つてお目通りも致しませんで殿様にも此程ハ御免を蒙りまして遠慮おくありました殿様い重ね〳〵のお心得違ひ何うもチ私しいチ貴女御不禮よい心得まーたが篤とヤたので……貴方あんの事です奥様の貞心のお心持が知れませんか然う云ふ事いないョヤァありませんか貴方人たる者の道を御存じでせう何うも情あいと言てチ奥様よ代り意見致しまーた位ねで、夫れでも貴女能く被入いましたが貴女が被入ますれゞ殿様のお身ゞ立ます是が手蔓よありますから御心配い御坐いませんから行てお呉れあお願ひだから……この通り本夫が女房に手を突て詫る私も前の身の上とい違ふが如何ふ放蕩でも天下の旗本で民「夫れ程御改心よおつたら、と情よ絆され罪筒の抽斗から衣類四五品取出しました半「ウンとお出しあ夫よ小遣ひいあいかへ　民「親父が預つて呉をと言て預りました三十金半「夫い幸ひ、と無理にお民を連れ急いで周作の處へ參りますと日いとつぶり暮すす半「御免周「お歸り半「歸つたヨ琴「チヤさァ貴女此方へ……お琴や奥様が被入つたことは……若様を一寸お琴やお抱さヤてこゝ周「何うもチお噂のみ云ひ暮して居りました欠違つてお目通りも致しませんで殿様にも此程ハ御免を蒙りまして遠慮おくありました殿様い重ね〳〵のお心得違ひ何うもチ私しいチ貴女御不禮よい心得まーたが篤とヤたので……貴方あんの事です奥様の貞心のお心持が知れませんか然う云ふ事いないョヤァありませんか貴方人たる者の道を御存じでせう何うも情あいと言てチ奥様よ代り意見致しまーた位ねで、夫れでも貴女能く被入いましたが貴女が被入ますれゞ殿様のお身ゞ立ます是が手蔓よありますから御心配い御坐いませんから行てお呉れあお願ひだから……この通り本夫が女房に手を突て詫る私も前の身の上とい違ふが如何ふ放蕩でも天下の旗本で民「夫れ程御改心よおつたら、と情よ絆され罪筒の抽斗から衣類四五品取出しました半「ウンとお出しあ夫よ小遣ひいあいかへ　民「親父が預つて呉をと言て預りました三十金半「夫い幸ひ、と無理にお民を連れ急いで周作の處へ參りますと日いとつぶり暮すす半「御免周「お歸り半「歸つたヨ琴「チヤさァ貴女此方へ……お琴や奥様が被入つたことは……若様を一寸お琴やお抱さヤてこゝ周「何うもチお噂のみ云ひ暮して居りました欠違つてお目

通りも致しませんで殿様にも此程ハ御免を蒙りまして遠慮おくありました殿様い重ね〳〵のお心得違ひ何うもチ私しいチ貴女御不禮よい心得まーたが篤とヤたので……貴方あんの事です奥様の貞心のお心持が知れませんか然う云ふ事いないョヤァありませんか貴方人たる者の道を御存じでせう何うも情あいと言てチ奥様よ代り意見致しまーた位ねで、夫れでも貴女能く被入いましたが貴女が被入ますれゞ殿様のお身ゞ立ます是が手蔓よありますから御心配い御坐いませんから行てお呉れあお願ひだから……この通り本夫が女房に手を突て詫る私も前の身の上とい違ふが如何ふ放蕩でも天下の旗本で民「夫れ程御改心よおつたら、と情よ絆され罪筒の抽斗から衣類四五品取出しました半「ウンとお出しあ夫よ小遣ひいあいかへ　民「親父が預つて呉をと言て預りました三十金半「夫い幸ひ、と無理にお民を連れ急いで周作の處へ參りますと日いとつぶり暮すす半「御免周「お歸り半「歸つたヨ琴「チヤさァ貴女此方へ……お琴や奥様が被入つたことは……若様を一寸お琴やお抱さヤてこゝ周「何うもチお噂のみ云ひ暮して居りました欠違つてお目通りも致しませんで殿様にも此程ハ御免を蒙りまして遠慮おくありました殿様い重ね〳〵のお心得違ひ何うもチ私しいチ貴女御不禮よい心得まーたが篤とヤたので……貴方あんの事です奥様の貞心のお心持が知れませんか然う云ふ事いないョヤァありませんか貴方人たる者の道を御存じでせう何うも情あいと言てチ奥様よ代り意見致しまーた位ねで、夫れでも貴女能く被入いましたが貴女が被入ますれゞ殿様のお身ゞ立ます是が手蔓よありますから御心配い御坐いませんから行てお呉れあお願ひだから……この通り本夫が女房に手を突て詫る私も前の身の上とい違ふが如何ふ放蕩でも天下の旗本で民「夫れ程御改心よおつたら、と情よ絆され罪筒の抽斗から衣類四五品取出しました半「ウンとお出しあ夫よ小遣ひいあいかへ　民「親父が預つて呉をと言て預りました三十金半「夫い幸ひ、と無理にお民を連れ急いで周作の處へ參りますと日いとつぶり暮すす半「御免周「お歸り半「歸つたヨ琴「チヤさァ貴女此方へ……お琴や奥様が被入つたことは……若様を一寸お琴やお抱さヤてこゝ周「何うもチお噂のみ云ひ暮して居りました欠違つてお目

周「エー殿様あんですかお手當を御持參よ成りまーたか半「ア、民が親父よ預つた三十金がある　周「三十金それい何うも……奥様御安心遊ばせ驚來のお馴染でどの様よも殿様のお身の立つ様よ骨を折ますから御心配あく……お琴や今夜い夜具い横町で買た方が宜い損料抔い却つて高價つくからチ夫れに米い借を殘らお拂つて跡を入れる様……直ぐ頂戴と三十金を取揚げ三日めに入江へ行くと云て黒ぺラの輕敷羽織を着て屋根板みたいな雪駄穿て出掛ました

ます頻り〳〵玄「玄關に案内がある」ヨ男「ドウーレ何れから」周「入江玄龍様お宅へ此方でゲスカ男「手前で」周「九山本妙寺長屋の横須賀周作とやす若少々御相談致度ことがあつて罷り出ました御多忙でも是非拜顏を得度い」男「少々お待あすつて……先生」玄「何だ」男「九山本妙寺長屋の横須賀周作とやて」玄「横須賀周作ゥー山室半次郎とい遊び友達天下の御家人と云て居る奴それが來たのか左樣かこれへ通すが宜い」男「こちらへ」玄「さァ何うぞ御遠慮あく手前が出るのですが少々足痛でげして御免を蒙りますさァこれへどうぞ先づ初對面の挨拶を致します」周「初めまして手前横須賀周作とやて至つて不骨者で此後とも別懇よ願ひます能うこそお出で大きに朝の樣子でい大分風立ましたが風があげてどんより曇りましたし餘程暖氣にありました……コレお茶を進せる……何か御用で」周「ハイ少々内々にや上度儀が御坐るがお家來ですか少々御遠慮ゥ願度」玄「伊助少々内談と被仰から此方へ參らぬやうエ雇女も此方へ來ないやうに伊」「ヘイ」周「早速でゲスが……宜いお住居でゲスなんでゲスナ高聲へあるし殊にお靜かで宜敷處で」玄「住ゐ易い丈で」周「偖改まつてやーますゲ嘸御立腹で御坐らう貴方の御合の山室半次郎事言語同斷の始末折角の御緣も破縁にあつて實に生木を裂やうにしたも山室半次郎重々の心得違ひ當人もやと〳〵前非後悔致して只今手前方よお在で、まア置て上るので俗よやせバ食客併し乍ら天下の直參の家に生れて手前如き貧窮者の方へ彼やつてお在でおさる夫れも自から惡いと心得て不自由を得心でまアお在だゲ段々腕組で種々考へた處が身の始末方お附かんで一昨々夜此方のお嬢樣をまア前々緣を結で自己の女房と心得ていありませぬ尤も子があるから子にも曳されて此方へ參つて話して奥樣も夫婦の情殊に鉸の若樣がある處から自然情に曳かされお出あすつた實い手前方よお在だゲ直よお知らせやべきだゲ何分にもお連れやさうと思つてもチロ〳〵涙をこやして隅の方で二人がコソ〳〵話をして居る生木を裂く樣あ心持がして周作も實よ忍ひがたく一兩日も遲れ……連れ出したい重々濟ぬ事だゲ何うか奥樣と元々よ緣ゲ纏まれバ當人も底で改心して荷擔商ひでも何でもしやうと云ふので、貧乏に暮して居れバ何うも見るも憫然だと憐みが出ますから隱居の目よ入りますとお兄さんよ話をすれバ勘氣も兒まぜう山室の家よ歸れバ兄さんい病身あの中氣でゐれバ何しても血統だから半次郎殿跡目相續しあけれバあらん然うすれバ奥樣も手前も此上もあく喜ゞ敷から御勘辨を以て御立腹でもあらうが半次郎殿へ絹を戻して奥方をお歸し下されバ誠に有難い其の御心底を承りよ參つたので、何うでゲセウ」玄「これい何うも誠よ御深切あ事で遠方の處御足勞又た半次郎民の身の上もお思ひ下すつて元々よして呉と仰る外あらん尊公樣がお出でお話否い言へぬこれい上るより外私考へあい」周「恐入つたチエー何うも成程何うも底い兼て承いつたゲ元エー御役柄をも勤め隱居して好から斯う云ふ醫道をあさると云ふ世間を步行て御苦勞をおすつて夫婦の情兄弟の情又何も角も御存じでハイと輕くお承引下さる大概あ者い筋を言ますが是れい何うみても恐入りまーた周作感服致します」玄「貴方い丸山本妙寺長屋と子年を經ると度忘れをして往けません一寸お名前を記しまして」周「丸山ですか横須賀周……成程へーー周作宜敷いお頭い何方でエー本鄕弓町加藤此作へーー宜敷い民を貴方がお世話で民もまた半次郎の野郎も實に人面獸心で一人の親を捨てゝ出る不孝不義あやつ娘とい思いぬ半次郎方へ勘當の上緣を切て嫁に遣る貴方が子よして引受て遣るだらうチ

縁を切て成程手前引受け親元とあるとも亦仲人とあるとも届かんあがら半次郎と縁を結びます
御心配あくハイ 玄「お引受の確とした証を拝見しおけれバ手前どうも安心致しません 周「書付を
認ませう 玄「何卒確と見限り勘當した娘を引受け私の娘分よして半次郎方へ縁付何様あことも
つても迷惑い掛あい引受ると云ふ書付ヲ 周「宜敷、用紙か何ウヲ、一ず書ませう

第十一席

周作い廢止バ宜いよ筆を採てスラ〳〵と充分機嫌の宜い様ふ念入の証文を書さました 周「今日
ウ印形を持参せぬでも宜いの是れい縁の纏まりますので、と証文に
印形を捺押て差出す 玄「宜敷い是れで彼れい縁切でお前さんが引受けて山室半次郎へ民い遣て
最早や親子の縁い切れまーたが實よ不埒至極あ娘、姉淸があの如くありましたも半次郎の心得
違ひ身に帶刀して勤めをする身の上よ恥ぢあい實よ聞いたことといあい亂暴狼藉あ奴で、夫れを
慕て一人の親を捨て出る民にい愛想もこそ果てたから勘當致した 周「嘸ぞ御立腹でゲセ
ウ 玄「底で勘當すれバ他人で他人の物を盜んでい濟むまい斯た親不孝者よ一品たりとも遣る心
底にあい衣類帶とも九品櫛笄其外私が預けた三十兩の金子を盜んで逃げましたが貴方御引受
の上からい速かよ何卒、今日と云ふ譯にい參りますまいが明日夕景までい根達あく衣類其他と
も持つて來て渡すだらうヲお引受けの事だから 周「是れい何うも怪しからんヲですがヲ御立腹
であらうと存じたところ能く御勘辨下すつて……劇場道よもある通り縱へ盜賊でも一端夫と
つた者いみすゝ賊とい知りあがら夫婦あるものい情を立るので、御存知でせう劇場よも萱
双紙にもある譯で 玄「劇場や草双紙あるか知らんが手前い何うも左樣あこの心得違ひの者にい
許されません周「ダガヲ是れいヲ貴方困りますヲ何うも、ですダヲ……斯して下さいお嬢樣が斷
ゐらずに持つて逃げたのい自分の物と云ふ心持で持つて逃げたのでせう貴方勘當あさるあらバ
左樣でい御坐いませんの品物と三十金い御勘當金として實子だから遣つたとして其他よ召物の
平生着や其他不用物を添へて下されバ手前元々の通り貴方の被仰る通り縁付けます殿樣もお歸
りあれますから 玄「イヽエ歸るとも其樣あことよ頓着しあい彼れが旗本の奥樣よ
あらうとも最う再び面會い致しませんから 周「左樣思ひ切あれバ何う云ふことよお手當をして
下さる 玄「手當いしあい緣が切れゝバ赤の他人だから何うか三十金に衣類櫛笄一品も遣らぬ速
かに、併し古い襦袢い遣うが跡い殘らず返して下さい 周「ヤアこれ程迄ヤしても御聞容いあり
ませんか 玄「聞入れられません 周「どら程の物を取つたの知らんが仲よ立て天下の御家人御成先
をも勤めるものが掛合に參つたのだ、餘うと謂ハヽ怪からん不禮の挨拶でいあいか 玄「默れコレ
痴男天下の御家人が無沙汰で他人の娘を泊て濟むか拘引と言立て頭へ屆けれバ失敗らんでいあ
るまいナレども左樣あ酷あことい致さぬ唯だ許して遣る速かよ三十金と衣類悉く持つて來て返
さぬときいこれに記し置いた頭へ屆け捨置ぬから左樣思召せ 周「是れい何うも怪ーからん夫でい
まるで親子の人情を失ふあと云つて犬畜生の半次郎よ落つて出たお民老体の
親を捨てゝ出る不孝不義者にい一錢一品たりとも遣れぬ天下の御家人御成先をも勤める者が無
沙汰で娘を泊めて濟むか速かに持て來あければ届けるが何うか 周「何のつて是ハ怪からんヲ……
ものでヲ先生 玄「先生も何ふもわりません周「何もこれい恐入ッたヲ夫ハ何も餘り情あいと云ふ
ダガヲ是れいヲ何ふ合羽御家人め楊枝でも削つて内職にして居ゐ

手前ハ町醫でも紀州藩の入江惣左衛門とヤす者で悴ハ然るべき役柄をも勤める者である許さぬから左樣思へ　周「これハ餘りと云へバ女「何でもして見ろ、行かぬか往け、と袖を取つてグーッと引立てた横須賀周作ハ「怪しからん、と拂はうとしたが玄龍ハ柔術を心得て居りますから逆ネ腕をとつてポンと投ると玄關の臺石ネ臀もちをつゐて立兼ね顏を皺めて變ネ顏をして歸りましたが持つて來あければお頭へ届けると云ふので餘義なく翌日に相成りまして金子ヨ衣類をも何うのして玄龍方へ返して親子の緣切れとある是れゲ半次郎身持放埒の手掛りでありますが半次郎身の行立ぬハ何分居る處が周作と云ふ差詰め這入る當もなく持て居た金ハ借られて周作に米薪炭酒屋の拂ひに遣はれ致し方なくコッソリ隱れて屋敷へ參つて下男彌助を喚出し差詰ッてこれ〳〵だから何卒隱居ヨ話しとして呉れと云ふ體來居りますと田舍堅氣の彌助が隱居に話しを致しますと親子の情で隱居から三十兩出ました其三十兩で借財を片付け其日〳〵と空しく暮すので殊ヨ子供ゲ附て參りまして〳〵夏向きヨなれバそれ丈の物ハ着せなけれバならんゲ蚊張もなけれバあらんゲ坐して食へバ大山も忽ち空しくすると又出て行けがしにされ仕方なく半次郎また屋敷へ行く彌助が口を利て十兩、また行と五兩と段々直が下つて來るも致方がない半次郎ハ浮羅〳〵して居りますから悪いことゐする筒更世間でハ鼻撮みヨされ惘然なのハお民で釣針を拵へる内職を覺えて子供を寐かし付けてハ夜る遲くまで燈下に内職をする油を遣ふと云つて周作に呵責られます油を買ふ烏目もない時ハ自分が下に着て居りました肌襦袢まで脫いで居る樣な事で其うち間の悪い時ハ往かんものので翌年寶曆十一年に兄半助が病死して直ぐ他家から養子致しまして山室の家督人ハ出來ます殊に續いて隱居

が死去る前の奉公人ハ暇にありがつと屋敷の樣子が違ひまして無心なも行く處がない其年の寒さの取付ヨない仕方がない人に勸められて勝負事に手を出すと尚更ら負續きますあれども其頃ハ遊人と云ひまして變つた者がわつたもので表で喧嘩を吹掛けてハ町人を嚇かしてハ逃ると跡に殘つたものを浚つてハ逃げるとんと盜賊同樣な事をして金錢を取る其他嚇かしてハ逃ると跡に殘つたものを着て呉の出ました怪しい帶をしめ大小を落し差致す樣におりまーた嚇かしヨ矢張り紋付ものを着て呉の出ました怪しい帶をしめ大小を落し差しにして月代ハ風邪でおく嚇しヨ生して年齡とつて二十三好男子で大小さして歩行きますから人ハ怖がります十九日の夜の只今で云ふと恰ど十一時頃ろ牛天神下から諏訪町へ行掛るとイと西北の風が強く翼がバラ〳〵降出して來て仕方がないから軒下へ這入りまーて半「アヽ寒い寒い溜らねナ何うも何か斯う温かい物アねエかナアヽ寒い溜らねエ、脇の方の軒下でバカヽヽ團扇の音が致します夜鷹蕎麥屋かそバや「〳〵イ有難う御座いますお最う彼是れ九ツヨおりません半「然うかナヽヽ思ふ樣に聲が出ません半「ナニそバや「有難うお幾間上げます半「買ふのヒやアチエ、何時ダエそバや「〳〵イ左樣でゲス半「寒いのうそバや「悪いものゲ降りまして……催やして居りました降ると思つたが雪もないやうお棚梅で半「賣れるかナそバや「賣れるかナヽヽ寒いのうそバや「悪いものゲ降りまして……催や

（續）

ー降つて參るが手前どもの方ハ當込で半「降る方ゲ宜いかナ賣れおくつてハ氣の毒だナ重い物を荷擔で歩行て厭だらナヽヽそバや「へイナニ殿樣方お發えヨないことでゲスが私どもの商賣ハ間ガ悪いと徹夜歩行くことが御坐います半「大火事でもあると賣れるだらうそバや「〳〵イ火事でもあると賣れます半「ヤアヽ火事でも宜いと思やせんかそバや「然うでも御坐いませんが半

手前い町醫でも紀州藩の入江惣左衛門とヤす者で悴い然るべき役柄をも勤める者である許さぬから左樣思へ　周「これい餘りと云へバ玄「何でもして見ろ、行かぬか往け、と袖を取つてグーッと引立てた横須賀周作い「怪しからん、と拂はうとしたが玄龍い柔術を心得て居りますから逆ホ腕をとつてポンと投ると玄關の疊石ホ臀もちをつついて立兼ね顏を皺めて變ホ顏をして歸りましたが持つて來あけれバお頭へ届けると云ふので餘義なく翌日に相成りまして金子よホ類をも何うあして玄龍方へ返して親子の緣切れとある是れが半次郎身持放埒の手掛りでありますが半次郎身の行立ぬい何分居る處が周作と云ふ因より薄情の者で、と云つて何處と云ふ差詰め這入る當もなく持て居た金い偖られて周作に米薪炭酒屋の拂ひに遣はれ致し方なくコッソリ隱れて屋敷へ參つて下男彌助を喚出し差詰ッてこれ〳〵だから何卒隱居又話してと云ふ情來居りまする田舍堅氣の彌助が隱居に話しを致ーますと親子の情で隱居から三十兩出ました其三十兩で借財を片付け其日〳〵と空しく暮すので殊ホ子供が附て參りましてそれ〳〵耳向きよホおれバそれ丈の物い着せおけれバならんが蚊張もおけれバと又出て行けがしにされ仕方なく半次郎まだ屋敷へ行く彌助が口を利て十兩、また行と五兩と段々直が下つて來るも致方がない半次郎い浮羅〳〵して居りますから悪いことといする何更世間でい鼻摑みよされ悄然あのいお民で釣針を拵へる内職を覺ゑて子供を寐かし付けてい夜る遲くまで燈下に内職をする油を遣ふと云つて周作に呵責られます油を買ふ烏目もない時い自分が下に着て居りました肌襦袢まで脫いで居る樣ホ事で其うち間の悪い時い往かんものので翌年寶曆十一年に兄半助が病死して直ぐ他家から養子致しまして山室の家督人い出來ます殊に續いて隱居

が死去る前の奉公人い暇にありがヲりと屋敷の樣子が違ひまして無心よも行く處がない其年の寒さの取付よい仕方がない人に勸められて勝負事に手を出すと尙更ら負續きますあれども其頃い遊人と云ひまして變つた者がわつたもので表で暗かしてい金錢を取る其他嚇かしてい逃ると跡に殘つたものを着て具の出ました怪しい帶をしめ大小を落し差致す樣にありまーた嚇かしよ矢張り紋付ものを着しにして月代い風邪でおく嚇しホ生して年齡と人い怖がります十九日の夜の只今で云ふと恰ど十一時頃ろ牛天神下から諏訪町へ行掛るとピイーと西北の風が强く裏がバラ〳〵降出して來て仕方がないから軒下へ這入りまーて　半「アヽ寒い寒い溜らぬナ何うも何か斯う温かい物ァねエかナア、寒い溜らねエ、脇の方の軒下でバクバク團扇の音が致します夜鷹蕎麥屋い拳骨で水ッぱおを擦りおグらすつとこ被りをして寒いので思ふ樣に聲が出ません　そバや「蕎麥屋か　そバや「〳〵有難う御座いますナニ　そバや「有難うお幾個上げます　半「然うかヲお最う彼是れ九ツよおりませう　半「然うかヲして居りました降るりと思つたが雪もおいやう降つて參るが手前どもの方い當込で　半「降る方が宜いかヲ賣れおくつてい氣の毒だヲ重い物を荷擔で歩行て厭だらうヲ　そバや「〳〵イナニ殿樣方お覺えいおいことでグスが私どもの商賣い間が悪いと徹夜歩行くことが御坐います　半「大火事でもあると賣れるだらう　そバや「〳〵イ火事でもあると賣れます　半「ヤア吹事でもあれバ宜いと思やせんかそバや「然うでも御坐いませんヵ半

次郎いやがて蕎麥を誂らへます半「惘然だ一杯食つて遣らうそべや「何卒、ありがたう御坐います半「これ〳〵面倒だから二杯許り一時に推らへお鉢盛みたいお松魚節に双紙みたいお海苔でも入れろそべや「へイ半「夜鷹蕎麥屋い水が無あると天水桶の水を入れるてニーがまさか其様な事いわるめへナそべや「へイまさか半「ナニチ出來ました半「成程箸い是れでも割箸だ一寸清淨の樣の尻へ犬の尿が付くと汚ねへそべや「へイ半「天水桶の水杯を入れるとだが明日よあると糊で喰附るだらうそべや「へイ何よ遲くあると路次が締つて汲みよ這入るムとが出來ませんで聞くと食ひ憎いナ　そべや「へイ、ナニ此方の事で澤山論まして臆脹して置きます半「詰い事をするナ…餘儀あく清潔あ流れがあると溝の水を入れるのそべや「イエナニ水道の溢れで半「笊の尻へ犬の尿を附けやアしねエかそべや「へイ、ナーニ半「ボロ〳〵不味いナ何うも餘程不味い何うも錢を貪ぼり取るのだ芥みたいあものを喰ハして能く斯あものを食ふナ一杯で凝々するだらう斯あものを喰ふと跡が心持が悪い人に物を宣るよい少し氣を附けて好くしあそばや「へイ何うも美味い上げられません十六文よ宣るのですから直段丈で半「ナニヨ　そべや「殿樣〳〵代を半「ナニ　そべや「二杯の代を半「代、成程代い失念致した、待てニ懐中よあれバ宜いが……生憎だ蕎麥屋持合せがあいらかひあすつてい往けません僅か十六文の商ひをして貸あんて困ります子半「因つても持合せがあい明日の夜拂ふ行燈を見覺えて居るのら明夜取らせるそべや「私共荷擔ぎ行くので此處に居ると極つて居りませんからうひあすつてい困ります弱い商賣で困ります半「遣り度がおいニーおい袖い振られん能く理解を考ゞへて見ろ、あれバ遣る先もお話志やアあいか無から遣られぬてニのだ其理解が分りませんかニー分りませんかへ　そばや「分るてエ分らねへてニ貴方無つて召上るてニナ酷い志やアありませんか半「酷いたつて無いものそべや「無いたつて立派あ方が僅りあもので、商賣致す者で通り掛りのお方へお貸しやす譯よい參りません……ニ、ト其んあら能う御坐います明晩まで御用達ヤしますから何か形を下さいお持物でも大小でもお預かり申せう半「何んだ是れヤイそべや「怜り致ーます子大きお聲をして　半「大小を預かるとい何だ武士が腰よ滯するいナ荷且よも武士の魂、それを蕎麥位よ何うも代に替へて預かるとい何だ怪しからん奴だ拾置かれん奴、切捨よして宜い奴っそべや「蕎麥を食つて置いて、あんまい不蕎麥でもお手打い酷う御坐います　半「ナニ馬鹿よするナ夜蕎麥賣い何もろ出來たか知るまい夜鷹蕎麥い夜鷹が食ふからでハあい御鷹匠の拳の冷へるよ手烘りを供する爲め草保年間往來よ出て手當を致し其處を以て蕎麥屋出兵衛と云ふ者が願つて出てお許しにあつたので夜鷹蕎麥と云ふがナ夜るお鷹匠の手を烘るお鷹蕎麥と云ふのだ武士が寒いと云へバ無錢で喰いせて然るべきだそばや「其お無理ゝ被仰つてハ困りますそべや「こう〳〵其んあ御最あ人間があるものか……宜しう御坐いまセ歸りませう半「蕎麥屋機嫌を直して行けこれ〳〵……先よナ汁粉屋の美味そうなのが居たら二人許り來せ、これへそばや「尿でも食へ、と愚頭〳〵口小言を言て行ます半次郎い寒いから軒下の出念のある家の脇にイずんで居るとがんやり燈光がさすらら覗いて見ると年輩の男が後向けニおつて居りますが△「それい對談が違うが受人のお前が云ふとだから夫れで宜敷いとして半「金受取つて置く利分

の處い四ヶ月分貸よおるヨ ×「何ぞ十金い利分を入れますから、間違つても私しが受人に立て居りますから先生に御迷惑い掛けません御約定通り三月の處が四月におつても五十金の處い間違ひ御坐いません △「夫れいお前ゞ受合つたからサ ×「夫れい御損い掛けませんから……降つて居ります様でお傘を △「ナニ傘い宜敷い大した降でもありますまい是れから近いから ×「提灯坂までい餘程御坐います……お持遊ばせ、半次郎ズーと跡へ下つて天水桶の處へ下ると蛇の目の傘をさして入江女龍短いのをさして出掛けます 半「金を貸して居やァかるナ彼奴、尤も本所の屋敷から二百兩取つたから何んお事をしても三四百の金いあるから高利貸をして居やァがるナ悪運の強い奴だナ、と思ひまして見え隠れよ段々女龍の跡へ附いて參りまして水戸様の長屋下を通つて龍慶橋を渡りまして左りへ附いて參りますと牛込の方へ出ます、往來いビッタリ止切ます恰ど間ねるのい日白の九ツの鐘ボトン 半「提灯に一ツも逢ぬ寒さうな、江戸川邊りい一体淋い、ビショ〳〵と先へ參りまして 半「入江氏女龍さん〳〵 玄「ハイ誰方へ 半「〳〵イ誠に久々、山室半次郎で 玄「ア、半次郎あんで私しを呼あすつた 半「夫れいお前よ合す顔いおい實にお前の罰が當つて民の離儀い一と通りでおい私しい男だから金才覺よ行つても随分酒の一杯も出れゞ氣の紛れることもあるゞ民は横須賀の家で釣針を拵らへ夜更まで内職してヤッと送る山室夫婦、知つて居るだらう本所でも隠居も兄も死絶えて他から養子が這入つて代替りにおつたから山室の苗跡い立つて居るけれども家來はじめ顔が代つて無心合力よ行くことも出來ず何うよも此よ立つことが出來ぬ私い憎からうがお前のたつた一人りの娘、民を憫然と思ひ孫の東壽郎ゞ可愛いと思つて何うか澤山い願いおい二三十金用達で下さらんの資本よして商賣よ取付く積りで何卒立腹でもあらうけれども民よ免じてお持合せの金子三十金許り拜借願度 玄「馬鹿、尿痴男よくも汝い圖浮〳〵敷これへ參つて手前半次郎で御坐ると何の面さげてヤした人面獣心の大畜生だ彼地へ行け見るのも汚らわしい避ろ 半「夫れも心得て居るけれども民を 玄「民い何だ貴様の様あ大畜生の跡を慕ひ老体の親を捨て、出た民可愛いとい思いぬ愛想もこそも盡た一人の娘を見限るのい能々のことがあるからだ汝い親子兄弟里婿君臣の情も心得おい人間の道を知らぬ是丈の近い道理ゞ分らぬか痴男め半次郎い悪口されて倘々身く出ます 半「其んおことを言わずお、お前私の家へ行つて表向お願すると言つて隠居が慥と二百兩出した其金を取つて金貸をして懐中へ一寸しても十金づゝも利足を取つて歸るお身の上 玄「假令持て居て溝の中へ捨る金があつても汝等よ恵むものか悪めゞ却つて仇におるのだ退かんかさア避かんと蹴るぞ汝の様あ犬い人という思いぬ犬だと思ふ犬が往來よ居るも同様だ、と下駄がけの儘半次郎の肩を蹴たから轉うと横おる足腰立て 半「ナニヲおさる 玄「ナニ蹴たが何うした人間とい心得おいから蹴たが何した、避けと言つたら避け犬でも人が來れゞ避く往來の妨げ致すナ避かんの、と言ひおがら又蹴ました 半「涙人政しても山室半次郎貴公の足下に掛られる覺えおい土足を以て蹴のけて宜敷いか 玄「蹴たが何した何だ武士振たことをするナあんだ柄前へ手を掛けて切る氣ゥ切るおら切つて見ろ、と又片足あげて柄前へ手を掛けた半次郎よ斯う下駄を引かけてグッと蹴付たから 半「痛々ナニヲするのだ、と腹立紛れ引抜て振冠るとヒラリと跡へ飛下り蛇の目の傘をつかめ反身におつて狙を付ける半次郎い劍術の道い知りませんが向ふい蛇の目の傘力よ任ーて搥拂ひ一足踏込で玄龍お切掛る鋒と鳧との修羅

道を知らぬお民い寐る眼も寐ずよ内職ごと横須賀い小鍋立で酒よ酔て轉寐　こと「さア〳〵寐ま
せうお民さん寐て下さい仕事い晝よして下さい夜る寐やうと思ふ枕元でヂイ〳〵遣つて聽付て
居るけれども夜更て鑪の香いせつかい寐てお呉れ　民「お八釜敷う成たけ聞えない樣よと存しま
しても何うもこと「聞えますヨ夫れよ何うか子供を泣うせないやうよして下さい　民「ハイ此節寒
いから機嫌が悪いと六かつてゐりませんよ夫れに此程少し乳の出が悪くお腹がすきますと見えて
何うも泣きますこと「其んなお泣聲をして、早くお寐かせあそ　民「誠よ慮持で困ります……御新造
樣お休み遊ばせこと「ハイお民さん私い寐ますヨ、……グウ〳〵鼾の聲か民い夫半次郎の身の上
を案じ小兒よ乳を含ませコロリと横におつて寐乳を吸いしていると……トン〳〵　半「開けてお
呉れ今歸つたヨお民ヤ開けてお呉れ　民「ハイ只今　半「ア、寒い　周「今開ける仕樣がねニナ其んな
に叩いて戸が壞るお琴や仕樣がねニ開けて上あ半次郎さんが歸つた……お民さん御亭主かお歸
りだヨ食客雨漏やどの戸を叩きて少しい遠慮するゞ宜い　民「誠よお八釜敷うナニ私が起て居り
ますから宜敷う御坐いまし只今開けます……お歸り、と辛張を外しますな
民い辛張を外し戸を開けて　民「お歸り遊ばせ半「ハイ只今　周「お歸りあさい何うも驚きますヲ何
うも世間へ宜敷あい寐付いた時ぶん叩いて、毎晩だから驚きますヲ些といたしおんで遠慮が無
けれバあらん半「寒くつて仕樣ゲヲへが酒を一杯貰つて呉れめニかお琴さんお願ひで、温たけへ
鍋か何か二種許り　周「困りますヲ何うも實に半次郎さん夜中に歸つて酒を飲み鹿の鍋ゐどゝ何
う云ふお心得だヲ殊に何うも最う八ツよなる丑三ツの頃になつて酒屋の番頭だつて寢て仕舞ひ
ますヲ中々起しおつて起るものか夫れも平生拂ひを能くすれバ起るが能くないから窓から顏を出

して横須賀さん悪があるッと云つて、迚も往けない半「現金あら買へるだらう　周「現金あら買へ
る位ゐ、手前買つて來て飲むゲあいから仕方がない　半「此處にヲ端たが十兩ある十兩才覺したか
ら是れで周「エー十兩、何處で借りて　半「アノ龍慶橋でイニーアノ牛込でおい市ケ谷の入イヤ四
ツ谷の仲殿町……板橋三右衛門方で借りて來た　周「御小納戸を勤める……お琴違ふナ、ニー何う
も向ふい御小納戸を勤める五百石も取る方、常に御懇意から一寸しても十兩とい何うも種の好
い方い違ふナお琴ヤ酒屋を起して、と云ふので其中酒も來る共よ飲んで寐まする此方等い三疊
の見る影もおい部屋　民「大層遲く御歸りで、お案事申しました　半「民……金がおけれバ彼の通り
よ扱われ仕樣がヲニから驅摺り廻つて四ツ谷の仲殿町へ行つて漸やく少し才覺したが　民「夫れ
いまア安心致しました乳の出が少し悪いのでむづかりまして坊ゲ寐付きませんで……お寐樣を
……貴方御足に血ゲ大層付いて居りますヲ　半「ニーアノ川勝前へ來ると犬がギアン〳〵五六匹飛
付いたから何うも怖くつて溜らんから引拔いて振廻いす時犬の鼻へでも障つたと見える犬の血
だ民「其の血でい仔細御坐いません洗つて置きませう、と破れ扉風よ半次郎の着物を掛けて寐ま
したが半次郎とても性い善あるもので……ア、お民にい氣の毒ナ親の仇と知らず私を夫と存じ
て大切おして呉れるがと枕を並べて寐るも何とおく身のすくむ樣な心持がして其年い爾へ樣と
思つたがあれども耐へかね遂々其年の暮半次郎逐天致しました是れからお民の圖柳のお眼にお
りますが一寸ひと息つきまして

第十三席

引續きまして半次郎が逐天致した後い周作夫婦でお民一人りを日毎のようよ不足に致してとう

〳〵出て往つて呉れと申しますからお民も詮方なく泣々「ハイと云つて家をべ出ましたが何処へ行つたら能のらうと考ゲへて居りましたが不圖考ゲへの起たのい紀州大納言様の家来入江惣左衛門の養子い隣だつた中だが姉様い血筋の中故よ事よ依たら、物堅い姉様求だろく〳〵違つた事い無い譯だが何うぞしてと悔々参りまーたのが只今の二時頃で御坐います玄關を覗いてみると入江惣左衛ポツリと時雨ゲ顔よ當つて参りまする誠に寒い口で御坐いますが玄關から案内を乞ふことも出來ませんからソーッと勝手口の方へ廻りて門と云ふ標札いあるが玄關から案内を乞ふことも出來ませんよ　女「アーさうでしやつて下さいまし　女「入江の民イ、ヤア少し待つてお出でと形が穢ないから見くびつて早々に物を云ひまして來て見ると御新造い少し血の道と見えまして閫の處へ即功紙を張つて置火燵にあたつて居りまする　女「御新造様へ只今お民が参りまして入江惣左衛門様い此方か御新造様ホ一寸御目通りを願ひ度いと云つますから何處から來たと云つて聞きましたら入江の民と申す者だと云ひます　妻「お民が其んお穢ないお形で來たりへ　女「ニーニー最う見る影も御坐いませんよ其うして小さい子供を抱いて居りますよ　妻「旦那様い今晩いお歸りいあるまい一寸逢いふから中の間の方へ、夫よりお前の部屋へでもナニ穢なくッても上げて呉んあ　女「御上げ遊バすのですか何うも穢おう御坐いますよ　妻「穢おくつても貰い私の服違ひの妹だよ　女「オヤヤア左様で御坐いますう夫とい知らずよ失禮を申ーまして何うか御免遊バして

チットモ存じませんもので御坐ますのらサヤで御坐い升か　私い穢い御乞食様だと存じまーたが……貴婦御上り遊バせサア此方へサア此方へ嘸ぞ御寒う御坐いませうよ能く入つしやいましたサア此方へ貴婦サア此方へ御新造様が御逢ひ遊バしますから此方へ御上り遊バせオ、〳〵御可愛ことか坊様で御坐いますうエお坊様オヤ〳〵ヤア好いお子様で御坐いますチーサア此方へ入つしやまし妻「お前お茶を一つ入れて來てお呉れ　女「ハイ妻「イヽヨサア此方へ這入りお面目次第も御坐いません妻「ヤアお前いどの顔でうお關及びでも御坐いませうが心得違ひの半次郎に欺されまして親の家を出まして夫も此の子僧に心を引のされまして親父様よも勘當を受けまする様ホ身の上、其うへ半次郎い昨年の暮から行衛知れずホ成りまして是まで何の音信も御坐いませんから據どころなく横須賀周作と申しまする御家人の宅に厄介よ成つて居ります其の周作の申しますには半次郎は歸らんから旦那を取れの圍ひ者よあれの何のと勸められますけれバタック今出て行けと云ふ挨拶で御坐いますが追ひ出されても外は参る處の無い私で御坐いますから私が嫌だと申しますれバ薄情な人で御坐いますから矣ひ顔を致ーて置いて呉れまする様ホ譯で誠に頼子を遣りますれバ薄情な人でも其の横須賀より外よ居る處い御坐いませんヨモヤ今まで音信い御坐いませんが達者で居りましたら何時か子供もあることで御坐いますから歸つて参りませうかと心得違ひの半次郎ホ引かされて居りまするけれども只今でい改心して最う昨年家を出ます處い恐れ多う御坐いますけれども私い惡いと思召しませうゲ此の子僧を不憫と思召して何卒少々のお貰ぎを願ひ度く出ましたので御坐います何う

か御勘辨遊バしてお貰ぎを願ひます浮世の義理で御坐いますから姉へ悶然とい思ひながらキッパリと理解を下します　妻「貰がれませんよ私しやお前よ金子を遣るとい實へ私の眞實の母上樣に對して出來ないと、お前の母へ深川れ藝者でおかのと云つたもの夫ゐ父上樣ゞ有頂天よあつて兩度迄も失策がありました夫でお前といふ子が出來て又姉のおせいも……娘が出來たから實の母上樣へ嫉妬あゞ遊バさず父上樣へ除け者にして何うやら斯うやら遣つて居たので十八の年にお前へ八ッ姉のおせいへ十だつた夫を氣病にして私の眞實の母上樣へお死れにあつて夫から父上樣も目も當てゝ私に養子をーたのゞ今の惣左衛門どの自分へ隱居して町醫よあり市ヶ谷濱瑠璃坂へ家を開くのもみんあ養子の世話隱居料も月々堅く送つても其の上度々の無心で來にいゝ愛想の盡きゝ程のと、云へゞお前や死んだおせいへ仇敵同士だと私しの母上さまへ恨んで死にました夫れでも屆へ一ッの姉妹でおせいの心得違ひも聞てへ私しへ曉驚しました又た半次郎も放蕩不屆とへ云ひあがら實ゐ話ーも出來ないおせいの跡を慕ひ父上樣を置いて家を出るとへ如何よも白痴如何よ子供があれバと云つて其の半次郎へ人間だ腹が腹だからアゝ云ふ者かと云て母を恨んで云ふのとも不實意とも云ひ樣の無いお前へ人間だと思ふ位ゐ譯お前の父上樣だつて本當に今の惣左衛門にやア無いがお前の事を私しや好氣味だと思ふ位ゐ譯お前の父上樣だつて本當に今の惣左衛門にへどの位ゐ話を燒かしたの知れやアしない去年十一月の十九日に隆慶橋で父上樣が切殺されたの時も瑜祝沙汰の事に付いてへミンナ内の方で民「ハイ〳〵父上樣へ殺されましたか妻「其う云ふ不人情、親の死期を知らないの不孝者め本當に何たる事たらう其の檢視沙汰葬式の入用もミンナ惣左衛門殿ゞ深切ゐして呉れられまーたよ懇ろよ法事供養をなすつて下すつた其上よお前

が此家の敷居を跨いて來て、元姉妹で御坐いますから來ること仕方が無いが金子を用達つて呉れエと云たつて決して貢ぐことへ出來ませんよ其の形へ何んだ其んあ身形をして心がらとへ云ひあがらお前の心うらお前が難澁をするのへ自業自得だゞ其の子供よまで寒いめをさせ餓じい思ひをさせるもミンナお前の心がらじやアへ無いかへ　民「ハイ私へ天の罰と存じますからどの樣あ難儀を致しまーても決して厭ひへ致しません、けれども只何よも知らぬ坊が可愛いさうでと存じますので面目へい顏を拭ひまして出ました譯で御坐います宜しう御坐います何うせ行き立ちませんから最う是迄と存じて居ります御暇を致します　妻「行き立ちませんからと云つて分別も無いことをせずに身を定めんけれバあーりませんよ決して無分別あ事をしてへ往けませんよお前へ憎くつて貸すことへ出來ないけれどゝも何よも知らあい子僧が可愛さうだから是丈の金子を惠んで遣る其代り向後二度と此家の敷居を跨いでお呉で無い私が惣左衛門よ濟せませんらおと、一旦此言へ云ひまーても元々血筋の姉妹で御坐いますから其頃の十兩へ大したもので御坐いますが貯への金子十兩よ單物半天あどを揃へて　妻「是へ詰らぬ物だがお前よへ着せませんよ子供よ着せて遣るのだ又此所ゐ十金ある是へ緣切金で緣切の證據にお前よ上るから持て行きあさい民「ハイ有り難う存じます　妻「臺所の方から出て行きあ内々襖の陰で聽いて居りました女中が涙ゐ隱びまして女「マアちらりと承りましたがお可愛さうで御坐いますから内證で、お色へ黑う御坐いますが召上りますあらま妻「何を女「何をじやア御坐いませんお上げ遊バせよ妻「何の遣つてへ濟みません女「濟まんたつ

て旦那様ハ御存じありませんからふ上げ遊バせ其う云ふ時ハ大變にお助かりにありますから、貴婦少ーお待ち遊バせよ此袋ハ繼が當つて居ても覆れや致ーませんよ、と深切よ米を出ーて呉れ、アノ澤庵も御家へ歸つてから召上れ味噌漬の香の物も持つて入つしやいと深切よーて呉れますから民「誠に御深切樣有り難う存じます女「貴婦本當よ御大事よ遊バせよ、とドッサリ持切れ無い程取揃へて女「貴婦私が脊負せて上げませう民「誠よ御世話樣で御坐います妻「お前其んなよ提げて居けヤアしまい女の力の無いのよ、男でも其んなよ持たされちやア困りますよ女「ナニ些つと御難儀でも向ふへ行つてのらふ樂に成りますから民「左樣あらお姉エ樣御機嫌能う妻「アイ今云ふ通りお民や輕いつみをしたつても夫れで好い譯のものでハありませんよ子供を大事と思ふから早く分別ーて身を立てる事をしあさいよ民「ハイハイ、と子供を敲き附けるが ら出て行きますると臺所まで御新造が見送つて來るお民も後を振り歸りく最う是が顏の見納めと覺悟を極めて出ましたお民ハヤットれ事で米を提げて本妙寺長屋れ橫須賀の內へ歸つて參りまして民「只今周「餘り遲いぢやアありませんのポッポッ降つて來たから案じて居ましたよ何處へ行つてお出あすつたへ民「大きよ遲くなりました少々知己があるから其處へ寄つて無心を云つて參りました周「何ですへ提げて來あすつたのハ民「お米を周「米を呉れたんですか感心よ能く提げて來ましたネエ重う御坐いましたらふ、だが米あんぞを貰つたつて夫で行方が御香々が御坐います周「お香々あんぞハ仕樣が無い米や香々で暮らしが立つものぢやアありません民「茲よ金子が十金御坐います是を拜借致して參りましたからお預り遊バして周「エ、十金あるとコレお琴御新造が一生懸命におつて入らしつて金子を十兩借りて來あすつたとダガラ惡い事を勸めあさるあドウセ本當よ貞節お御心掛けで迚も其う云ふお心よい成れませんから能く厭つてあげあ、と云ふ工合お民ハ不賛意お人と思ひあがらも外に行く處が無いから憂い所を忍んで居りまする其內に又金を使ひ果すサア無くなると出て行けがしよされますから又た子供を抱いて十二月の二日に出ましたがドウモ外よ行く處が無い然れバと云ふて最ふ紀州の屋敷へも行かれずドウ致さうか元と家に素公をーた友藏と云ふ者ハ何處よ居るか屋敷差公でもして居るか知らんドコカ行く筈がへいあるまいか本所の前町の八百屋の亭主ハ深切お人であつたが私ハ碌に口を聞いたことも無いしと子ハ貞つて加賀の吉長屋下へ來るとヒョッと來掛た人が男「ヲイ赤ん坊が泣くぜ民「ハイハイ男「赤ん坊が、と小田原提灯を揚げて見ると垢れた手拭ひを冠せて痩衰へた乳飲子を抱いて細帶をしめ前掛けをしてブルブル慄へて居り升其男ハお民の樣子、子供の爲体を見まして男「アヽ可愛さうお乞食だサア是れハ少しだが上げるよ可愛さうよまだ若いヤ身も子供を持つてるから察しられるドウモ腹からの乞食ぢやア無い子供が泣いて居るので人が側へ來て居おがら下さいと云ふことが云へ無い所ハ新米の乞食と知つて上るのだ民「有り難う〳〵と思ひ掛おい此の鳥目を下さるハ何う云ふ人かと僅か五十か百のものあんどもも後來を見て拜んで居りましたが是ハ通り掛りの人が袖にすがれバ呉れようかと云ふ氣が付たから二人連で話して行く所へ出て民「もし甲「ア、驚いた民「永々連合が遠方へ出て歸りませんに此の乳飲子を持ちまして難儀を致しますからドウゾお貢ぎを願ひます甲「アヽお待ち乞食だ亭主が置去りよーたと、子供のあるのよ氣の毒あアレを遣りあ乙「三十八文、可笑しいナア甲「お遣りく乙「サ是れハ無盡の割返しがあるアレを遣りあ乙「三十八文、無盡の割返しだ民「有り難う存じます甲「オイ一寸好い

（荻江の一節）

器量だせ子供を抱いて居る様子が好いアノ小花が當つた一朱と二百アレを遣んなよ　乙「誰が一朱と二百も乞食に遣る奴があるものか　甲「ソンナ事を云いずよお遣りヨ亭主が置去りにしたと云ふ可愛さうぢやアないかお前い此間女房よ置去りされて半月バかり塞いで病氣におつたぢやアないか　乙「嘘をつけ詰らない事を　甲「お遣りヨ只取つたので全たく授かりものだ　乙「ソレ

彌助に遊び無い樣民「お前ハ彌助ぢやア無いか彌「オ、オ、奥樣か　民「アヽ、爺やア私しやアヽンナニ零落て仕舞ひましたよ　彌「コレヤアヽ赤樣か噂よりヂエ奥樣の事を聞きましたが何處にお出あさるかと思つて市ケ谷の淨瑠璃坂を尋ねましたが知れませんでヂエワシもハア御屋敷い人が代つて御暇になつたから一旦在處へ行つて見たゝが矢張り江戸ナア方が取付き安いかと思つて出て參りました今でハ長者町よ居て日傭を取つて居りましたが貴孃マアそんお乞食までに零落あさるもミンナ殿樣の心得違ひからコンナ事よお成りあさいましたので本當に魂消たヂエ民「アヽ彌助や面目ない事だが是々〳〵だと、身の上を語りまするとアノ橫須賀の野郎サンザ浮次男樣を馬鹿に仕やアがつて錢ゝいかい事取りやがつたまとを知つてる夫を今更ら表に出てを置つもおしよして一年も歸らないとい何んと云ふ譯だか瞶ぞハ心配あさいましたろふナヂ私が橫須賀へ掛合つて貴孃を私の處へ引取つてハ世話致します決して御心配ハ御坐いません　民「誠よ地獄で佛よ逢つた樣お心持が致しますお困らせやしません心配あさいますな　彌「地獄で佛それ程までよ思つて下さるかナヂ御心配御坐いませんと元々田舍堅氣お舊來奉公をして居りましたことで御坐いますから直よ橫須賀の方へ掛合つてお民を引取つて家に置きまするとお云ふ是から半次郎の身の上ハ如何相成りまするハ一息つきまして申上げます

第十四席

山室半次郎ハ家出を致して行衛知れずに相成り貞女のお民ハ乳飲を抱へて難澁を致す所を舊來召使ひましたる彌助と云ふ者がお民を助けて長者町と申しますると大層工面の善い樣で御坐りまするが實ハ貧乏な者が多い所でお民ハ彌助の家へ引取れて參りましたゞ何分よも年寄の事で日傭を取つて日に漸やく八十文も取れバタインタ稼ぎであつたもので迚も暮しが附きませぬソコデ私の在所の方へ行けバ麥飯よ野菜位ゐのことハ出來近所からも送つて呉れるから兎も角も一たび在所の方へ御出あさいと云ふので下總の塚崎村へ引込まするとお話しし縋りまして半次郎ハ上方へ心差して信州路へ參り信州の鳥居峠を越して宮の腰へ來ると峠の央よ數原と申す所があつてお祿樽を捨へて居ります半次郎ハ絹屋と云ふ家に泊りま

召使ひました彌助と云ふ者がお民を助けて長者町の自分の家へ連れて參る長者町とやします
と大層工面の善い樣で御坐りまするが實い貧乏な者が多い所でお民い彌助の家へ引取れて參
りましたゞ何分よも年寄の事で日傭を取つて日に漸やく八十文も取れバタインタ稼さであつた
もので迎も暮しが附きませぬソコデ私の在所の方へ行けバ麥飯よ野菜位ゐのことい出來近所か
らも送つて呉れるから兎も角も一たび在所の方へ御出あさいと云ふので下總の塚崎村へ引込ま
すると不快で御坐りまして永らく逗留致して居ります此所の女房い江戸子で深川八幡の裏門
通りコヽ屋とやして藪人あどが御膳を食べるイキな料理屋で只今あら生粹と云ふ樣な皆な藪人
あどの友達が遊びに參る所其のコヽ屋の娘で道樂で御坐いましたが不圖絹屋喜右衛門に見染ら
れて遂よ女房よ成つて居ましたが所が喜右衛門が亡くなりまして後家で御坐ります半次郎い男
も好し大小を差して形い立派で御坐りますからつひ馳染よ成つて半次郎も此家に居る樣なこと
お相成り丁度三年の間足を留めて居りまするが其内に田舍い物堅いから親類が承知しないアンナ
渡人を引摺込んで居てい家の爲にならぬからで此方に親類も無い身の上と云ふので親類相談の上手切金五十兩を渡す此方い丁度幸ひで御坐
いますから半次郎と二人で上方へ參つて大和郡山へ參つてコヽ屋を便り三角に世帶を持ちまして
て居る半次郎い大小を差してアヤシイベラベラした着物で月額を延バして方々威嚇して放蕩無

（東江の一節）

召使ひました彌助と云ふ者がお民を助けて長者町の自分の家へ連れて參る長者町とやします
と大層工面の善い樣で御坐りまするが實い貧乏な者が多い所でお民い彌助の家へ引取れて參
りましたゞ何分よも年寄の事で日傭を取つて日に漸やく八十文も取れバタインタ稼さであつた
もので迎も暮しが附きませぬソコデ私の在所の方へ行けバ麥飯よ野菜位ゐのことい出來近所か
らも送つて呉れるから兎も角も一たび在所の方へ御出あさいと云ふので下總の塚崎村へ引込ま
すると不快で御坐りまして永らく逗留致して居ります此所の女房い江戸子で深川八幡の裏門
通りコヽ屋とやして藪人あどが御膳を食べるイキな料理屋で只今あら生粹と云ふ樣な皆な藪人
あどの友達が遊びに參る所其のコヽ屋の娘で道樂で御坐いましたが不圖絹屋喜右衛門に見染ら
れて遂よ女房よ成つて居ましたが所が喜右衛門が亡くなりまして後家で御坐ります半次郎い男
も好し大小を差して形い立派で御坐りますからつひ馳染よ成つて半次郎も此家に居る樣なこと
お相成り丁度三年の間足を留めて居りまするが其内に田舍い物堅いから親類が承知しないアンナ
渡人を引摺込んで居てい家の爲にならぬからで此方に親類も無い身の上と云ふので親類相談の上手切金五十兩を渡す此方い丁度幸ひで御坐
いますから半次郎と二人で上方へ參つて大和郡山へ參つてコヽ屋を便り三角に世帶を持ちまして
て居る半次郎い大小を差してアヤシイベラベラした着物で月額を延バして方々威嚇して放蕩無

（東江の一節）

召使ひました彌助と云ふ者がお民を助けて長者町の自分の家へ連れて參る長者町とやします
と大層工面の善い樣で御坐りまするが實い貧乏な者が多い所でお民い彌助の家へ引取れて參
りましたゞ何分よも年寄の事で日傭を取つて日に漸やく八十文も取れバタインタ稼さであつた
もので迎も暮しが附きませぬソコデ私の在所の方へ行けバ麥飯よ野菜位ゐのことい出來近所か
らも送つて呉れるから兎も角も一たび在所の方へ御出あさいと云ふので下總の塚崎村へ引込ま
すると不快で御坐りまして永らく逗留致して居ります此所の女房い江戸子で深川八幡の裏門
通りコヽ屋とやして藪人あどが御膳を食べるイキな料理屋で只今あら生粹と云ふ樣な皆な藪人
あどの友達が遊びに參る所其のコヽ屋の娘で道樂で御坐いましたが不圖絹屋喜右衛門に見染ら
れて遂よ女房よ成つて居ましたが所が喜右衛門が亡くなりまして後家で御坐ります半次郎い男
も好し大小を差して形い立派で御坐りますからつひ馳染よ成つて半次郎も此家に居る樣なこと
お相成り丁度三年の間足を留めて居りまするが其内に田舍い物堅いから親類が承知しないアンナ
渡人を引摺込んで居てい家の爲にならぬからで此方に親類も無い身の上と云ふので親類相談の上手切金五十兩を渡す此方い丁度幸ひで御坐
いますから半次郎と二人で上方へ參つて大和郡山へ參つてコヽ屋を便り三角に世帶を持ちまして
て居る半次郎い大小を差してアヤシイベラベラした着物で月額を延バして方々威嚇して放蕩無

（東江の一節）

召使ひました彌助と云ふ者がお民を助けて長者町の自分の家へ連れて參る長者町とやします
と大層工面の善い樣で御坐りまするが實い貧乏な者が多い所でお民い彌助の家へ引取れて參
りましたゞ何分よも年寄の事で日傭を取つて日に漸やく八十文も取れバタインタ稼さであつた
もので迎も暮しが附きませぬソコデ私の在所の方へ行けバ麥飯よ野菜位ゐのことい出來近所か
らも送つて呉れるから兎も角も一たび在所の方へ御出あさいと云ふので下總の塚崎村へ引込ま
すると不快で御坐りまして永らく逗留致して居ります此所の女房い江戸子で深川八幡の裏門
通りコヽ屋とやして藪人あどが御膳を食べるイキな料理屋で只今あら生粹と云ふ樣な皆な藪人
あどの友達が遊びに參る所其のコヽ屋の娘で道樂で御坐いましたが不圖絹屋喜右衛門に見染ら
れて遂よ女房よ成つて居ましたが所が喜右衛門が亡くなりまして後家で御坐ります半次郎い男
も好し大小を差して形い立派で御坐りますからつひ馳染よ成つて半次郎も此家に居る樣なこと
お相成り丁度三年の間足を留めて居りまするが其内に田舍い物堅いから親類が承知しないアンナ
渡人を引摺込んで居てい家の爲にならぬからで此方に親類も無い身の上と云ふので親類相談の上手切金五十兩を渡す此方い丁度幸ひで御坐
いますから半次郎と二人で上方へ參つて大和郡山へ參つてコヽ屋を便り三角に世帶を持ちまして
て居る半次郎い大小を差してアヤシイベラベラした着物で月額を延バして方々威嚇して放蕩無

（江東の一節）

召使ひました彌助と云ふ者がお民を助けて長者町の自分の家へ連れて參る長者町とやします
と大層工面の善い樣で御坐りまするが實い貧乏な者が多い所でお民い彌助の家へ引取れて參
りましたゞ何分よも年寄の事で日傭を取つて日に漸やく八十文も取れバタインタ稼さであつた
もので迎も暮しが附きませぬソコデ私の在所の方へ行けバ麥飯よ野菜位ゐのことい出來近所か
らも送つて呉れるから兎も角も一たび在所の方へ御出あさいと云ふので下總の塚崎村へ引込ま
すると不快で御坐りまして永らく逗留致して居ります此所の女房い江戸子で深川八幡の裏門
通りコヽ屋とやして藪人あどが御膳を食べるイキな料理屋で只今あら生粹と云ふ樣な皆な藪人
あどの友達が遊びに參る所其のコヽ屋の娘で道樂で御坐いましたが不圖絹屋喜右衛門に見染ら
れて遂よ女房よ成つて居ましたが所が喜右衛門が亡くなりまして後家で御坐ります半次郎い男
も好し大小を差して形い立派で御坐りますからつひ馳染よ成つて半次郎も此家に居る樣なこと
お相成り丁度三年の間足を留めて居りまするが其内に田舍い物堅いから親類が承知しないアンナ
渡人を引摺込んで居てい家の爲にならぬからで此方に親類も無い身の上と云ふので親類相談の上手切金五十兩を渡す此方い丁度幸ひで御坐
いますから半次郎と二人で上方へ參つて大和郡山へ參つてコヽ屋を便り三角に世帶を持ちまして
て居る半次郎い大小を差してアヤシイベラベラした着物で月額を延バして方々威嚇して放蕩無

（江東の一節）

召使ひました彌助と云ふ者がお民を助けて長者町の自分の家へ連れて參る長者町とやします
と大層工面の善い樣で御坐りまするが實い貧乏な者が多い所でお民い彌助の家へ引取れて參
りましたゞ何分よも年寄の事で日傭を取つて日に漸やく八十文も取れバタインタ稼さであつた
もので迎も暮しが附きませぬソコデ私の在所の方へ行けバ麥飯よ野菜位ゐのことい出來近所か
らも送つて呉れるから兎も角も一たび在所の方へ御出あさいと云ふので下總の塚崎村へ引込ま
すると不快で御坐りまして永らく逗留致して居ります此所の女房い江戸子で深川八幡の裏門
通りコヽ屋とやして藪人あどが御膳を食べるイキな料理屋で只今あら生粹と云ふ樣な皆な藪人
あどの友達が遊びに參る所其のコヽ屋の娘で道樂で御坐いましたが不圖絹屋喜右衛門に見染ら
れて遂よ女房よ成つて居ましたが所が喜右衛門が亡くなりまして後家で御坐ります半次郎い男
も好し大小を差して形い立派で御坐りますからつひ馳染よ成つて半次郎も此家に居る樣なこと
お相成り丁度三年の間足を留めて居りまするが其内に田舍い物堅いから親類が承知しないアンナ
渡人を引摺込んで居てい家の爲にならぬからで此方に親類も無い身の上と云ふので親類相談の上手切金五十兩を渡す此方い丁度幸ひで御坐
いますから半次郎と二人で上方へ參つて大和郡山へ參つてコヽ屋を便り三角に世帶を持ちまして
て居る半次郎い大小を差してアヤシイベラベラした着物で月額を延バして方々威嚇して放蕩無

（江東の一節）

召使ひました彌助と云ふ者がお民を助けて長者町の自分の家へ連れて參る長者町とやします
と大層工面の善い樣で御坐りまするが實い貧乏な者が多い所でお民い彌助の家へ引取れて參
りましたゞ何分よも年寄の事で日傭を取つて日に漸やく八十文も取れバタインタ稼さであつた
もので迎も暮しが附きませぬソコデ私の在所の方へ行けバ麥飯よ野菜位ゐのことい出來近所か
らも送つて呉れるから兎も角も一たび在所の方へ御出あさいと云ふので下總の塚崎村へ引込ま
すると不快で御坐りまして永らく逗留致して居ります此所の女房い江戸子で深川八幡の裏門
通りコヽ屋とやして藪人あどが御膳を食べるイキな料理屋で只今あら生粹と云ふ樣な皆な藪人
あどの友達が遊びに參る所其のコヽ屋の娘で道樂で御坐いましたが不圖絹屋喜右衛門に見染ら
れて遂よ女房よ成つて居ましたが所が喜右衛門が亡くなりまして後家で御坐ります半次郎い男
も好し大小を差して形い立派で御坐りますからつひ馳染よ成つて半次郎も此家に居る樣なこと
お相成り丁度三年の間足を留めて居りまするが其内に田舍い物堅いから親類が承知しないアンナ
渡人を引摺込んで居てい家の爲にならぬからで此方に親類も無い身の上と云ふので親類相談の上手切金五十兩を渡す此方い丁度幸ひで御坐
いますから半次郎と二人で上方へ參つて大和郡山へ參つてコヽ屋を便り三角に世帶を持ちまして
て居る半次郎い大小を差してアヤシイベラベラした着物で月額を延バして方々威嚇して放蕩無

（江東の一節）

召使ひました彌助と云ふ者がお民を助けて長者町の自分の家へ連れて參る長者町とやします
と大層工面の善い樣で御坐りまするが實い貧乏な者が多い所でお民い彌助の家へ引取れて參
りましたゞ何分よも年寄の事で日傭を取つて日に漸やく八十文も取れバタインタ稼さであつた
もので迎も暮しが附きませぬソコデ私の在所の方へ行けバ麥飯よ野菜位ゐのことい出來近所か
らも送つて呉れるから兎も角も一たび在所の方へ御出あさいと云ふので下總の塚崎村へ引込ま
すると不快で御坐りまして永らく逗留致して居ります此所の女房い江戸子で深川八幡の裏門
通りコヽ屋とやして藪人あどが御膳を食べるイキな料理屋で只今あら生粹と云ふ樣な皆な藪人
あどの友達が遊びに參る所其のコヽ屋の娘で道樂で御坐いましたが不圖絹屋喜右衛門に見染ら
れて遂よ女房よ成つて居ましたが所が喜右衛門が亡くなりまして後家で御坐ります半次郎い男
も好し大小を差して形い立派で御坐りますからつひ馳染よ成つて半次郎も此家に居る樣なこと
お相成り丁度三年の間足を留めて居りまするが其内に田舍い物堅いから親類が承知しないアンナ
渡人を引摺込んで居てい家の爲にならぬからで此方に親類も無い身の上と云ふので親類相談の上手切金五十兩を渡す此方い丁度幸ひで御坐
いますから半次郎と二人で上方へ參つて大和郡山へ參つてコヽ屋を便り三角に世帶を持ちまして
て居る半次郎い大小を差してアヤシイベラベラした着物で月額を延バして方々威嚇して放蕩無

（江東の一節）

召使ひました彌助と云ふ者がお民を助けて長者町の自分の家へ連れて參る長者町とやします
と大層工面の善い樣で御坐りまするが實い貧乏な者が多い所でお民い彌助の家へ引取れて參
りましたゞ何分よも年寄の事で日傭を取つて日に漸やく八十文も取れバタインタ稼さであつた
もので迎も暮しが附きませぬソコデ私の在所の方へ行けバ麥飯よ野菜位ゐのことい出來近所か
らも送つて呉れるから兎も角も一たび在所の方へ御出あさいと云ふので下總の塚崎村へ引込ま
すると不快で御坐りまして永らく逗留致して居ります此所の女房い江戸子で深川八幡の裏門
通りコヽ屋とやして藪人あどが御膳を食べるイキな料理屋で只今あら生粹と云ふ樣な皆な藪人
あどの友達が遊びに參る所其のコヽ屋の娘で道樂で御坐いましたが不圖絹屋喜右衛門に見染ら
れて遂よ女房よ成つて居ましたが所が喜右衛門が亡くなりまして後家で御坐ります半次郎い男
も好し大小を差して形い立派で御坐りますからつひ馳染よ成つて半次郎も此家に居る樣なこと
お相成り丁度三年の間足を留めて居りまするが其内に田舍い物堅いから親類が承知しないアンナ
渡人を引摺込んで居てい家の爲にならぬからで此方に親類も無い身の上と云ふので親類相談の上手切金五十兩を渡す此方い丁度幸ひで御坐
いますから半次郎と二人で上方へ參つて大和郡山へ參つてコヽ屋を便り三角に世帶を持ちまして
て居る半次郎い大小を差してアヤシイベラベラした着物で月額を延バして方々威嚇して放蕩無

（江東の一節）

召使ひました彌助と云ふ者がお民を助けて長者町の自分の家へ連れて參る長者町とやします
と大層工面の善い樣で御坐りまするが實い貧乏な者が多い所でお民い彌助の家へ引取れて參
りましたゞ何分よも年寄の事で日傭を取つて日に漸やく八十文も取れバタインタ稼さであつた
もので迎も暮しが附きませぬソコデ私の在所の方へ行けバ麥飯よ野菜位ゐのことい出來近所か
らも送つて呉れるから兎も角も一たび在所の方へ御出あさいと云ふので下總の塚崎村へ引込ま
すると不快で御坐りまして永らく逗留致して居ります此所の女房い江戸子で深川八幡の裏門
通りコヽ屋とやして藪人あどが御膳を食べるイキな料理屋で只今あら生粹と云ふ樣な皆な藪人
あどの友達が遊びに參る所其のコヽ屋の娘で道樂で御坐いましたが不圖絹屋喜右衛門に見染ら
れて遂よ女房よ成つて居ましたが所が喜右衛門が亡くなりまして後家で御坐ります半次郎い男
も好し大小を差して形い立派で御坐りますからつひ馳染よ成つて半次郎も此家に居る樣なこと
お相成り丁度三年の間足を留めて居りまするが其内に田舍い物堅いから親類が承知しないアンナ
渡人を引摺込んで居てい家の爲にならぬからで此方に親類も無い身の上と云ふので親類相談の上手切金五十兩を渡す此方い丁度幸ひで御坐
いますから半次郎と二人で上方へ參つて大和郡山へ參つてコヽ屋を便り三角に世帶を持ちまして
て居る半次郎い大小を差してアヤシイベラベラした着物で月額を延バして方々威嚇して放蕩無

頼をやりまする斯くて五年立ちまするとお半次郎ハ二十七歳で絹ハ二十八歳で半次郎よりハ一ツまさつて居りまするドウシテ半次郎ハ男が好いから若く見え又た弟亭主ハ可愛いもので御坐りますからお絹ハツヲイ座敷を勤めて半次郎を立て過しに致します、深川ハ夏よあると繁昌で御坐りまして或日お絹が御客を勤めて歸ると半次郎が先きへ歸り隣の家で鍵を貰つて這入り畑草の火を拵らへ御茶を入ず樣とする所へお絹が歸つて參り日傘を抛り出して上つて參り　絹「オヤ御歸りか　半「お歸りかぢやアチーふざけるあエ　絹「ナンダチーそんなよ腹を立つちやあイケないよ夕ハ御座敷が遅くなつたから泊つたのだよ　半「夕ハ泊つたと云ふ挨拶ハ無いぢやア無いか女房が稼いで亭主を過すと云ふので鼻にブラサゲやがつてサウ姉エ振て居やアがるのが癪飛よ障らア　絹　姉エ振も何もしないが據無い御客があつて泊つたのよ今日も連れて行くから龜井戸の巴屋へ行けと云ふのだがナンデモと云ふのでさんも清樂も附いて行つたの私よも何でもと云ふのだが絹ハ引けても歸りなすと云ふと手前の樣な亭主孝行ハ無いと云ふのさ夫でも歸らうと思つたがドウしても歸れないコサ屋でも世話になるし梅本でもコウヤツテ稼ぐものだから引付けて呼ぶと云つて呉れるから義理で仕方なく泊つたのだよ　半「甘く云ふせ女房に稼がせる上ハ些と位ハオカシイ事があたつて夫をナンナン焼く譯ぢやア無いが餘り心持ちが善く無いやサ亭主が歸つて見ると家に錠が下りて居て家の中が黴つ臭せエ鼠入らずを開けて見ると香物が黴びて居るし火を起さうと思つても夕方で何所にあるか分りやしない　絹「そんなよ腹をお立ちで無いよ　半「イクラ祝儀を貰つて來たのだケ無いよ直ぐよ廣げて困るぢや無いかイクラ廣げても夫丈けだよ　半「餘りクイレタ客でも無いおぢや無いか　絹「ホヽヽヽ揃ひと云つて帷子の揃ひが出來る筈だが其御客ハ松平大和守樣の家來で福永とか何とか云ふ大層金が有るのだよ毎でも附いて來る士が大和守の來家で千石から取つて居る福永の絹「アヽそうだよ半「エーアレが遊んだとマダ泊つてるか　絹「イヽエ巴屋へ行つたの羽織衆が六人娘が四人附いて半「夫ぢやア巴屋へ行つてるの　絹「今頃行くだらうよ半「船でい遅いあア　絹「ナンでも仙を流して行くと云ふ事だつたよ半「夫ハ幸ひだ其の福永と云ふのハ色の黒い大きな男だらふ　絹「お前能く知つてるチエ半次郎ハ福永と聞いて何か心よ點頭さぬがら　半「少し譯があつて知つてるのだが夫じやア手前を呼んだのだあア何かオカシイ事を云つたかへ　絹「アノ米吉よ岡惚をして居るのだがコウイ人だから嫌がるのだよ　半「エー其福永よ一寸逢ひ度いから何でも紋付の着物でさへありやア善いから出して呉んあ　絹「紋付の着物だつて有りやし無いよ　半「無いとア無い　絹「何よも無いよ着てる浴衣丈で半「是丈かア是ハ臭くつて　絹「ダガラ洗つて上るのだアチ着物を拵へたつて無くあすのだから仕方が無いよアノ藍の縞の　半「アリア不体裁だ何でも紋付なら善いから　絹「イケないよ　半「何でも善いから絹「有りアしませぬよ　半「羽二重の紋付があるだらふ　絹「アリヤ汗よあつたから洗いふと思ツて解さつばあしよあつてるもの　半「ナニ知れやしないドウカコウカ食ツ附いてるたらふ　絹「ダツテ折り目が　半「イヽエ善いから出せチー　絹「見ツとも無いべラベラしてイケないよアラ捜したチ　半「帶があるだらふ　絹「イケないチー仕樣が無いチー多にあつて帶が穢れたつてイケないから私が縫ツといたものを　半「ナニ善いよ〳〵中々氣が利いてるハ黒羽二重の紋付に琥珀の帶善いだらふ　絹「オカシイヨ袖口が　半「善いヨサアア行かふと云ふので直ぐに支度を致して龜井戸の巴

屋へ参りまそる餘り早く行つてもイカぬと思ひまそるから時間を計つて夕景ぉ参る其内に空ハ
一面ぇ雲が出て降催し半「ハイ御免男「入らつーやいまー　半「當家へ福永と云ふ者が参つてるか
男「エー如何で御坐いましたか　半「梅本から船が二艘來てるから急度居るたらふ今ハ知らぬが元
ハ大和守の家來で千石以上取つた者だト云ふ所が半次郎の風体が悪いから若い衆が驚いて帳場
へ参り　男「親方只今月額をハヤして長いのを差した奴ゲ來て福永居るかと云ふのだがドウモ月
額を長くしてナンダか樣子の悪い奴でそゲドウしませう　亭「入らつしやいませぬと云ふが善い亭
ナンと云つて來たへ　男「エー居るとも居ないとも何とも云ずぇ只ヘーッと云つて來たんです
「サゥ云ふ御方ハ御仕が無いと云な氣が利かない人体を見て挨拶をしなくつちやアイケ無いと
やア無いか……　男「エーッヘッヘッヘ　半「ナニを笑うんだ　男「エー只今一寸聞合せましたがサウ
云ふ御方ハ入らつしやいませぬとコウヤと事で　半「ナンダ隠そおチヤント船が二艘着いてるぢ
やア無いか……　男「エーッヘッヘッヘ　半「ナニを笑やがる　男「エー
ズンズン上つて明けるからサゥ思へ　男「ヘー少々御待おそつて下さい……親方何も彼も知つて
るのらイケませぬ隠そおら上つて明けると云ひまそ　亭「困るあア方々問合せたら入らつちやい
ましたと云へ　男「間が悪う御坐いまそチー……ヘーッヘッヘ　半「ナンダ、イヤニ笑やがる　男「エー
私ハ存じませんだつたが女中ぇ聞きましたらぬが藝者衆が附いて廣間ぇ御出でだとヤと事で御坐いまそう　半
「何方樣でも善い一寸山室が面會致し度いと云と云へ折角の興をサマして恐入るが拜顏を得た
いと云へヨ早くサゥ云へヨ　男「ヘー　半「ナニー　男「宜う御坐いまそ只今……モシ只今是々の者が

來て福永に面會致し度い談判ヤし度いことがある早くサゥ云へヨと云ふのだが餘程邪氣味の惡
い奴でそ　五「居ないと云へバ善いのぇ　男「所がイケ無い船が二艘あるから來てるぇ相違無いモシ
隱そならガラガラ明けると云ふのでモシ上つて來てスッパ抜でもそるとイケませぬから　五「ソ
レヂヤア大夫樣ぇ伺つて見るからと云ふので是から藝者衆を以て聞くと福「誰が來た〳〵　五「エ
ーナニ山室とかヤしまーた福山室とナンダカ聞いた樣だが誰だ知らぬ　五「大夫樣ヤし上まそ私
の考でハナニカ斯う云ふ御席柄で無けれバ御目通りが出來ませぬメッタに大夫樣の御側に出た
ことの無い方が御目通りを得たいと云ふのでハ御坐いまそまいか一寸私の鑑定でハシャレもん
の樣で月頭を長く延し紋付の着物ぇ長いのを差して威嚇したのハ餘程シャレものでせう藝者衆
ぇ寄つて頬ぺたをツヽいたりして遊バふぢやアありませぬか　福「ソリヤ善からふ此方へ呼ぶが
善いと云ふのでドウ仕樣コウ仕樣と耳コスリをして居りましたが其頃の藝者衆の裝ハ綱ぇ深
川勇みハ神田と云ふ通り深川の藝者衆ハ絽の單物でも縮緬の浴衣でも決して肌襦袢を着ないの
が自慢で汗ぇなると直ぐぇ脱いで着換へると云ふので只今の樣なものでハありませぬ又鉾など
も立派なこと長さ一尺巾八分もあつて狹い路次へハ這入られぬから首を横にして這入る樣で御
坐いまそと若い藝者衆ハハサミ帶タヽミ帶などゝヤして緋鹿の子の裂を中へ挿んでタラリと下る
のが自慢白粉ハと云ふと極く薄く叩いた樣に着くか着かぬか分らぬ位ゐ其藝者衆から娘分から
幇間衆がズーッと並んで居る所へ半次郎ハ引つ解きの單物のなりで上つて參り　半「イヤ福永氏
誠に久々と云ハれて福永ハ驚き致しました暫らく立つて忘れて仕舞つた所へ半次郎が來ると
ハドウ云ふことかと福永ハ年ハ取り身拵ハあり今が分別盛りで御坐りまそから　福「イヤコレハ

誰かと思つたら山室氏誠に計らぬ所で御目通りイザ此方へ御這入り　半「ドウモ久しう田舎へ参り山の中ゟ身を隠して居つたが故郷忘じ難き譬へで此頃此方へ歸つて久々で府内を見ました所が御案内の通り家ゐ赤の他人バかりで尋ねることも出來ず外ゟ是ぞと云ふ親類も無いから今で無縁無住の浪人で致し方が無いて斯様な席へ参つてゐ相濟まぬが實ゐ夕べ手前家内の絹がコチ屋で御目通りを致し度いと云ふからソレゐ懐かしいドウカ御目通りを致し度いと云ふので實ゐ参つた譯でげそ」福「誠ゟ思ひ掛ない所でそれぢやア御絹の速合うへ」半「サウでそと雖「オヤマアサウ兼て噂に聞いて居たんでヒサア御這入りなさいよ」半「皆さん毎度家内が御贔負ゟなり色々御心切に引付けて戴いて手前ゐ噂ア の稼ぎて漸々饑じく無い様な仕合せ人間も時として斯う云ふ有様になるのゐ殘念でげそ相替らず御盛んで御羨ましいチエ時に福永氏誠とお相濟まんが懇意の好みでドウカ御助け下さい多分の事ゐねだらんから一寸百金拜借いたし度い福「ドウモ貴公ゟ百金を貸す縁が無いから貸せんナア」半「そんな事を云ゐずに貸して下さいよエ、手前の心得違ひとゐ云ひながら斯くなつたのゐ元とゐ尊公の勢じやア無いか、夫れアレから起つたことでアレカラ勘氣を蒙むつたのだナンニモ云ゐ無い貸して下さい縁が有るから頼むのだ縁の無いところへ拵をそげて來る譯ぢやア無い斯様な席を穢して相濟まんが何分行き立たんから已むを得ず参つたヨヲ貸して下さい福永氏　福「ドウモ貴公ゟ百金と云ふ大金を貸ゝ譯ゐあいドウ云ふ縁合か知らんが夫ゐ先々あつた事もあるだらふが此處へ來てアノ事に就いて貸せエと云ゐれる道理ゐあるまい又猶更貸されん所の道理もあるだらふ　半「夫ゐ知つてる道理も心得て居る借りられあい事も知つてるが又尊公から貸して善い道理も知つてるて　福「夫ゐド

ウ云ふ譯で五「太夫様少し、アナタ、お絹さんのお亭主、一寸、手前ゐ初めて毎度お絹さんとゐ御懇意ゟ致しまそが今日ゐドウ云ふ事ゟ仕ませうと御相談をして船を拵らへて來た所で御坐いまそからふ話しなら一寸次の間の方へ　半「ソレハ御心切だがナニモ貴公の言葉添へで無くても貸ゝられる譯があつて來たのだ手前ゐ五長さんか何かゟ絹さんとお懇意に致しまする者で　半「お絹とゐ別懇か知らんが手前ゐ初めて逢つたので手前ゐ斯う云ふ懇意な者を拵へて無心を云ふより外に致し方が無い處で元ゐチエ此の福永大夫の御新造ゐドウモ大變な美人でげしたチエ福「コレ〳〵山室氏詰らんことを　半「ナニ宜いドウモ其美人と云ふゐ無いてチエ……ト云ふ譯で借りる譯ゐ無いと云ゐれるが全く手前ゐアレカラ斯う云ふ身の上ゟ成つたのだ福永氏貸されませんか貸さぬと仰しやつて能いなら尊公のお身に障ることを云ひませうか、ソレアノ二階で尊公と玄龍とお話しが有りまーたチ、アノ時手前ゐ二階から飛び下りて庭先の植込みの中で兩人の談判の事を聞て居ると云ふ譯だ、チエ、ドウモ玄龍ゐ太エ醫者でげそなア　福「オイマア〳〵兎も角も一杯飲みな昔馴染であるから大盃で　半「是ゐ有り難い成丈け美しいアー島吉さんドウモ様子の好い事チエ　島「御戯けで無いよ　半「斯う云ふ美人を左右に置いて御樂しみとゐ實に幸福な事で中々出來ん事でげそ手前の境界ゐ婆アを相手よりアレでも安と心得て大事ゟして居るのでお絹が何とか彼とか云ふからソンナ事を云ふな粗末にいせんからと云つてチエ、とゐ云ふもの、酒より金だから金子の方を先へ一寸拜借福「それじやア少し内證で話を仕様……皆ナ其所ゟ居なイ、エ烟草盆さへあれバ善い誰も來ん方が善い來ちやア往け無いイ、エ太夫が來るなと云つたら來んでも善い山室さへ來れバ能いのだア、大分降つて來た

なア 半「涼しくて宜いが押流を機に降つて来ました……ヱ、誠よ久々で拝顔を得ましたなア 福「コンナ遊んでる所へ来て貴公何んダッテ、アンナ詰らん事と云ふのだ全体己れの事よ就いて金の無心などゝ云へぬ道理だらふじやア無いか 半「何分にも無い所から借りるより外ゐ致方が無いから拝借致し度いと云ふのだが貴公が貸さんなら森庄五郎の一件縦令へ君父の命でも調合のならぬ身の上で毒薬を調合して毒殺の事、殊よ櫨田原で入江を殺害の事も聞いて居たのだ夫を表向にして尊公の玄関で怒鳴つたら千石の家ゐ潰れて仕舞ふだらふコッチゃ猪武者で仕様が無いヂヱ福永氏貸し玉へ 福「遊び過ぎて今ゐ手元よ無いから先づ十金丈け貸さう 半「十金でゐ困るな責て五十両借りやう 福「五十金ゐ出来ない跡から屈ける様よそるから先づ十金持て行きな 半「貸したけれゞ又御出なさい 福「御拂ひ取りだと心得て……ヤヤア望みの通り貸そことゐ善いが少し夫よ付て山室氏君を見込んで頼みがあるがヂヱ今晩懇者などゐ船で帰して仕舞つて君と二人で駕籠でも誂らへて他へ行つても善いから人を省いた所で飲みながら頼みがあるがドウだ山室氏聞いて呉れまいか 半「イヤ夫ゐ険難だ、夫ゐ御免を蒙むる、夫丈けゐ御免だ、淋しい所へ連れ出して……能く芝居あるヂヱ丁度處ゐ田圃中と云ふので松の事と消して無くなる夫ゐ真平御免を蒙むる只拝借さへそれゞ夫で善いのだ其代り決して一言も云ゐんモウ借りれゞ同類だ饒舌れゞ此方の首が飛ぶと云ふ譯サア早く貸して下さい貸し玉へ 福「少し待つてろ福永ゐ金ゐ有つたが出ッぷりが悪るいから廣間の方へ帰つて仕方無く五十金渡しまそると 半「なうョンナ一酷を云つて済まない絹の亭主ゐ斯う放蕩無頼だが又使ひ道よ依つて善い處があるのだドウカ大夫を面白く遊ゞして下さい折角の興を醒まさして相済まんが又時あらゞ此禮をそる時節もあらふ

御免を蒙むる左様おら五「ドウモ何でげそアレゐ 福「アレゐ旗本の次男だが以前からヤンヤヤンで仕様が無い五一ァノ位の薄ッ氣味悪い者ゐ御坐いません何でげそへンでそヂヱ福「マア善いヨ……半次郎ゐドンドン廊下を踏鳴して出て参りまして 半「イヤ大きよ厄介氣の毒だか傘を一本貸して呉れヱ男「へヱ半「一寸傘を一本貸せと云ひますが……イ、ニ何とも云は無いで亭「滅多に貸していゞ往け無いよへンナもすりの様な奴だから印の附いたのを貸そと怖ッかない、無いと云つて断りな男「誠よ御生憎で傘ゐ一本も御坐いませんミンナ御客に貸して仕舞ひましたから 半「ナニ一本もヂヱと無くつて是から出る大勢十何人が船へ行く時にドウする積りだ男「へヱ半「お客が船まで行く時に傘なしでドウして送るか返答しろ男「へヱ、ナニ、夫丈けゐ其の、二三本取つてあるので 半「二三本取つてあるなら其内一本出せサウして御客が船へ行く時ゐ一人船へ載せていゞ又送り一人載せていゞ又送る様よそれゞ善い早く貸せ男「へヱ畏りました亭「ナニを愚頭〳〵してるのだ 男「甘いことを云ひますから叶ひませんナンデも貸さなけりやアならん譯てすが印の無いのゐありませんか亭「仕様が無い誠にお氣の毒だと云つて参りました家の印の附いた傘よ致し度いと存じましたが好いのが御坐いません夜分でげゐ御座いますから蛇の目傘よ致し度いと存じましたが好いのが御坐いません大黒傘へ失禮て御座いますから蛇の目傘よ致し度いと存じましたが好いのが御坐いません夜分でげゐ御ら是で御勘辨を半「蛇の目の傘だとソレハ結構……ナンダ是ゐ丸で破けているぢやア無い何ら

なア　半「涼しくて宜いが押流そ様に陣つて來ました……エ、誠よ久々で拜顏を得ましたなア福「アレ半「コンナ遊んでる所へ來て貴公何んダッテ、アンナ詰らん事と云ふのだ全体己れの事よ就いて金の無心などい云へぬ道理だらふじやア無いか　半「何分にも無い所から借りるより外お致方が無いから拜借致し度いと云ふのだが尊公が貸さんあら森庄五郎の一件縱令へ君父の命でも調合のならぬ身の上で毒藥を調合して毒殺の事も聞いて居たのだ夫を表向にして尊公の玄關で怒鳴つたら千石の家い潰れて仕舞ふだらふコッチい猪武者で仕樣が無いチエ福「永氏貸し玉へ福「遊び過ぎて今い手元よ無いから先づ十金丈け貸さう半「十金でい困る　半「なに責て五十両借りやう福「五十金い出來ない跡から屆ける樣よそるから先づ十金持て行きな　半「貸したけれバ又御出なさい　福「御拂ひ取りだと心得て……ヤヤア望みの通り貸そことい善いが少し夫よ付て山室氏君を見込んで賴みがあるがチエ今晩遊者などい船で歸して仕舞つて君と二人で駕籠でも誂らへて他へ行つても善いから人を省いた所で飲みながら賴みがあるがドウだ山室氏聞いて呉れまいか　半「イヤ夫い險難だ、夫い御免を蒙むる、夫丈けい御免だ、淋しい所へ連れ出して……能く芝居ゐゐるチエ丁度處い田圃中と云ふので松の事と消えて無くなる夫い眞平御免を蒙むる只拜借さへそれバ夫で善いのだ其代り決して一言も云いんモウ借りれバ同類だ饒舌れバ此方の首が飛ぶと云ふ譯サア早く貸して下さい貸し玉へ　福「少し待つてろ福永い金い有つたが出ッぷりが惡るいから廣間の方へ歸つて仕方無く五十金渡しまそると　半「なうミソナ一酷を云つて濟まない絹の亭主い斯う放蕩無頼だが又使ひ道よ依つて善い處があるのだドウカ大夫を面白く遊バして下さい折角の興を醒まさして相濟まんが又時あらバ此禮をそる時節もあらふ

（狩江の一節）

御免を蒙むる左樣ぢら五「ドウモ何でげそアレい福「アレい雇本の次男だが以前からヤンヤンで仕樣が無い五「アノ位の薄ッ氣味惡い者い御坐いません何でげそへエンでそチエ福「マア善いヨ……半次郎いドンドン廊下を踏鳴して出て參りまして　半「イヤ大きよ厄介氣の毒だか傘を一本貸して呉れエ男「ヘエ半「一寸傘を一本貸して呉れエ大夕立よなつて來て傘なしでい歸れチエ男「旦那傘を貸せと云ひますが……イヽエ何とも云は無いで亭「滅多に貸してい往け無いよヘンナもすりの樣な奴だから印の附いたのを貸そと怖ッかない、無いと云つて斷りな男「誠よ御生憎で傘い一本も御坐いません、ミンナ御客に貸して仕舞ひましたから　半「ナニ一本もチエと無くつて是から出る大勢十何人が船へ行く時にドウする積りだ男「ヘエ半「お客が船まで行く時に傘なしでドウして送るか返答しろ男「ヘエ、ナニ、夫丈けい其の、二三本取つてあるので　半「二三本取つてあるなら其内一本出せサウして御客が船へ行く時い一人船へ載せてい又送り一人載せてい又送る樣よそれバ善い早く貸せ男「ヘエ畏りました亭「ナニを愚頭〳〵してるのだ　男「甘いことを云ひますから叶ひませんナンデも貸さなけりやア亭「サウサ其所の棚の上にあつたらふ男「毀れていませそよ　亭「仕樣が無い誠にお氣の毒だと云つてヘエ〳〵謝つて是切りしか御座いませんと云ひな印の附いたのい失禮だから少し破れていいるが蛇の目をと云つて貸せエ男「恐ろしい煤だらけだエヘ、半「早く傘を持つて來い　男「ヘエ持つて參りました家の印の附いた傘い無いでい御座いませんがドウモ當家の印の附いた大黑傘へ失禮て御座いますから蛇の目傘よ致し度いと存じましたが好いのが御坐いません夜分でげら是で御勘辨を半「蛇の目の傘だとソレハ結構……ナンダ是い丸で破けているぢやア無い、

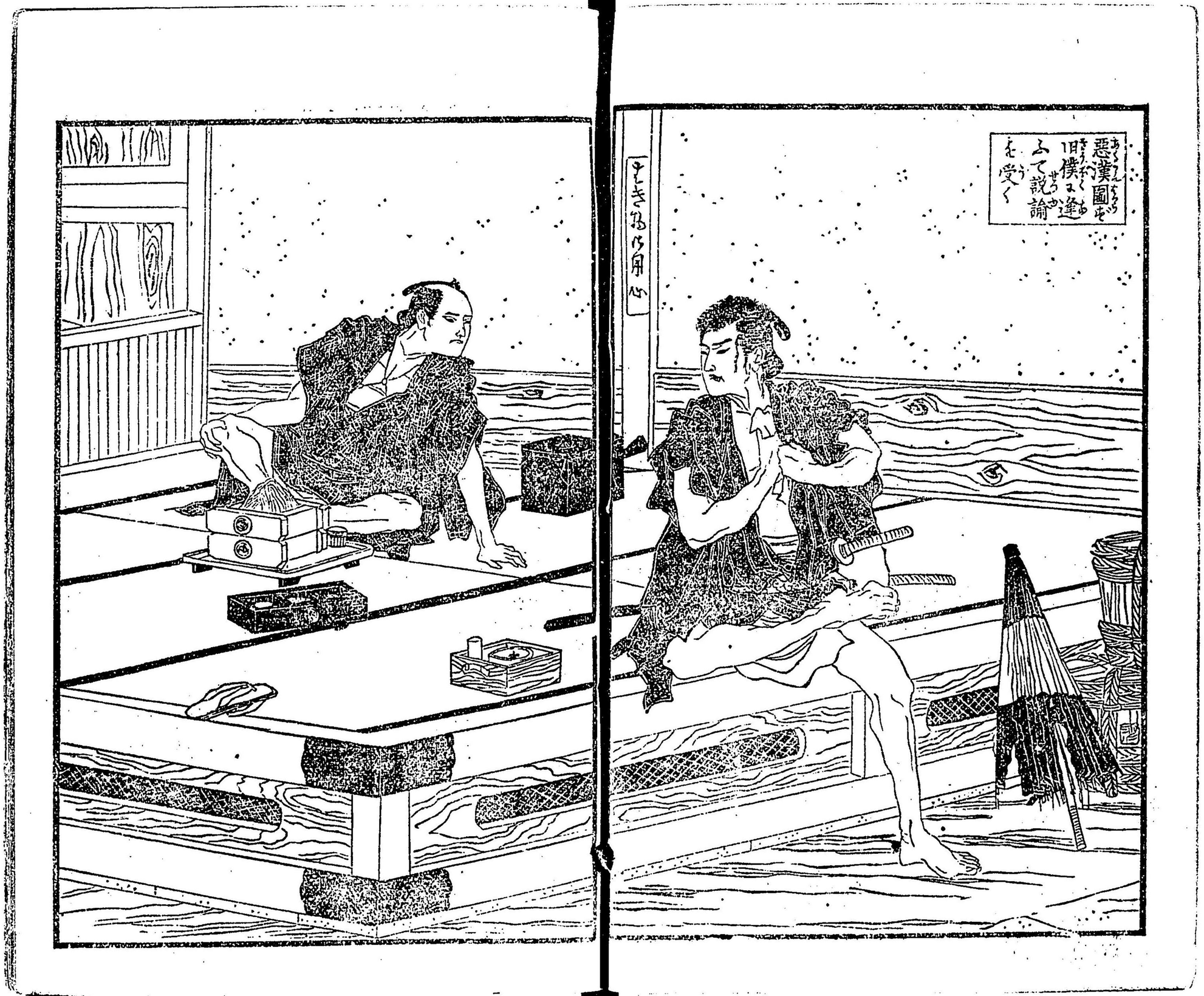
一誠にドウモ半「ドウモぢやア無いドウして斯んなに穴が明いたかナア　男「甘く風が食ひ丸で切抜き繪の様に見えまそナア　半「仕方がチエ差しても差さんても同じ事だ箆棒めエ摑ぎまして尻を掲づてピシヤ〳〵〳〵……天神橋を渡つて通りへ出やうと思つたが横間ー曲つて合羽干場へ掛ると鼻を摘んても知らん様あ眞暗あ晩で御坐り升、ト見ると向ふへピシヤ〳〵〳〵竹子笠を冠り糸捲をハスニ背負ひ弓張提燈を捉げて行く者がある　半「コレ〳〵〳〵何所へ行くか知れぬが一所よ行つて呉れまいか　男「ドウセ彼方へ行きますから　半「深川の三角迄送つて呉れエ　男「私ハ清水町へ參るので深川迄送ることハ出來ません　半「トヤカク云ふあ宥さんぞ此の野郎男ー清水町の者を深川の三角迄送れッて　半「サッサと先きへ立て　男「ナンダカ怖ッか無いナア、コレエ何しやがる、ナンタ、マア馬鹿を遣つてるかコレエ〳〵サア一所に行かうと云ふのでドウシテモ聞入れずに清水町の裏長屋へ引いて參りまそる此所で半次郎がお民よ面會そる所から永正助貞の由緒が相分りますると云ふお話しで御坐いまそ

第十五席

引續きまして山室半次郎ハ龜井戸の巴屋から破れ蛇の目の傘を借りて歸りがけに大夕立に遇ひ錦糸堀に於て彌助とアそ下男に圖らずも出遇ひましたが彌助ハ唯だ主人の了簡が直らんかと思義一途よ田舍堅氣の爺彌「マア兎も角も私が家へお出なそつてエ、此處で話しても駄目だ私が家ハ直き清水町へ此の二月越したからマア宜エ逃げようたつて逃しません兎も角も來てお呉んなさへ何でも私が家へ來て下さへ　半「行きも仕よう所が少し餘儀ない用事で他へ參らなければならんお前よ遇つてハ面目ない實よ顔も合はされない　彌「顔を合されなくつても私ハ何うでも宜いが貴方に逢ハせる人があるからマアお出なさへ、と一生懸命取縋りまして放しませんから止むを得ず彌助と共々仲の橋を渡つて清水町へ參りまそと豆腐屋と鑄掛屋の裏で九尺二間の借家住ゐで御坐いまそ前の處が明地になつて居りまして恰ど羽目板の間よ朝顏がからんで居る雪隱に井溜がありまして井戸ハ前ゐありまそ一番奥の家ハ此處だ半「此處へ轉したのか彌「ヘエマア〳〵お這入り……ヂヤお連れがあるかい　半「ヂ、……家ハ此處だ　彌「ヘエマア〳〵お這入んなさへ……今歸りましたヨ　女「お歸りかへマア嘸ぞ降つてお前困つたらう此方へお這入り……ヂヤお連れがあるかい　半「ヂ、……無暗お突込むナ着物も何もびしよ濡れだと盥があるから足を跣つて上ると煙りかへつた行燈の側に坐つて居りまそが年齡二十四よなりまそ女房お民、東壽郎ハ最う六歳で御坐いまそ見る影もない姿で頭ハ結び髮よ致して插古した柘植の櫛をさしてボロ〳〵致した姿で居る處へ圖らず も半次郎が行合せましたからお民ハ　民「ヂヤ旦那樣どうして爺やアお前よお目よ掛り度いと云ふ御心が届いて今ま錦糸堀でハ目よ掛りましたから無理無体よ引張つて來ました　民「御歸りなさい　半「是れハ何うも　民「何うして貴方でア何處へ被入たので御坐いまそか御手紙の音信もありませんし萬一して旅で病み煩ひでもして御死去遊バしやアしないか然うであれバ御手紙の一本位ハ下さるも同然よ御心配あすつたらうか又若しや荒川で船でも轉覆かへる筈山の中へでも行つて山賊に遇て御怪我でもあるやうな樣あことでもありハしないかと思ひ雨に付け雪よ付け貴方樣のことを片時も忘れたことハ御座いません私しハ是まで爺やアに助けられまして親子共みついて貰つて居りまそ　半「ニ、何ら

も彌助重々何うも相濟まん飛んだ厄介よおつて彌「飛んだ厄介だつて何うも貴方、何處へ行つたダ貴方大小さーて紋付の着物を着て歩行かれる身の上でお可愛相なのい世が世あれバ奥樣若樣とも云われる御兩人い横須賀周作の處よ居てお前樣ア置逃げエーたから彼の薄情あ横須賀だからら出て行けがし又た旦那の取持そるのお女郎になれのと何んでも悪いこと勸めるが斯う云ふ堅い氣象だから義理を立てそんな事をしてい濟まねへと云つていぢめられる辛苦を忍んで加賀樣の言長屋の下で往來の人の袖よ縋り一錢二錢の合力を請ける袖乞ひまでして貴方の御歸へりを待つてお出でなさるとい寔とに情けねエことでお引取り申して下總の大塚村へ引込みまして去年まで居ましたが片田舍も不景氣で何よをしても錢にもならねいから江戸の方が宜からうと思つて又た御二人をお連れ申して來たダガでもマア去年田舍あお出なそつてから江戸へ出ても困りませんで此の二月から私日雇を取つて歩行く中お民樣も内職をなさる若樣も斯う遣つて何うやら斯うやら育てて年い往かねへけれども怜悧の若樣だからお父親樣ア何處へ行つたと物心を知つてから今に歸りまそよヨウ〳〵と云つておだまし申して置きました……若樣那方の御親父樣ダヨ那方顏を知りますまいがお覺えなさいましョ半次郎い我子だから面目なく半「大層成長なつたのう彌「成長なつたもねへものだ斯んな若樣を置いて五六年も手紙一本來さねへでおんて情合のねへ方だ愛想が盡きて貴方の樣お人い少ねエだ半「それい子の可愛くないものいないが何うも脊よ腹い替へられぬよ依つて據どころなく脇へ參つて居つた……お前い顏も知るまいけれども親と思へバこそ手を膝よ突いてナ東壽郎堪忍して吳れ東「阿母樣此の人が坊

の父親樣かへ何處へ行つて居たの半「田舍へ行つて居たの東「阿母さんがエ親父樣が田舍へ行つて仕舞つて然うして歸らないのだから今よ歸つて來るから坊や柔和しくして待つて居るのだよ歸つて來て惡戲をそると親父樣がならんッて、然う云ふかト親父樣の歸る樣に坊い温和しくして待つて居たから歸つて來て又行つていいやだョ彌「それ御覽なさい民「何より親父樣がお歸り遊バすのら温和しくおしョと云ふとどんな無理を言ひましても貴方にお目よ掛り度と見ねて直よ温和しくなりますお歸り遊バしたい幸いひ何卒貴方どの樣ゐも私しが内職しても最う何かの事も馴れましたから爺やァと二人りで、御不自由い御不自由で御坐いまそが、けれどもどの樣よも致ーますのら坊の側に何時までも何卒お在でなそつて、何時お歸り遊バしました半「其處にい種々譯があるので、實よ思ひがけない何よとも何うも縱へ小袖を身に纏つて居ても此の通り給の引解きを着て居る樣な譯で何處と云つて住居も定まらん譯でと云つてまだ歸つて間がないから何處よ居るか尋ね度いと思つたけれども彌助や何かお逢つてもナ金才覺よ出て歸つて來てもこれ丈け才覺ーて來たからこれで身を立て樣とかなんとかでなければ歸れるものでないそれが段〳〵延々よなつて思ひず識らず三五年も斯う遣つて日を送り實お空しく何よも致さんで山を越え川と渡り詰らなく旅をして來たので實に面目次第もない彌「貴方金才覺よ行つて金エ拵らへて歸つて奥樣若樣も倶よ何うか身を立て樣と云ふ思召しならそれい善エ、善エけれども歸つてお出でなそつてから若樣が何處ゐ居るか奥樣い何處に居るかと云つて横須賀の家へでも尋ねたかへ半「實い横須賀の家へも尋ね度けれども置さッバなしにしたものだから金がなければ顏出しも出來んで彌「縱へ金がなくも間が悪くも女房い何うしたか子い何うして居るか案じれ


悪漢圖を旧僕は逢ふて説諭を受く
主君為乃用心

ゞ尋ねなければならん貴方まだお心が直らぬよ進ひない先刻彼處で遇つた時年寄つた私よ深川の三角まで送れ清水町へ歸るたつて歸さん送らんと打切ッちまふ抔と云つて彼れい貴方宜しくねへまだ了簡の直らねエ證據だ深川の三角まで送れなんてそんな亂暴なことといねへ貴方の心が直つたとい思われねエ貴方何時までも然う云ふ心で居れゞ貴方に情を立てゝ居る奥樣や若樣の爲にならない貴方迚も他よ仕樣いない最う家も皆な赤の他人よなつて仕舞つたから山宝と云ふ譯よも往かんから貴方武家奉公でもそるか少し手も書きなさるから何んな町人よなつても商あひしてもお民樣や若樣を育てねへてエー理屈いねへ何處へも行かずお私なんでも歡へるだ私貴方に出來る樣なことい世間樣へ顏んでそるから何卒此處よ居てお呉んなせへ流石の半次郎も實に面目なく　半「イヤ實に改心致したすつぱり改心致した證據い長らく浪人して食いずよ居ても大小い失いない何うだ誠に此の脇差い手前も知つて居る勘當の時親母樣が此れい親父樣が御差し遊ゞした物だと云つて紀念に下すつた、錆の來ぬ樣魂を磨けと云ふ譯で下つた永正助定此脇差を失おいぬ子小柄を一本賣たつて左近太郎宗吉で赤銅七子絹に胡蝶の付た後藤祐乘だから小柄一本賣ても小遣になるけれども食ずに居てうかして己れも人よなり度了見があるので縱令山室の家が代替りよなつても已れいおれで何かして身を立マア坊にもノチ大小を差せる樣にし度と思へゞこそ失いぬ已れが死でも東壽郎にい遣り度ジヤアないか東「ジヤア坊に呉れるのかへ半居る　半「マア〳〵逢つたからよい自分の身の定る少し見當もおるから北方へ賴み込で武家奉行でもして身が立ゞ箇樣なる裏家住居いさせて置ぬどの樣よも致すがそれまでい　彌「成程これい

（狐江の一節）　百五十五

立派なものだ　半「立派だつて湯頭い赤銅七子、艮作た色盡で以て野莪よ蟲の出て居るこれい連乘の作錺い伏見の乘家山水お釣人物中々涙人者の插と脇差でないが親母樣の紀念で、忘やアしない　彌「それで貴方御寺樣へ御墓參りよお出なそつたかへ　半「イヤまだ締つた許りで間がないからお參り處でない身が立てからと思つて何い扨置き、幸ひ茲に持合があるがこれい長らく厄介になつた禮に置て行から小遣にして、と彼の龜井戸の巴屋で福永を强迫て取た五十兩の内二十兩出した惡黨でもよく〳〵で　彌「二十兩これいマア奥樣若樣お悅びなさい　半「旅稼ぎをしてこれ丈い何か逢て遣り度と思つて實よ心にかけて殘して來たのだから小遣ひにして呉れ　彌「これでマア安心だ其う云ふ心になつたならマア助かりますぞ私い何うでも搆いぬがチエこれから寒さの取付よなつても世間へ出られそへのかお民樣と東壽郎の着物も出來まそ　彌「私見立て買て來まそ民「やんとうよ爺ヤこんな嬉しいことといないヨ東壽郎の着物も出來まそ　半「居るよい居るが少しも早く身を立てなければならんが少し類置たこともあるし其方の手蔓で武家奉公をし度が殊によると九州邊の大名へ抱へられるかも知れん　彌「マア然うなれゞ縱令御高い少くも大小差て步行る然うでなければ御先祖樣へ濟ぬ　半「時よ艮酒を一杯、氣の毒だが　彌「まだ酒を飮みまそかへ　半「面目なくつて眞面目で居相いから　彌「宜敷私貰で、澤山い往けませんヨ、と酒肴を誂らへ彼の邊でい結好な料理と仕させんけれども少し取つて來ましてい親子三人睦まじく盃を取換せ寢ぬお民も異ば悅ひまして此晩い更ゝと雨い降し彌助の家へ泊りまじたが翌朝早く出ました切りで絕て參

ゞ尋ねなければならん貴方まだお心が直らぬよ違ひない先刻彼處で遇つた時年寄つた私よ深皿の三角まで送れ清水町へ歸るたつて歸さん送らんと打切ッちまふ抔と云つて彼れい貴方宜しくねへまだ了簡の直らねエ證據だ深川の三角まで送れなんてそんな亂暴なことといねへ貴方の心が直つたとい思われねエ貴方何時までも然う云ふ心で居れゞ貴方に情を立てゝ居る奥樣や若樣のためにならない貴方迚も他よ仕樣のない最う家も皆な赤の他人よなつて仕舞つたから山宝と云ふ譯よも往かんから貴方武家奉公でもそるか少し手も書きなさるから何んな町人よなつても商ひしてもお民樣や若樣を育てねへてエー理屈のねへ何處へも行かずお私なんでも歿へるだし私貴方に出來る樣なことい世間樣へ頼んでそるから何卒此處よ居てお呉んなせへ流石の半次郎も實に面目なく　半「イヤ實に改心致しましたすつぱり改心致した證據い長らく浪人して食いずよ居ても大小い失いない何うだ誠に此の脇差い手前も知つて居る勘當の時親母樣が此れい親父樣が御差し遊ゞした物だと云つて紀念に下すつた、錆の來ぬ樣魂を磨けと云ふ譯で下つた永正助定此脇差を失おいぬ子小抔を一本賣たつて左近太郎宗吉で赤銅七子鍔に胡蝶の付た後藤祐乘だから小抔一本賣ても小遣になるけれども食ずに居てもうかして已れも人よなり度了見があるので縱令山室の家が代替りよなつても已れいおれで何うかして身を立ゞ坊にもノチ大小を差せる樣にし度と思へゞこそ失いぬ已れが死でも東藏郎に遣り度ジヤアないか東「ジヤア坊に呉れるのかへ半「ウンお前よ　東「ジヤア坊い温和しくして居る　半「ゞア〳〵逢つたからよい自分の身の定る少し見當もおるから其方へ頼み込で武家奉行でもして身が立ゞ簡樣なる裏家住居いさせて置ぬどの樣よも致すがそれまでい　彌「成程これい

ハア感心した此の脇差貴方が失さねへてエのいこれい立派なものだ　半「立派だつて淵頭い赤銅七子長作だ色書で以て野萩よ蟲の出て居るこれい連乘の作錺い伏見の乘家山水ゟ釣人物中々派人者の描そ脇差でいないが親母樣の紀念で、忘やアしない　彌「それで貴方御寺樣へ御墓參りよ出なそつたかへ　半「イヤまだ歸つた許りで問がないからお參り處でない身が立てからし度と思つて何い扨置き、幸ひ茲に持合があるがこれい長らく厄介になつた禮に置て行から小遣にして、と彼の龜井戸の巴屋で福永を强迫て取た五十兩の内二十兩出した惡黨でもよく〳〵で　彌「二十兩これいゞア奥樣若樣お悅びなさい　半「旅稼ぎをしてこれ丈い何か逢て遣り度と思つて實よ心にかけて殘して來たのだから小遣にして呉れ　彌「これでゞア安心だ其う云ふ心になつたならゞア助かりますず私い何うでも構いぬがチエこれから寒さの取付よなつても世間へ出られ子へかお民樣と東藏郎の着物も出來まセ　彌「私見立て買て來まそ……ゞア貴方何處へも行かず此處よお居でなさへヨ東「居るよい居るが少しも早く身を立てなければならんが少し賴置たこともあるし其方の手蔓で武家奉公をし度が殊によると九州邊の大名へ抱へられるかも知れん　彌「ゞア然うなれゞ繼介御高い少くも大小差て歩行る然うでなければゞ御先祖樣へ濟ぬ　半「時よ良酒を一杯、氣の毒だがこれから寒さの取付よなつても世間へ出られ子へ面目でい居悟いから　彌「宜敷私買て、澤山い往けゞ理とい往さませんけれども少し取つて來まして親子三人睦ましく盃を取換せ貰わお民も真よ悅びまして此晩い迎ものこと、雨い降し彌助の家へ泊りましたが翌朝早く出ました掛りで鋤て參

りませんことでさァ心配致しまして 民「どう遊バしたかお身が立つたら入つしやるか何かの事お手筈が違つて間が悪いと思召し被入らないのか何処ゟ被入るか爺ァお前ゟ尋ね申したかへ三角とお云ジャアおいかへ 彌「三角だつて人の家ゟ厄介ゟあつて居る話しだから何処ゟ居るか金子置いて行く了見にあつたから安心して居ましたが私行つて探して見様、と三角へ行つて心配して尋ねても何うも分りません歸つて来てい彼れの是れのと申して其うち七月となりまそ七月二十一日にい中村秀鶴が柳島の妙見様へ日参して満願の日歸り掛けで定九郎の衣裝取の武士の姿を見て拵らへると云ふ是れい秀鶴日記ゟもありまして皆さん御案内のお話しで御坐いまそが忠臣藏の狂言い東京で初めましたのい寛延二年ゟ木挽町森田座で初めて山本京四郎と云ふ役者が由良之助ゟなりまして大した繁昌で大入ゟ付き直ぐ同年五月五日ゟ葺屋町の市村座で開場致しまして其時由良之助い坂東彦三郎でこれも大して當りましたから續いて又た六月十六日開場で堺町の中村座で由良之助を澤村長十郎が致しました是れも大して當りまして夫れから引續きまして忠臣藏の狂言を致すよい能い役者い致しません ふ少し芝居が這入らぬと忠臣藏の狂言を致せば入りの落ることがあいと云で大概い相中上分抔が致しました衣裝い至つて不粋で山裕と云ふ立付を穿き大縞のどてらを着て山岡頭巾で山刀を差して、チィ鈴さん待ねへ、と不粋あこと山賊の様な拵らへでありました中村仲藏い明和三年八月頭日ゟ初日で市村座で忠臣藏狂言の時定九郎の初役これが出世の初めで御坐いまして仲藏い慥か此年三十歳と申しました天明七年に中山小十郎と云ふ親の名を相續致しまして定九郎を八度致して定九郎の役よて座頭になりましたと申しまそ初めて定九郎の役をし

ましたが如何よも衣裳取が氣お入らぬどうかして良い工風いないか出世の小口どうかヤンヤと一ッ當度ものと後に銘人になります人丈け心掛ける處が違つたもので毎日柳島の妙見様へ參詣致しまして其頃ろ上方ゟい能勢參りと云ふが流行ましてて江戸にい柳島妙見ゟ藝人抔が參詣致しますとが流行つて御圖抔も二度許り取つたことが秀鶴日記ゟ出て居ります二十一日滿願の日秀「最う今日い滿願だが良い工風も得ないが此間の御圖の様子でい何だらうかと考がへながら住吉町の宅へ歸りまそまで狂言ごと抔考がへまそよい静かな處が宜しいから合羽干場へ出まして錦糸堀へ掛りますと突然降り出して來ました車軸と流す様なる雨で、ドウードッと云ふ雨、あの邊い淋敷處で前ゟい往來も稀れで御坐いまそ雨具がありません一生懸命駈出しましたらちツブ濡にありまして仕方がないから仲の橋へ掛る一方い長崎町一方い清水町先い南割下水へ出ます處で雨を凌ぐ場處もありません一方い清水町の曲り角に今い菊屋と云ふ料理屋ゟなつて居りまそが前ゟい美濃屋と云ふ蕎麥屋で其の蕎麥屋へ駈込みました 秀「何うぞ一ッかけと一杯おくんなさい 男「ハー此方等へゟ掛けおさいも頻りゟ蕎麥を喫べて居りまーた、處へ駈込んで傘を借りやうと思ふと彌助い留守で番傘ばかり中で雨ゟ降られ清水町の彌助の宅へ駈込んで傘が御坐いまそが 半「ジャアそれを、と前ゟも申上まして傘がない 民「先達て貴方が置て被入つた傘がしたが差ても差なくても宜い様な傘で頭からツブ濡にあつてピショ〳〵出て行たが耐へられないから美濃屋へ駈込み半「蕎麥ア一杯呉ゐ、と傘い疊みましたが雨の雫を絞つて上り端へ立かけて大小に黒羽二重の引解の着物茶の琥珀の帶で福草履を脊中へ挿して居るこれを中村仲藏が見

まそよびしよ濡になつた羽二重の單物だから身体よ纏付きまして色い抜ける程白いので眉の濃い顔にい青髭が生え月代い森の様で月代や胸毛の處より雨の雫が流れるのい中村秀鶴の鼻の先で　秀「これゞ是れ〳〵兎も角も五萬三千石の御家で役柄をも勤めた人の子ゞ放蕩無頼になつたと云うから少しいかつい様だがこれでそれゞ差つかへない江戸の士だからナ何うも宜いこれぞこれ〳〵　半「ナンダ〳〵これの面を見てこれゞ〳〵てナンダ　秀「へエ艮いお濕りよなりまーた　半「降て來て大きよ暑さが凌げるナ　秀　どうもびつしよりづぶ濡れで仕様がねへから此處へ駈込んだ　秀「私も此處へ駈込みました艮いお身姿でゲスナ　半「ナニ　秀「ナニ薄氣味の悪い奴だナ何うせ碌〳〵姿ジヤアねへ浪人者だからテ　秀「琥珀でゲスカナ茶色い宜數う御坐いますが御召しい濡れて居て發揮分りませんが矢張り羽二重でゲスカナ　半「これ〳〵失禮千萬ナ人の身姿を見廻して何だ手前古着屋カ　秀「左樣でい御坐いませう　半「これ〳〵武士を嘲弄していゝ月代い何うも餘ッ程生えましたでゲセウナ　秀「お色が眞白往かん人の姿を見て月代に物差を當て見るものがあるカ　秀「何分御坐いませう　半「御鞘い朧色でゲスカ御柄の糸い矢張り茶でゲスカで被入しやるに濡れて被入しやる處い何うも圖にもかけない様で半「ヨセ荒を見るナ、ヨセヨ秀「何うも殿樣恐れ入りますがお傘を拜見致し度半「嘲弄していゝ往かん傘を見られて溜るものか借りものだ　秀「少々拜見失禮でゲスガ是れでゲスカナアー宜いお傘で是れへイ半「これ〳〵馬鹿よしていゝ往かん破れ傘で仕樣がねへのだ戲けちやア往けねへ

秀鶴い傘を手よ取りまして秀「斯う何うも穴を明け樣とーても往く〳〵譯でない半「こんお傘を蔑視て貸したのだ秀「斯う云ふ傘よ貸したのい心あつて貸したのですナ半「然うヨ貸ねへての無理に借りて來たのだ秀「恐入りましたナ半「手前眉がねへアねへ人の婆ア見て芝居で遣ヤヤア往け〳〵ねへせ秀「エー有難う今日滿願で妙見樣の御利益で半「ナニヲ秀「へイナニこれで最うびしよ濡よなつて歸つても宜しいので、と秀鶴い悅びましてつぶ濡ながら歸りました此方等い蕎麥を喫つて何時まで待つても雨い止みません少ー小降りふなつて來た樣子出かけ樣と代を拂つてどうせ濡ると笠を提てビショ〳〵錦糸堀の方へ參らうとする一際雨が烈しく簷を束ねてつく許りドウーザー〳〵と火燈し頃がら〳〵と急よ雷鳴が轟きまして稻光りがピカ〳〵と致す半次郎い惡黨でい御坐いますから、ト見まするとガラ〳〵ピシヤアと音が聞えます橋の方へ掛りまそと五六町先へ落雷致しが徳川時分よい御坐いました橋番小屋と云ふものが仲の橋の際にありまして掛茶屋で草履草鞋を賣り或い駄菓子のお市みしんがう豆捻麩のくそ抔菓子臺の上へ並べ其他皿へ鰯の足抔がありまして摺煎餅の上に薩摩扇抔つるしてありまして蠅のたからぬ樣ふーてありますと其處へガラ〳〵と飛込んだから驚きまして雷樣が駈込んだかと思つて　婆「ハア恟りしたピカと光つた處で驚きました何方等の御方で御坐いますか　半「途中で降られて困るから飛込んだが少し休まして呉んナ婆「それいお困りで此方等で休んで御出でなさい　半「茶を一杯呉んナ茶代い多分ふ取らせるからナ何うも氣候が惡イいされだから降ると思つた　婆「此方等へお上りあさい其處よ番手柚に水が御坐いまそから半「少しコウ乾いた手掛でも雑巾でも貸ーて呉んナ婆「ハイ此處に御坐います

とこれのら足を洗つて上りまして膝へ單物が濡て居て纏付いて往かんから絞りおがら半「アヽ何うも弱つた驚いたヲ婆「貴方雷様ア御嫌ひで何處へ落るか知れん薄氣味が悪いからヲ婆「やんとうに怖いことで貴方綾くりお休みおすつて……お秋お茶を秋一「ヘイ、と木綿の單物ゑ前掛で襷を取つてお秋と云ふ二十二歳よおる娘「お茶を召上りませとお盆ゑ載せて出すを然見ると實に嫖致よしの娘　半「阿母お前の娘か婆「ハイ娘で半「いヽ嫖致だヲ婆「姿い大きう御坐いますグチバアで御坐いまして半「どうだイ少し許り手當を遣るが私ゑ呉れんかへ婆「御串戯を被仰い一人娘で皆さんが隨分斯んお眞似をして居るよりも娘を當ゑ斯うしたら宜からうと祌仰る方も御坐いますがまさか箇様お駄菓子を賣つて居ても當然の亭主を持せ度と思ひますが株家督ゐありませんし養子ゐあるものもありませんが男の子ゐれば宜いゑ何うも嫁付る譯にい往きませんで何んお方でも養子を仕度と思つて半「いヽ嫖致だ最う一杯茶を呉んおヽと飲み度もおい茶を又た飲みおがら見詰て居る娘ゐ顔を見られるのが耻かしさうゐ茶盆を持て向ふをむきます半「チイ婆アさん婆「ナニヲあさる私の手を押へて何うおさる半「これ娘を貸せ婆「御串戯おさい貴方何を半「静かゐしろ何んで婆「ナニヲヽと云ふ婆アを掛竿よ掛けてわつた細帶を取て巻付け長いのを引抜て聲を立てると切るぞと云ふと婆アゐ腰ゞ抜べタ〳〵ゐおりまして齒の根が合ひません半「これ〳〵娘どうもするのでいない餘り能い女で無理なことを頼むが何うだと娘の袂を押へると云ふ實に非義非道お奴で是から半次郎身の上ゐ天罰を蒙ふりまして既よお上の御手に掛ります偖お話ゐ二ッに分れまして中村仲藏ゐ山室半次郎の姿を見て役者よゐ出方の者にも仕切場の者にも頓と話を致さず内々で半次郎の姿の通りお黒羽二重の羊羹色の引解の單物ゑ茶の琥珀の帶よ蠟色鞘よ茶柄の大小弁に髭も注文致しまして頭から濡て出おけれゞおらんと心得ましてこれだけゐ誂へまして四斗樽に水を一杯張つて揚幕の内へ大きな流しを拵へて置まして手桶に水を二三杯も汲で撒き四斗樽の中へ破れ蛇の目の傘を漬て置まして興市兵衛が舞臺で臺詞を言つて居るうち頭から手桶の水を浴て四斗樽の中に漬てある傘を出して揚幕の内でトン〳〵と叩きますと濡れた蛇の目の傘を半分開いて顔を見せおいで駈出してトン〳〵と駈て來て上手ゐ興市兵衛下手よ就てポンと傘を開くと小一に居る人ゐ頭から水をおびる様になつて居る其水だらけの姿で破れ傘を肩にかけて志賀山流でウーンと興市兵衛を睨みます興市兵衛ゐ反身になつてトンと後へ轉倒と云ふドウモヤンヤと當る了見で遣りました處が親玉ともエライとも何とも見物ゐ一言半句もなく雪の積つた様に肅然としてギヤアとも言ゐない仕方がおい其幕を濟まして矢張り元の山岡頭巾お夜具縮のどてらよんなお背嚊を云ふか知れん是ゐ高飛より外ゐおい、逃走する了見、芝居が打出と早々歸つて女房に水盃をして迚も江戸よゐ居られおいから修業して來ると言つて女房の止るを振切てスタヲ住吉町から洮出して照降町へ掛つて荒布橋へかヽりますと後から二人追掛て來て男「マアヽ遠くへ行つてゐりません親方に話をしてと云ふので師匠中村傳五郎の前へ來て面目おいから手を突いて仲「誠に今日ゐ失策ましたが堪忍して下さい、と云ふ傳五郎ゐ實に感心して傳「イヤ今日お前を見物が譽ないのゐ感ゐ堪えて譽なかつたのだ物ゐひどく感じると口も利けおい實ゐ感心した衣裝と云ひ髪と云ひ傘と云ひふ前どうして彼ア云ふ工風をしたの誠に感心なことと是

い私が大事お差た脇差だが今日の骨折に遣る明日から骨を折て遣れ、と脇差を手渡しされた時
い中村仲藏も馬鹿の樣にあつて仲「ハァ……、と泣出したと云ふこれい嬉し涙でサア二日目から
い譽る樣よなり此評が高くなりまして此の芝居が當りましたこと實に其頃よあい大當りで由良
之助にとおせの二役を尾上菊五郎、太田了作高野師直が松本友十郎、加古川本藏與市兵衛女房が
富澤辰十郎、判官い天川屋義平が大谷廣治、勘平ゲ坂東彦三郎、おかるが尾上松助と云ふので大
して當りました芝居で是から繁昌致して秀鶴い一代よ七度定九郎を致し忠臣藏をして當らぬこ
とい御坐いません夫もお遂よ三座の座頭役よなりました後天明ひのとのひつじ年正月廿六日よ
神田明神下から出火して葺屋町堺町とも一焼致し同年六月廿八日から雨ゲ降續け七月い洪水で
御坐いました其時猿ヶ股ゲ切れたと云ふ秀鶴日記に書てありますが「此度も二度迄田舍江戸定
九郎役にて水を浴ヤい故國々の水初めて一度よ身よあたり六月三日い七十餘度もうら家よ通ひ
ヤい四日勤めがたく一日い相勤りヤい皆水故なり其水い定九郎の役よて浴ヤいあり其の定九郎
故出世も仕りい今三座の座頭と相成い此度定九郎御望故あり、水と火の丸燒丸流しおしくも存
じヤさず身こそ大事と定めヤい」火と水の二ツ玉あり定九郎身よ成る金い小十郎あり、と云ふ落
首か狂歌か妙おことをヤました中村仲藏い天明七年よ小十郎おなりこれゲ定九郎の役餘波とヤ
しますこれい詳ーくヤしませんでも秀鶴日記よもありますが三十歳が初役でこれのら出世を致
したと云ふとで御坐いまそ左て御話い又二つになりまして其頃藝人で銘人とありましたい吉原
よ荻江露友と云つて荻江節を一派廣めまして誰も彼れも荻江節でおけれバあらんと芝居でしま
しても神田邊まで突放けるが又四疊半で小謠で遣つても面白く聞ゑると云ふ荻江節い長唄から

一派別に小謠で唄おことを露友が工風致しましたので是れい餘程評が好くなけれバなりません
が露友い實よ藝ゲ好く節ゲ上手で座敷で聞いても實み面白く好い心持ちよ聞けますのら吉原で
いとうも荻江さん〳〵と云つて御贔屓さん〳〵と立なするが露友い品行が正しう御坐いまして
其頃吉原の花魁と云ふと大した見識のありましたもので女郎屋の旦那樣でも抱へて居る女郎に
「花魁御早う御坐いますァ、と云つた切りで返辭も致しません程伝ゑる見識のあつた時分「露友さ
ん荻江節を聞かしてくんなましョ、と云ふと露友い荻江節い遊女の聞くべきものでないこれい
大名の聞くべきものと然う云つて夫れが通りました と云ふ人した繁昌で御坐います恰ど天和四
年の秋で御坐いますが露友い始終吉原に許り引籠つて居て他へ出ませんでしたが柳嶋の妙見へ
參詣ーて合羽干場へ出まして錦糸堀を通つて仲の橋を渡つて是れから深川の北川町に近江屋喜
左衛門と云ふ大家がありまして夫れへ參りますよ仲の橋を渡りましたがヂリ〳〵暑う御坐いま
して殘暑が強いから何處かで一寸と休まうと思ひましたが彼の邊にい休處もありませんが前に
い時々來よして應を掛けました彼の番小屋へ來ましてサア「お茶を一ぱい下さい 私「ハイお掛けあ
さい此方等へお掛けおさい……チヤまァ何うも暑さかへ「ハイ、アノ、
久之く來ませんでしたチヤ見違へた子ー元服したから、お阿母さんいお達者かへ夫れい何うも暑ヤア何うもまた長んなお年でも
母い昨年の七月死去ました「露「チヤお死去かへ夫れい何うも「ハイ、アノ、
おかつたが、五十にいなりますまいが氣の毒あとをしましたテーいのかへ秋「ハイ子い一人で、母が存命の中能くお掛け遊バしても別に何んとも申ませんがお歸
りの跡で母が私よ能く話ーを致ましたが貴方い儘か何んで御坐いますテ津輕樣の森樣で被入

一派別に小聲で唄ふことを露友が工風致しましたので是れい餘程聲が好くなければなりません
が露友い實よ聲が好く節が上手で座敷で聞いても實お面白く好い心持ちよ聞けますのら吉原で
いどうも荻江さん〳〵と云つて御師匠さん〳〵と立てするが露友い品行が正しう御坐いまして
其頃吉原の花魁と云ふと大した見識のありましたもので女郎屋の旦那樣でも抱へて居る女郎に
「花魁御早う御坐います」ア、と云つた切りで返辭も致しません其位ね見識のあつた時分「露友さ
ん荻江節を聞かしてくんおましョ、と云ふと露友い荻江節い遊女の聞くべきものでないこれい
大名の聞くべきものと然う云つて夫れが通りましたと云ふ大した繁昌で御坐います恰ど天和四
年の秋で御坐いますが露友い始終吉原に許り引籠つて居て他へ出ませんでしたが柳嶋の妙見へ
參詣して合羽干場へ出まして錦糸堀を通つて仲の橋を渡つて是れから深川の北川町に近江屋喜
左衛門と云ふ大家がありまして夫れへ參りますよ仲の橋を渡りましたがヂリ〳〵暑う御坐いま
して殘暑が強いから何處かで一寸と休まうと思ひましたが彼の邊にい休處もありませんが前に
い時々來ましてね腰を掛けました彼の番小屋へ來まして「露「お茶を一ぱい下さい」秋「ハイお掛けあ
さい此方等へお掛けあさい……チヤまア何うもまた長んなお年でも
お母さんいお達者かへ」秋「ハイ、アノ、
母い昨年の七月死去ましたから、お阿母さんいお達者かへ」秋「ハイ、アノ、
久玄く來ませんでしたチヤ見違へたチー元服したチー夫れい何うも嘸まア何うもまた長んなお年でも
あかつたが、五十にいなりますまいが氣の毒あとをしましたチー嘸か力落しで、外よ兄弟衆いお
いのかへ」秋「ハイ子い一人で、母が存命の中能くお掛け遊ばしても別に何んとも申せんがお歸
りの跡で母が私よ能く話ーましたが貴方い儘か何んで御坐いますテ津輕樣の森樣で被入

ひまそヂー露「エ、私かへ是れゝ妙だ何うして知つて居るへ秋「私も幼少時分津輕様のお屋敷よ
居りました露「へー左様かへ夫れゝ何うも……ハイありがとう別よ入れおくつても宜いに番茶
で宜しい……エー左様かヂエ津輕の屋敷へ親父が勤めたのかへ秋「ハイ貴方御存知で被入いま
せう私の親父ゝ菅野紋次郎と申ます露「アノ菅野エー其うかへ菅野ゝ死去られたかへ秋「ハ
イ死去ました故お親母と私ゝお屋敷を出ますると様あとよありました夫れゝ恰ど十四年跡私が十
一の時で御坐いますが青山の櫨田原と申します處で切殺されましたので不覺の至りと云ふお咎
めでお屋敷をお暇になりまして母親と二人で居ります時分母に連れられて芝居へ參りましたら
貴方がお出あすつて彼れゝ元お屋敷に居た重役の森様と被仰と申され私ゝ年ゝ往ませんでした
が覺て居りますが其後ゝ芝居へ出あいで吉原よ被入ると伺ひました露友ゝ菅野紋次郎の殺され
た事を初めて聞ました露「菅野が殺害よされてウーン何うもヂ二悪い心掛でゝあかつたが夫れ
ゝ〳〵、あるやど其うかへ其う云へゞ何う紋次に何處かお前似て居る様あ處があるヤレ〳〵何
うも其うかへ近頃ろ此處へ來たのかへ女「ハイ此處へ參りましたのゝ昨年參りました、お屋敷も
近いから斯う云ふ事をしていあんだからッて阿母も厭がりましたけれども外に致し方もあく涙
人者でこれへ參つて居ります露「其うへ……赤坊が泣てる女「ハイ露「最う赤坊か出來たか
へ早いものだヂこれゝドウ……良兒だ女の子かへ、其うのへ何うもあんだヂ娘子が子供の出來
るのゝ早いものだ、何かへお前ゝ最う何才よあるへ……其うかへ其んなよあるろへ其うのヂ、其
うだらうお前が十歳の時私が屋敷を出たとして最う四十歳だから私ゝお前へ災難で屋敷の者に
切付られた位で屋敷の前ゝ汙濶通れあいから深川へ行くに此方へ出て來たが、其うかへ良兒だ

ヂ御亭主ゝ何物だへ秋「イエ亭主もありません露「亭主がおくつて子供の出來る十訝いヂ
嫌致が宜いから近處の金持か何かゝ一寸お前を内所で世話ァする譯かへ秋「私の様あ不嫌致ヂ
者殊に旦那取扱ゝ母が堅う御坐いますから其んあことゝ御坐いません露「亭主がおくつて子が
出來るテ御前の子でゝあいのかへ秋「イヽエ私の子でハイ亭主がないに因果とーて斯んなもの
が出來ました露「それゝ何う云ふ譯で秋「何だつて人様あお話しゝ出來ませんので露「ダッテ配
偶しなくつて子供の出來る譯がない何う云ふ譯だへ秋「何だつてお話ゝ出來ません露「夫れジヤ
ア親がおるのだらう秋「それゝ親ゝ御坐いまセがあるとも何とも分りませんので露「へエ、それ
ジヤアあの芝居で致す、つい轉寐のころびに露のちぎりが綠のゝしヂ、義しやと云ふ文句が
ある彼れだヂ年の往あい時分よゝ何うかすると鳥渡手が障り足ガ障り顔も碌に知らあい人と風
とした處から種を妊すとガあるガ其う云つた様あとかへ秋「貴方様だからお話致しますが其人
の顏ゝ能く覺ゑて居りますれども何處の人か薩張分りません因果で御坐いまして斯んお者が出
來まして人様に何うしたと聞かれまするとモウ何うとも云ひ様が御坐いませんのら名の付様も
御坐いませんでヤア未だ名も付けません露「名ガあい名があくつてゝい喚ぶに因りますヂ秋「です
から皆様が來ていイ、兒だ〳〵と被仰るのでイ、兒と付けイ、兒ちやんと申ます露「イ、兒ち
やんか成程ドウ……抱こ、これゝ佳兒だヂ愛敬のある阿母さんにあつたら樂しみだヂ親父様ゝ
何だか分りませんか嘘でせう明して聞かせても宜ジヤアあいか秋「往けません小便をすると往
けませんおしめを取換升、元と御屋敷に居た森様だから打明て去年七月廿一日に駈込んで來た
武士よ辱のしめられて唯た一度で此兒を設けたガ其人が手込よ母を切殺して出て行ヒ親の仇の

種を妊して漸く〳〵産落したが實ハ斯う〳〵とも言兼て唯モジ〳〵して子供を抱て居ります　露「親父様ハ何處の人だへ、何かへ芝居抔でする又た逢ふ迄の紀念と云つて何ぞ置て行たりするが其んお事ハないか　秋「其んあことハありませんがアノ跡ゟ遣して行ました斯んお物がお坐いますと脇差をさして居りましたが何うかして扱けて落しましたか故意と落ーましたか知れませんが御坐います　露「ドウお見せ　秋「貴方だからお見せヤーますお秋ハ隠して置ましたか小抽斗ゟ持つて來ました例の小柄　露「是れハ何うも結構お代呂物、菊ゟ胡蝶の飛んで居る處これハ銘作だ後藤祐乗大したもの親父様ハこれハ立派ナ武士で此の小柄を持つて居るゟらハ大した方だ銘ハ左近太郎だ大したものこれハ立派ナ人だヨ　秋「何處の人か知りませんがこれを持つ人だから宜い方ゟ違ひあい定めし脇差も立派だらう小柄ゟ揃がついて居るから私がこの此兒に名を付けておげよう　秋「何うか其うなすつて有がとう御坐います　露「墨斗もあるし幸ひ扇子が白いから書いて上げようと墨斗を扱いてスラ〳〵と認め　露「これをお前ゟ上る　秋「有難う御坐います本當にまア有がたいとで　露「置く霜めんこれハ風雅集に出て居ります紀の貫之の歌で白菊ゟ霜がかゝつて霜の色が白菊の色か分らぬがいづれか本の色ゟいゝあるらんで霜が解けれバ本の色を現ハす、何處の人か知れぬが自然遁近ふ時節があらうと祝して書いたのでお菊と云ふ名が宜い芽出度いから　秋「有がとう存じます……坊ヤお前の名ハお師匠さんがチお菊と付けて下すつたヨお師匠さんハ名付親で、有がとう存じますお菊や〳〵と一度に急ゟ名を呼びますおお菓子を持てナンダチ　秋「何うぞ召上つて美味いお坐いませんか　露「見世の賣物ゟ取つて困り升チーエ……頂きます、と茶を飲んで居りますと向ふの出羽屋と云ふ菓子屋の軒下に五ツか六ツゟある色の白い二重臍の圍栗坊主の子僧が三ツ計りにある大きお子を結び帶で脊負ひ俯向いてねん寐子歌を唄ひ乍ら蚊屋賣の眞似をして居升が其聲の美と賣ゟ鶯の啼く様ナ聲で、昔し蚊屋賣りとヤすものが參りました聲自慢で萌黄の蚊屋母呂蚊屋を賣て北行ましたものでその眞似で　露「旨いものだチ　秋「ヘエ　露「向ゟ居る子僧ハ蚊屋賣の眞似が旨いチ　秋「彼の子ハ種々物賣の聲眞似を致します　露「實ゟ美聲だが何處の子だへ　秋「彼れハ河内屋とヤす米屋に子僧奉公に這入りまして大きお子を脊負て居りますが子の方が頭が大きい様で　露「子僧〳〵此處へ來い菓子を遣るから來ナヨ、何も攫いゝ來ナお菓子を遣る……サア是れを遣ると、廣蓋の菓子を取つて遣ると嬉しさうにナヨロ〳〵と歩行いて「子僧「おばちやん　秋「チヤ旦那樣ゟお菓子を戴きこれハ僥倖だお戴き　露「イ、子だチ　子僧「アノチ此の兒ハ眞似をするの、坊ハ夫れだからチ敷紙賣りの眞似をしたりヤアトコセエを遣つたりすると寐の、唯ねん寐子せエでハ何うしても寐ないで頭をむしるから痛くつてショがあい　露「イ、嬶致ナ愛敬ナ顔でお前最う一ぺん遣つてお聞かせナ蚊屋賣の眞似を、お遣りナ、お菓子を皆んナ遣らうチ　子僧「有がとチ夫れジヤアおぢさん皆ゟお呉れるかイ有がたいチ坊ハ一ッ喫べて跡ハ父ヤアに持つて遣るから皆ゟお呉れナ　露「爺やアよ、其うか夫れジヤアこれを持て……落すと往けあいが紙を、袋ゞあるサア是へ入れてこれで宜い是を持てお出で子僧「有がと……おばさん有がと　秋「お前仕合せだヨ旦那が下そつて蚊屋賣をお呉ひヨウ子僧「たゞア遣れあい　露「宜いからお呉ひナニ〳〵お前子僧ゟ這入つて居るのかへ親父や阿母さんハ居ないのかへ子僧「アノチ親父ハチ、アノ

往けないとにおつて仕舞つたの、親父ハヲ歡樂お親父でヲ、アノ久しく坊が幼稚い時分田舍ノ行て仕舞つてヲ些とも歸らないで五年も居おくつて阿母ちやんがヲ坊をお阿母ちやんが一人で坊ハ段々大きくおつて夫れで去年歸つたので漸やく歸つたと思つたら又其うするとヌ居おくなつて阿母さんがヲ歸つた時ハ嬉しがつて今よ親父が元のお武士さまよあると坊も刀々さーて歩行けるテ嬉しがつたゲ居おくおつて仕舞つた露友い子僧の話しよ思ハヲ哀れを催しまして 露「何處へ行た子僧」何處てエ縛られて 露「盜賊の何かしたのかへ 子僧「其んおとを言ふのでないテ露「ヤアゲ云ふがヲ八を殺ーたので其ふ云ふとお前ゲ脇よ舉公して居ても居られないうら言ふナてエ云ふがヲ親父ハ縛られてお仕置よなつたの、其んおとを言ふナてエ露「其う云ふ親父かお前元ハ武士かへ 子僧「元ハ立派ナお旗本だつたつて往けおくおつて若い時分にハ往けない親父でありつたッて爺やアが其う云ふの、助倍でお酒を飲むと往けおいて夫れでヲ他所のおぢさんを殺したのだつて夫れが知れてヲ段々糺されて縛られてお仕置よおつたッてそれを聞いて阿母さんがヲ齧梅が急よ惡くおつて狂氣の樣におつて駈て歩行て爺やアが追駈廻る身を投げるてエ聞入れないのを漸やく連れて來たが逐々病氣よおつて阿母ハ死んで仕舞たんで爺やアハ泣て許り居て達者お爺やアだつたが、本當の爺やアヒやアで日雇取をして居たのだけれども親父が縛られて阿助爺やアで夫れがヲ何だアヲ驅健お爺やアで母が死で仕舞てから落胆して何もしないで唯泣て許り居て氣分か惡くおつて困るんで爺やアがヲ困るから坊お飯を喫させられないから河内屋と云ふ米屋で子傳がないからアノ喫させられないで子傳をさせるハ齊みませんけれども私ゲ長く寐て居て坊やよお飯を喫させるとが出來まゐんから行てお呉んおさいと其う云てヲ其れから彼處の家へ子傳お行たゲ子が大きいので重たくつて往けおいの、夫れでヲ泣て許り居て癇持の子でヲ私の頭へむしり付くので痛くッて往けませんと云ふとヲ其んおとを言ふと逐出すてエー云ふから出て行ふと思ふが行くと爺やアが困ります、板の間へ寐るので蚊屋を釣て呉れおいのお米を入れて持て行く袋を被つてお米と入れる桶の中へ寐るのだヨだから坊の顏ハ食ハおいゲ足ハ蚊に食れてヲ翌日見ると廻りが瘤だらけよおると餘まり轉げるッて呵嗟こら厭だけれども出ると爺やアが困ると思ふから耐忍して居るの 露「夫れハ憫然よ 秋「本當よ憫然で御座いますヨ……年ハ幾つのお話し 子僧「七歳 秋「七歳で御座いますもの、本當よ憫然よ 露「何處だィ親父のお屋敷ハ言れおいかい 子僧「お屋敷ヲ直き側だけれどもヲ最う無心にも行かれおいの皆おが替つて仕舞つたの親父か惡おくおつて謠樂をするもんだから養子や何か皆お他から這入つて祖母伯父か死んだから縁切でお金を借に行くとも出來おいッて憫然お爺やアだから坊が他處でよ持て行くと爺やアハ這出ーてヲ坊ちやんハ有がと御坐いますくーてヲ少し老毫したつて皆おがヲ其う云ふ 露「お屋敷てエのハ何處だい 子僧「直き二ツ計り先の横町お屋敷ハ元と山室半左衛門と云ふノ親父ハ半次郎と云ふノ名ハ云のでハないと云がおぢさんにお菓子を貰つたから云ふのだヨ 露「山室半左衛門元と御進物番頭を勤めた其子の山室、アヽ夫れハ思ひ掛けおい恰ど今通つた錦糸堀の古小路數右衛門の前で浪籍者に出遇ひ切付られた時山室半左衛門に助けられた命の親の山室が種であるかと荻江露友い不思議の思ひをおし是れから此の子僧の東壽郎を連れて彌助の處へ貰ひよ參るお話し一寸一息つきまーして

荻江露友ハ東壽郎を山室半次郎の子と知り不思議の思ひをなし　露「坊ヤお前の爺やァの處へ私を連れて行て呉れおいかお前の親父樣にも唯た一度だが逢つたともあるしお前の祖父樣よ私ハ恩を受けたとがある實ハ元お屋敷にお前の親子傅をさせて置くのハ氣の毒で前よ恩を受けた人の孫だからお前私の子よおらおいかおぢさんの子よおるおらバ爺やァよ話しをして私が貰ふが何うだィ子になりませんか　東「ヤァ、其うかイ嬉しいヂあの子皆あゞ其う云ふのアノ爺やァが段々年をとつて拇梅が悪くあつてから明日よも知れおい若し死んだ時ハ彼の子ハ何うそるだらうと皆なが然う云つてるのダカラ彼の子ハ他へ遣つたら宜からうと云ふと子爺やヤハアノ何うも主人の子だから無闇に遣る譯にハ往おいエ強情張つて居るのだらら却つて困る斯う年寄の強情ッ張ハ困る馬鹿ナ爺だつて其う云ふノ露「其う云ふ氣象ジャア唯ハ遣るまいが私が一處に行て逢てヂやしませう、譯を言て爺やァの困らおい樣に煩つて居て定めし難儀だらうから屈ぬおがらも私が救つて困らおい樣にしやう　東「アア嬉ーいヂおばさん此のおぢちやんお爺やァを救つて貰へバ一番宜いの爺やァハ病臥居ておお飯が喫られおいのら坊が朝お飯を貰つて喫る時潜と手拭へ包んでお飯喫べた振りをして爺やァお持てッて遣ると爺やァハ嬉しがつて泣きあがら喫るのでアノお前さんのお蔭で活て居るのだつて然う云ふ爺やァを助けて呉れるおれバお前の子にでも何んよでもおるヨ　露「善い〳〵可愛い子だ人情の深い子だ……アノ私ハ此子と一處に行から秋左樣で、直き此の横町ださうでお歸りにお寄りおさい　露「誠よ微少たが、と茶代を置いて子を背負たおりの東壽郎が手を引いて出掛けました　東「私の家ハ此處の豆腐屋といかけ屋の裏の一番奥の家で根太が抜けかゝつて居て溝板が不良から長屋の人が苦情して居る　露「何か能く分るヂ發明な子だ　東「爺やァ〳〵　彌「ハイ、アア又案じて來たヂ私が病臥居ても度々此處へ來ると又苛嘖れて御内儀が腹を立つて打擲られる案じて來て呉れるナァ忝けおいが宜くねへから餘まり案じて己が側へ來ねへ樣よヂニ　東「爺やァ、アノ來まいと思つたけれども此のおぢさんがヂニ爺やァを助けて遣るてニ斯んおよお菓子を貰つたから一ッ喫て跡ハ皆あ貰つて來たヨ　彌「何卒此樣ナ不潔家で鹽梅が悪いからお茶ァ一ッ上げられませんが此處へお上りおそつて　露「ハイ御免おさい……お初よお目に掛りまして「ハァおんてニ被仰る　露「初めましてお目よ掛りますが私ハ只今吉原ホ居ります荻江露友とやす唄うたひだ彌「ハイ謠を唄ひおさる　露「イヤ謠でない唄をうたふ者で　彌「ハァ何御用で御坐い升か　露「私ハ只今でハ唄うたひよありましたが前よハ津輕藩で森とヤした者で恰ど今年で十七年以前に錦糸堀でヂ此子の祖父樣よ助けられたとがあるのでまァ其の山室のお孫さんとハ知らず美聲でヂ蚊屋賣の眞似をして子供を寐かし付るを聽て思はず喚んで段々身の上を聞くと親父樣親母樣ハ屋敷を出て死去あられ忠義のお前さんが日雇取とか云ふーがおいとで此子をバ養育ふ處がお前さんが煩つたよ付て米屋へ子傅よ行て斯ホ小さお子が斯ホ大きな子を背負て居るも唯お前を助け度と云ふ誠よ情の深い子で嘸お前さん煩つてお困りであらう實ハ山室半左衛門殿よハ關らずも危險處を助けられた恩義があるから何卒を前の側に置けバ差支もありまそまいけれども此の子よ最う些と上等のことをさせ度と思つて私ハ今ハ藝人で零落果た身の上あれ共貴顯衆の前でも唄をうたひ聘れバ大名の前へも出られる身の上よなつて決して私ハ鹿末にハ育てな

第十七席

（荻江の一節）

いがと云ふ半左衛門殿に御恩を受て居る身の上殊ゟ半次郎殿よも一度逢たともある夫故此ゟ
ん私が貰つて子ゟ仕度が私ゟ下さらんか彌「ハア〳〵、ア、有難う御座います〳〵貰ひ子旦那様
此お坊ちやんの親父様ん〻ゟ遊樂で御座いまして屋敷を出る様ゟとゝおりましたから他から養子
ゲ來て只今でい山室の家ん立て居りますが屋敷へ出這入一ッ出來ませんが親父様の身持が悪い
からで其親父様ん罰が當つて飛だ死様をして續いて親母様が死に、なんてゝ運の悪い方で御座
いまして世が世なれゞ奥様と云はれる身の上己が様ナ爺の側に居て日々日傭に出て日ゟ暮
く八十も取て來る身の上の不潔家ゟ寐まして泣をさせまいと思ても年寄で情でアノタ五十五で
御坐いまそゲて其ゟ老朽た年でもねへが心配そるから身体をぶち毀し煩つて據處なく寐て居
るが私が死だ時ん此若様と何處でも世話をする者いないのら何卒責て十四五ゟある迄達者で居
てゝと思ふが何分にも壽命づくなら仕方がねへ病で居りますが私ん是が忌に掛つて居りまし
がゟ前様ん山室様と御馴染で御坐いまそか露友ん爾助を慰めあがら露「私ん其の以前この錦
糸堀を通り掛つて悪者ゟ切付られた時古小路の屋敷から半左衛門様が御出掛けゟあり私を助け
て下すつたが恰ど九月の十三夜で忘れもしません彌「ハア夫れじやア お前様ん森庄五郎様てゝ
お方露「能く知つてるて彌「能く知つて居るてゝ私ん お前様彼れ時提灯を切落されて溝へ飛込が
ハ〳〵して居たゝ露「御前さんが彼の時のお供かイ彌「ハイ斯んお爺に成ました露「ハア夫れん
彌「夫れゟれゞ安心したて何のお前様大事に掛て育てゝ下さい頼りゟい身の上だから露「ハイ確
と受合ましたお前さんん感心な忠義ゟ方だ彌「忠義も何も斯ゟつていゝ出來ません仕様がお坐い
ません借家住ゟ住度もねへが誰も受人ゟなつて呉れる人ん なし少しの手蔓で此處へ來る様ゟ事

よおつたので何分にも願ひ升ヨ　露「安心しお慥かお預つたから是から私が米屋へ行て掛合つて子供ハ向ふへ遣て此子ハ直に連れて行くこれハ誠よ持合せでたんとハおいが置て行く何れ又醫師も來さうし雇婆アさんの一人も付けるが藥を煎じる手當も入るは是れハ少しだが三兩あるから是れを　彌「飛でもねへ此の若樣を貴方ゲ育て拾ひ上てさへ下されバ私ハ直ぐ死去ても惜くない私ハ中々金ハ貰へねへ　露「イヤ其あとを言てバ困る何うぞ是れを受取て、堅い爺で受おいのを無理よ與へ是れのら子供を連れて河内屋と云ふ米屋へ行つて是々と話を致して東壽郎の手を引いて歸りましたが是れのら大事に掛けて育てますると云ふので彌助爺よハ雇婆アを附醫師を連れて行き、藥を服せ丹精ましたから先づ一度ハ彌助も全快致しまして　露「ヨロ〳〵露友の所へ尋ねて來る露友ハ東壽郎を立派ナ者よしたいと思つて側へ引付てハ荻江節の稽古をする固より器用お子で聽覺えて荻江節を遣るに中々三年五年も習つた人よりハ天然備ハる藝で至つて上手で男振が親父の半次郎に似てソノ何うも愛敬の有升と品の良いィ、男で夫で志ざしが母親に似升たから此上もおい處の好男が出來ましたが爲人ハ別で御坐います荻江露友ハこれを可愛がりまして其上よ藝が出來るので當人も藝人になり度と云ふのので仕方がおい備つて居るので二代目よしたが宜いと云われ是れを荻江東壽と仕ました是れが銘人東壽とあります後繼號して蚊屋賣東壽と云つた子供のうち蚊屋賣の眞似をしたからで斯て安永六年十月十五日よ彌助爺ハ死去ました露友も東壽も共よ參つて親切に世話を致し野邊送りも濟せ最う此頃ハ東壽も藝人で黑の羽織を着る樣よ成りました　秋「何にお藝人でお飯を喫られる樣に成ましても裏參りを致し彌助の佛事供養をして歸り掛に馴染だから仲の橋の番小屋へ寄まして　東「おバさん何ぞ、と云ふ中美濃屋と云ふ蕎麥屋へ駈て行ました東壽ハ獨り升から吉原ハお女郎や藝者衆が大層多勢居り升から貴方何で御坐います吉原よおいでおさい升

ん誠よ暫く秋「チヤ何うもまア見違へる樣に立派よお成おすつたとサ　お上りおさいヨ　東「おバさんチヨク〳〵來度と思つても爺やアのお墓參りも致しませんで修業中ハ一生懸命で何處へも出すよ居り升まア親父よ八釜敷云われ何うやら斯やら藝人で妻子を養ふ樣よ成りました　秋「何うも本當よ立派に成ましたテ藝人衆の樣でハお坐いません矢張若殿樣の樣だつてテ何處の若樣が今日尋ねて入らしつたか本當に品の能い彼んお藝人が有うかと云升ヨ本統にテ……アノお菊やお茶を持ておいで　菊「ハイ、とお秋の娘お菊當年十六歲よ成升くづれ島田でも人柄お是れも嬉致好しの愛くるしい姿で　菊「お茶をお上りあさい、と茶碗を置おがらジロリつと見ると此御菊どう云ふ緣か眞に好男兼て阿母樣から聞て居るがシミ〴〵見バ見る程ィ、お方、と眞實此娘が東壽に惚たのハ惡緣でお坐いますモジ〳〵して居ります　秋「アノ何で其樣にお急ぎおさらずとも、お寺參りをして來たの、夫れじやア宜ジやアありませんか東壽は一寸少しバかり紙に包みまして　東「今日ハ急いて來ましたらおバさんお土產を買つて來る譯にも往きませんで是れハやんの心許で、私が脇で御祝儀を頂だきましたのを親父に溜て置いて貰つてお寺參りをして來ましたが是れでお菓子でも買つて　秋「其んあとをあすつて却つて困りますお氣の毒樣ナ（ジヤア私がお蕎麥を御馳走致しませう私の方で香奠をしあけれバ成りませんが手向替りよお蕎麥ハ玉子とな、何が宜う御坐いますり坐つて居ります處へ惚て居てエものハ妙なものでお菊ハ何だら口も利れず唯ニヅ〳〵して居り升　東「お菊さま大層大きくお成りなすつた　菊「ハイ阿母樣と仙時でもお噂許して居りましたが

（荻江の一節）

方の様ナ美麗い方ハ御辛抱ハ出來ませんが能く堅くして入つしやるて阿母様が何時でも然う云つて東「ヱ、一生懸命に藝の上手よあるまで三十迄ハ柳島の妙見様へ女を禁て仕舞ひ何あとが有つても女よ手出しハしまい志ー藝人よ成つた以上ハ天下お名を成す様ナ藝人に成らうと一心で夫に親父が八釜敷から苦しみ升何うか親父よ劣まい様ナ藝人よ成らうと苦ーみ升が女よ掛り升と他のとを覺ゐて氣を反し升と往けませんから女ハ三十迄禁て居り升　菊「然う誠に結構で御坐い升ヲ、とハ云ふものゝ娘の了見でハ何んだか然う言われると色氣が醒る様でも又情の增すとで男が女を三十迄禁てヱのハ無とだが私が斯あよ思つて居る素振か知れて故意と東壽さんハ彼あとを云ふのでハ無いうと云ふ娘心ドッ〳〵と勘氣が致してカッと少し逆上致して耳タボが赤く成升、處へ阿母が歸つて來まして「秋ーサアお蕎麥を、澤山ハ御坐いませんが何ぞ、私が一ッお萌よ一ッお前さん二ッ貧乏人ですから少あく誂らへました　東「却つて是でハ、と蕎麥を馳走にあり歸りましたが東壽ハ夫切り打絕て噸と此番小屋へ來るとハ有ませんで翌年復た十月十五日ハ墓參りを致ーて立寄りました　東「誠に御無沙汰　秋「ヲヤまア何うもサア お上りあさい　東「誠よ御無沙汰致しました段々お立派にお成りあさいました　秋「貰ハ忙敷いので御無沙汰段々何で御坐い升未熟あがら皆さんの御贔負よ成まして親父も悅んで居り升　秋「お前さんハお心掛けが能から出世を成さるよ違ひないが、けれども藝でも矢張苦しひのハ同じで有らうとお噂許りヤて居升たが、種々あとを覺て居升が日雇を取て居る身の上で親母と私を救ひましたので親よりも大切で毎月行度とハ思ひ升が然も參りませんで祥月命日よハ參ります　秋「本當にお心掛ハ別で

（荻江の一節）

ヲ何時もヤて居り升マア此方等へお上りあさい　東「ハイ、菊ちやんハ御壯健ですか　秋「彼ハ死去升たヨ　東「ヘエー　秋「親一人子一人で彼あ意氣地無でも他よ子供ハあし力に思つて居り升たが世間樣でも親孝行で柔和するてヱヲ私の代りもする樣よ成升ても店を明て用達よ參りましても彼が居り升うら安心でしたが誠よ可愛想なとを致しました　東「然う夫ハ何も贔お力落しで御坐いませうヲ今年……十七ですかヲ些とも、何うも、然でげすか何時お死去よ成升た　秋「此三月二十一日に死去升た　東「此ハ三月ヘエー去年十月上お上りあさいましたのですヲ　秋「ハイ、貴方失禮なとを言ます樣で御坐い升が私し共の菊ハお師匠さんお前樣よ本當よ可愛想よ焦れ死をしたのに違ひ御坐いません　東「おばさん串戲を云て　秋「イヽエ本當よト云のハモウ子供心よもお前さんがお出あさると彼あ優しい宜い方ハあいと云升から彼な優しい亭主をお前に持せ度と迂濶云とヲ近處ハお出成つて當よ彼云方あれバ向樣で嫁ハ呉れと被仰れバ遣るがお前一人だから遣ハいとヤ升と阿母さんハ前此處の家に樣家督が有でハあーハ何成ても宜しやアないか万一して私の樣な者でも東壽さんが貰度と被仰たら遣て下さいと言升から去年お出で成つて貴方がお歸りあさると夫から憔悴して容子も訝しう御坐い升て正月抔ハ貴方まるで泣て許り居升て漸いで居升から何か想ふとハ無かと尋ね升と何も言升んで床の上で嗟泣許で三月お死去升前の日に阿母私ハ迚も迚も助りませんから親不孝を仕升けれども私ハ東壽さんの事許りハ諦められませんで斯お病氣に成升たと云ーて戴くとヤたゞイヽエ東壽さんハ三十迄女を禁てお仕舞成たと被仰て、私が訝お素振を忘た

ものだから然云てお斷成つたから私ゐ嫌れたのだから東壽様にお目ゐ掛り度ゐ有ませんけれど
も阿母さん私ゐ東壽さんの女房ゐ成ぬい位ゐなれバ死だ方ゞ宜と思詰まして段々斯ゐ病氣ゐ成升
たとテ漸とのとゐ言升たゞ彼ゐ可愛想でした死際ゐヤて夫が別れで死去ました貴方の養父が名
付ゐ書て下すつた扇子を死去前に持たせまして呉れとヤ升から持たせましたら夫を左の手に確り握
り升て其して私の右の手を斯う握つたあり様で死去升た斯ゐとを私が貴方にヤも誠ゐ失禮と存じ
升て餘り蓮葉ゐ了見と思召れしないかと存じお知せもヤませんでしたが貴方焦れ死致し升たも
何ぞの因緣で御坐いませう何卒貴方可愛想と思召ーて御線香の一本も上て下さい東壽ゐ委細の
話を聞いて驚き升た東「誠ゐエー何も然で御坐い升かまァ私の様ゐ者でも夫程迄に想つて下さ
るゐ斯ゐ有難いとい御坐い升ん幼少時分からのお馴染ですから責ていも枕元でお藥でも煎じお呑
中の一ッも摩り升ゐ家へ一寸斯云大病と被仰つて下されバ養父も來し升に然言て下されバ宜つ
た……まァ〳〵御線香を上升う秋「何ぞ上て下さい無ゐ菊が悦び升う東「南無阿彌陀佛〳〵、と
蔭らしく立上り線香を佛間へ手向て頻ゐ佛名を唱へて居升秋「お茶を一ッ上升う東「まァ十六迄
育てた娘さんに死れていゐ無落胆ゐすつたらう　秋「夫も約束ごとゝ思ひ升が私の身に取り升と親
父のゐい娘で御坐い升から死だ方が宜かと又諦めるとも有升てヲ　東「親父様ゐゐんですか何云
ふ御身の上かまだお行衛ゐ知升んかへ　東「お前さんだからお話を致し升が決して何卒人に言て
下さい升ゐ是ゐ約束だと思ひますヨ東「〳〵…何う云ふ譯で秋「實ゐ菊の親父ゐ譯の分り升ん涙
八者で御坐い升て今年で恰ど十八年跡忘れもーゐい七月の廿一日ゞ大雷鳴か有升た時日の暮々
よ私の處へ雨に降込られて駈込で來た武士が御坐い升て其人ゐ無理無体よ落しいとゞが私が强

姦て唯た一度で私の業で子ゞ出來升た夫も宜御坐い升けれ共手押にされて私共の母が泥坊ーと
大さゐ聲を云て怒鳴升と其貴方、武士が扱打に母を切て逃升たので私もハッと驚き升て其處へ
泣倒れて仕舞其間に武士ゐ逃て仕舞私も唯泣て居升たが近邊の方ゞ來て何した〳〵と云ひ升た
が母ゐ切れ升たと言ても私ゐ濫行をされたとも少され升んで夫成に隱ーて終せて撿死沙汰何やか
や近邊の方が深切よ葬式迄心配ーて下さい升たけれども其月のら身重に成升て十月經て産落ー
升たがお菊で夫故名をも暫く付ませんで
牌へ宜うと存じ升て、私も人様を相對ゐ
も引籠つて尼よでも成うかと心得て居升
父様の露友様よゐ目に掛升たゞ此ヂ小柄
ので東「小柄を秋「ハイ私が濫行をされます時滑て拔落升たが何かして是が　東「エヽヂ大層立
派ナ小柄、ト見ると金の板子よ菊よ胡蝶の彫物左近太郎宗吉の銘是ゐ親半次郎が私に讓ると云
て見せた永正祐定の脇差ゐ着て居た小柄ァ、夫でゐ己の親父が番小屋の娘を差ーめて母親を切
殺ーて逃たとか親父ゐ如何あれバ斯ゐ惡事をト唯呆れ果て居たが風と氣が付たのでァ、此處の
家の娘を若此阿母が嫁に貰て呉れゐい時ゐ焦死をするで有うと露友に云ひ私ゐ義理づくで女房
ゐ宜いとで有たが私の親父とも云れず氣の毒ゐとをと思ひ顏色變て暫く念佛を唱へて居升たが
何思ひ升たか起て來升て露友の書升た扇子の裏へ直に筆を把て一首の歌を書升た「荻の葉も契
りありてや秋風の音づれ初るつまとなるらん　東「此扇子へ書ていゐ濟ゐいが私の意で是をお菊さ

んよ手向度秋「有難う御坐い升嘸當人も草葉の蔭で悦び升う東「此心い荻の葉も如何ある前世の宿業か因緣でも秋風の音づれ初るつまと成覽、つまと云ふい物の端と云ひ端い物の初で私が心有て書たので何よも言ず佛樣へ手向て下さい秋「有難う御坐い升東「併しおばさんお前の娘を女房よすると私も活ていい居られおいまア跡い決して言升んが皆約束ごと、諦めてお呉あさい、と云ながら懷中より幾千か出して東「これい阿母さん志許だが手向て塔婆でも建て下さい、と置て歸り升たがお秋い唯た一人の娘よ死別れ何樂みに世の中にと是から報恩寺へ參り升て和尙樣に賴み剃髮致して秋月法尼とあり門を這入まして左の前よ地藏堂が有升、あれで念佛修業して相果升たと云ふ扨此東壽が二代目荻江露友と成升が三代目喜三郎東壽と云い深川よ居升して一端半次郎の女房よ成升たお絹コナ家の妹で此お絹の身よ因緣あつて自殺致し其死骸が流れ着て來ると云ふ三代目喜三郎東壽の話しよ癒きます因緣で御坐い升が三代目いまだ腹稿が出來升んいら二代目丈で御免を蒙りまそ

月謠荻江一節終

鏡ヶ池操松影序

人の善惡を寫すもの乃ち鏡あり說ク神ある鏡を供くて意心（新）
邪穢あるをつて利益を賜ふと云ふ爲めあり。然れバ。地獄の佛
画を描きし圖ふも淨頗梨鏡ありて閻羅王の惡を呵責お現世の
況を礼もあり。是れ。時ふ。勸懲の意を人ふさんとすればあり。予。是をつて。善ふる人の世よ切を立て道を行ひ。或ひい忠或ひい孝。其他すべて善の美事を爲て後人の模範を爲るものを上て名鑑（即ち鏡）と云ふあり。予觀勝居語家ふ名ある。圓朝子の著作し鏡ヶ池操松影を讀ふ。感嘆ふ堪へ。其人と爲りを元伸のめき好悪と共。

於里劇册

元仲妹於里

江島屋治工門

治左門後妻於仲

雀堂 丰方

久津見半左門
久津見妻於雪

浪人安兵衛
番頭金兵衛

左官甚吉
江島屋治平

治平妻小松

倉岡元仲

伴野林蔵

鏡ケ池操松影

三遊亭圓朝演述

若林玵藏筆記

第一回

落泊兒漢脅二少年一　慈善豪商救二溺童一

扨申上ます高聞よ達ますお噺い外題を鏡ケ池操の松影と申まして天保五年の冬江戸吉原の松葉屋の抱小松と申します娼妓が武州石濱なる鏡ケ池よて兩親の難敵を討父の家名夫の家を再興致ましたすえお愛度お噺でござりますが何事も昔と當今とい相違致まして子供衆のお遊も從前い橋の欄干をかけて渡つたり又い傘を車よして車力のま

治定のめでたき溫厚萬實お蔦のめでたき義俠等人の心の況て
ゆくで實ホ不可思議といふべし因人若ちもろくのおのが將と奇なめぐみ
述と娶すまで池ろお自己か姿と愛し善惡左報の理りと示
よずがるも異ひて殺れしる金澤ホ感ー序ろく津

明治廿三年

國會無後の春

東都　岳民　誌

ねを致す様な事でございましたが當今の子供衆い左様な事いござりません動もすると義務だとか權利だとか被仰りまして議論をなさいますが昔の小僧さんの喧嘩い愚なとを申したものでござります深川清住町の川岸で夜の九時頃よ二人の小僧が爭闘をして居ましたが一人い商人の小僧と見まして十五六よて色白く竹のふしの若衆髪風呂敷包を脊負まして下り雪駄をはいて居ましたが敵手の小僧い職人体で目倉縞の洗ひざらした股引腹掛よ印半纏を裏返しよ着て素足よ藺草履を穿き十六七よて毛毬栗頭見かけが悪々しき小僧でしやがれ聲を出しまして「ヤイ〳〵手前の歸りを待てゐたんだ喧嘩をしやアがれ　商小僧「オヤいけませんねエ通る度よ窘めるせ　職小僧「ナンデイ〳〵

行よ手前の方から自家の前じやア蛤貝他處へ出りやア蜆貝と言やアがつたからだ　商小僧「それでも御使よ通る度よ窘めるよ　職小僧「ナンデイ尿を喰うから摑掬して持て喰やアがれ　商小僧「ナンデイ尿でも喰やアがれ　職小僧「何を言やアがるんデイやかましひヤイ　商小僧「喧嘩ましけりやア藥鑵でもかぶりやアがれと無益らぬ事を言合果い摑合よなりましたが職人の小僧い力があります故ら拳をかためてポカ〳〵打り此方の小僧も一生懸命挑み爭ふ其所へ通りかゝりました男子い黒の羽織に小脇差山岡頭巾で面を隱し川風をいとひながら板屏ぎわへ付て參りましたが見るよ見かねて中間え割り入り　男「コレ放せ放さねへかコーレと職人の小僧を突退け惡い奴だ